

鹽原多助一代記

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

序詞

炭売のおのが妻こそ黒からめと。吟ぜし秀句ならなくに。黒き小袖に鉢巻や。其の助六
すみうり
がせりふに云う。遠くは八王寺の炭焼。売炭の齒欠爺。近くは山谷の梅干婆に至
る迄。いぬる天保の頃までは。茶呑咄しに残したる。炭売多助が一代記を。拙作なが
ら枝炭の。枝葉を添て脱稿しも、原来落語なるを以て。小説稗史に比較なば。所
謂雪と炭俵。弁舌は飾れど実の薄かるも。御馴染みが、うちよす、まくらことば、ぜんせき
ギツシリ詰る大入は、誠に僥倖当り炭。俵の縁語に評さえ宜を。例の若林先生が。火
鉢にあらぬ得意の速記に。演舌るが儘を書取られしが。写るに速きは消炭も。三舎を避
る出来栄に、忽ち一部の冊子となりぬ。抑この話説の初集二集は土竈のパットせし事もな
く。起炭の賑やかなる場とてもあらねど後編は。駱駝炭の立消なく。鹽原多助
が忠孝の道を炭荷と俱に重んじ。節義は恰も固炭の固く取て動かぬのみか。獸炭を
作りて酒を煖めし晋の羊琇が例に倣い。自己を節して費用を省き。天下の民寒き者多
し独り温煖ならんやと曰いし。宋の太祖が大度を慕い。普く慈善を施せしも。始め螢の
資本より。炭も焼べき大竈と成りし始末の満尾迄。御覧を冀うと言よしの。端書せ

よとの需もとめはあれど。筆持もつすべも白炭しろすみや。焼ぬ昔の雪の枝炭屋の妻程黒からで鈍き作意の炭手前すみでまえ。曲なりり形なる飾り炭。唯管炭たぐくだすみのくだくしけれど。輪炭わすみ胴炭どうすみ点炭てんすみと重ねて御求めの有これあるよう之様。出版人に差代さしかわり。代り榮せぬ序詞はしがきを。斯かくは物しつ。

三遊亭圓朝記

扱申上げまするお話は、鹽原多助一代記と申しまして、本所相生町二丁目で薪炭を商い、天保の頃まで伝わり、大分盛んで、地面二十四ヶ所も所持して居りました。其の元は上州沼田の下新田から六百文の錢をもつて出て参りました身代でござります。其の頃の落首に一本所に過ぎたるものが二つあり津軽大名炭屋鹽原」と歌にまで謡われまして、十萬石のお大名様と一緒に喩えられます位になる其の起源は、僅かの端錢から取立てまして、五代目まで続きました。其の多助の身の行いの正しいのと、孝行なものと殊に商法の名人で經濟に長じていることは、立派な学者でもかなわん程で、多助は別に學問もありませんが、実に具わつて居りますので、今に淺草八軒寺町の東陽寺という寺の墓場に鹽原多助の石碑がありますが、其の石碑に実父鹽原角右衛門、養父も鹽原角右衛門と法名が二つございますが、実父も養父も同姓名でござりますから種々と調べて見ますと、上州沼田の下新田にまだ縁類も残つて居りますから聞糺しますと、実父角右衛門は元と阿部伊豫守様の御家来で、八百石を領りました者ですが、何ういう訳か浪

人して行方知れずになりました。其の角右衛門の家に勤めました岸田右内きしだうないという御家来が
ありまして、其の者が若気の至りで、角右衛門の御新造ごしんぞうの妹おかめと密通をして家出をい
たし、本郷ほんごう春木町はるきまちに裏家住いうらやすまをいたしまして、名も岸田屋宇之助きしだやうのすけと改め、旅商いを
して居りますが、実に恋は思案ほかの外ほかでございませう。右内は忠心の者でございませうから、旅
商いをしながらも、旦那様は何方どちらにお出でか、どうかお目にかゝりたいと主人の事を片時
も忘れたことはありません。ふと沼田に主人の居る事を聞いてから、日光の中禅寺ちゅうぜんじの奥
へ三里入ると温泉がありますから、商いながら参りましたが。其の頃は開けませんから、
湯場も鶴の湯と川原かわらの湯と二ヶ所で、宿屋もあります。其の中に吉見屋よしみやという宿に泊りま
したが、道連は堺屋さかいや傳吉でんきちという岸田屋の宇之助と旅商人たびあきんど仲間なかまで、両人は仲好なかよしでござ
いますから、両人はこれから沼田へ山越しをしようと言うので、道で聞きますと、山道
でとんと往来がありませんので、極難ごくなんじよ所ところですから案内者がなければいけませんと聞いて、
其の夜よの中に案内者を頼みまして、翌朝よくちようになると、

宇「傳吉さん案内者は」

傳「今聞いてるんだが、モシ／＼宿の旦那、御案内者は宜しゆうございませうかね」

主「はい／＼心得ましたが、昨夜さくやはどうも、商あきないにお出でなすって多分のお茶代を載いて済

みません、何卒^{どうぞ}明年も御心配なくなア」

傳「いや、ほんの心ばかりです、此の宇之助さんは沼田へ行きたいという、私も煙草を少し仕入に往^ゆこうと思うのだが、大分道^{だいぶん}が知れにくいそうだから、昨夜^{ゆうべ}から案内者をお頼み申したのだが、ありましたかえ」

主「はい、案内者はもう頼み置きしました、お弁当も拵^{こしら}えましたから」

傳「何卒^{どうぞ}強^きそうなものを頼んでおくんなせえ」

主「え、強^きいのを頼みました、これ磯之丞^{いそのじやう}々々々」

傳「磯之丞^{いそのじやう}というのが案内者ですか」

主「左様でございます」

傳「弱^{じやく}そうな名で、なまめいた名ですなア」

主「なアに頑丈^{けんぢやう}なものでござりやす」

という所へ出て来たのは、丈^{せい}は五尺七八寸もあつて、臍^{すね}に毛の生えて居る、熊をみたよ
うな男がのそりと立つて、

案内「へい御案内しやしょう」

傳「どうも芝居なら磯之丞^{いそのじやう}なんというのと、突^つ転^{ころ}ばしがする役だが、こりや強^{つよ}そうだ、そ

うしてお前は素足かえ」

案「え、素足です」

脚きやはん半はも穿はかないで、ひとえもの単物ひに小倉の帯をちよつ切り結びにして、鉄砲かつを担かいでおります。

傳「モシ、腰にある毛の生えた巾きんちやく着くはなんだえ」

案「これは狐の皮こしらで拵こしらえたんてがんす」

傳「こう、どうだえ、狼は出やしますまいねえ」

案「狼は出ねえが、鱗うわばみしくや猪しほが出まさア、なアに出ても飛道具とびどうぐウ持っているから大丈夫だいじょうぶでござりやす、あんた方の荷物をお出しなせえ」

と二人の荷物を連れんじやく尺しゃくのような物で脊負せふいい、其の上に鉈なたを付けて出かけて往ゆく。

主「左様なら御機嫌宜しく、磯之丞気をつけて上げろ」

傳、宇「左様なら、御機嫌宜しく」

と暇いとまじ乞こいをして西の方へ出かけましたが、花野原を二三町往きますと、ちよろ／＼流れがあつて、別に路みちとはなく、沢を渡つて歩く、と七八町まいますと、これから山手へかゝるに従い、熊笹が生えていて、歩きたびにゴソ／＼として、朝露に袖を濡らしまし

て、段々と登るほどに熊笹は丈を越し向うが見えず、

傳「おい／＼案内さん、少し待つてくんな、狼が出ても鱗が出ても分らねえじゃねえかえ」

案「狼が出てても大丈夫でがんす」

宇「こんな所はどの位あるえ」

案「まだ甘町ばかりありやす」

傳「どうも驚いた、熊笹も鮎屋にあると随分粹なもんだが、此様なにあつちやア不意気な

もんだのう」

と話をしながら漸く登りますると、是れから金精峠と申して実に難所で、樹木は

樅松と羅漢柏の大樹ばかりで、かれこれ一里半ばかり登りますと、西の方は日光の男

体山、此方は白根山が見えまする。

傳「どうだい、ひどい所だねえ、どうだえ、何んとか云つたツけ、磯之丞さん、ひどい所

だねえ、此様な所じやアないと思つたが、これじやア鱗も出ましよう、どうだい宇之さん」

宇「ひどい所でございます、私も是程とは思いません、是れから又登るのかえ」

案「これからアはア下ります」

と云いながら、これより一里ばかり下りますと、溪の流で、どう／＼と流れる。山に

は草に花が咲いて居りますが、見馴れぬ草で、名も知れない草の花が咲いております。溪の水で咽喉を湿おして、それから一里半ばかりも登りますと、見上げる程の大樹ばかりで、兩人は草臥れたから大樹の根にどつかり腰を掛けて、

傳「宇之さん弁当を遣おうじやないか、案内さん弁当を出して下さい」

案「ハア随分草臥れやす」

傳「お前はよく馴れてるから草臥れないようだねえ」

案「私なんざア年中斯ういう所を歩いてるから、平地は却って歩きにくい」

といいながら兩人が弁当を開けると、大きな握飯が二つと、梅干の堅いのが入れてある。

傳「何うだい、大変大きな握飯じやないか、もつと幾つにもしてくれ、ばい、に、梅干は

真赤で堅いねえ、あ、酢はい、案内者さんの握飯は大きいねえ」

案「私アこいつを半分喰って、また明日半分喰うのだ」

傳「苛いねえ、茶か何か貰いてえものだねえ」

案「茶も何もありやしねえ、六里の間家がねえから」

宇「それじゃア水を汲んで来てくんねえ」

案「水もありやしねえ」

宇「それでも先刻流れていたじやアねえか」

案「ハテ山の上から搾れて打落してめえるだから、下にはあるが、山の上には水はありやしねえ」

宇「苛いねえ、すつぱり飯を喰うのだ」

と小言を云いながら弁当をつかつて、さア〜下りましよう、これから二里ばかり下りますと、里近くなつたと見えて水がどうどつと流れて、雑木山があつて、向うに薪をこなし居るは此の山村の杣と見えて、傍の方に山菅で作つた腰籠に、谷地草で編んだ山岡頭巾を抛り出してあつて、燻ぶつた葉籠と茶碗が二つと弁当が投げ出してあるを見て、

傳「宇之さん、水のある処へ来ると茶があらア、向うに杣だか何だか居るようだぜ、申し少々お願い申しますがね、私共は日光から山越をして来ましたが、此処に茶か何かありませんが、戴けましようか」

杣「はい、ぬるくなりましたるうが、宜しければお飲みなさい」

宇「モシ、あなたのお宅は此の近所ですかえ」

杣「はい、これより二里ばかり下でございます」

傳「それじゃア此の薪は背負つて下るのですかえ」

杣「いゝえ、此の難所を薪を担いでは下りられません」

傳「それじゃア馬の脊で下しますのかね」

杣「いや馬では猶いけません」

傳「それじゃア何うしますえ」

杣「この谷川へ投げ込んで置きますと、ちようど翌日の昼時分に私共の村に流れて着きます」

傳「へえ、のんきなものですなア、お茶を一つ戴きますよ」

と云つている所へ雑木山から出て来たのは、その杣の女房と見えて、歳ごろは二十七八で色白く鼻筋通り、山家には稀な女でございます。細帯に両裾を端折り、亭主の手助けをして居りますものと見え、兩人とも中よく働いて居りますを見て、

傳「宇之さん、こういう山の中の女だから猶お目立ちやすが、斯様なにくすぶつて居るが、これを江戸へ持つて往つて磨いて見ねえ、どんな紙屑買が見倒しても奥様の価値があるぜ」
宇「へえ成程、いゝ人柄ですなえ」

と思わず宇之助が見ると、八年前に別れました主人鹽原角右衛門夫婦ゆえ、

宇「お懐かしい、どうして此様な処にお出でなさいました」

と女の側にばら／＼と駈寄りまして、草原へ手を突きますと、

お清「おやまあ右内だよ、旦那岸田右内でございますよ」

鹽「お、右内か、懐かしかった」

と云われて右内は涙ぐみ、

右「え、そんなお身形にお成りなさいまして、此様な山の中にお出でなさいますか、お情ない事でございますなア」

鹽「いやもう浪人して、別に便る所もないから、此の村に元家来の惣助という者がいるから、それを便つて来て、少しは山も田地も持っていたが、四ヶ年あとの出水で押流されて、どうも仕方がないから此の通り秋は樵をして、冬になれば獵人をして漸々に暮している、実に尾羽打枯らした此の姿で、此所で逢おうとは思わなんだのう」

右「へい／＼私が家出をしましたのは八年あと、其の時はさぞ御立腹をなさいましたろうな」

鹽「其の折は悪い奴、主人の妹をそゝのかし、家出をいたすは不埒者と云っていたが、此の五六年此の方懐かしくて、実に逢いたく存じていたな」

清「そうして妹のおかめは無事でいるかえ」

右「へい達者でございます、お宅を家出しましてから、只今では本郷の春木町に裏家住うらやずまいをして居ります、外ほかに斯うという事も存じませんから、只今では斯うやって旅商りきやういをいたして居りまして、あなたにお目にかゝつてお詫わびごと事をして戴きたいと、旦暮あけくれ存じて居りましたが、此こ様な山この中んにおいでとは存じませんが、沼田の方かたにいらつしやるという事ですから、日光から山越やまごしをしてまいりましたも、若もしや貴方にお目にかゝられる事もありましょうかと、神かみ 仏ほとけを信じて居りました甲斐があつて、お目にかゝる事が出来ました」

と涙拭なみぬえば、

鹽「伴つれもある様子だが、今晚は私の家うちへ泊とつてはくれまいか」

右「へい、泊とつても宜よろしゆうございますが、商あきんど人仲間の伴つれが有ありますから、あの男を先へ帰かへしましょう」

と話わしていると、

傳「おい宇之助さんく、おや、あの女おんなにへいくお辞儀しげいをしているよ、弁当べんたうの余りでも貰もらう氣きじゃアねえか、宇之助さん何どうしたい」

右「私は今少し訳のある人に逢つて、今晚泊らなければなりませんから、あなたは明日沼田の大竹屋おおだけやという宿屋へお泊りなすつて下さい、事に寄つたら二日ぐらい遅くなるかも知れないが」

傳「左様かい、それじゃア先へ往つていよ、お前が三日位かゝつても待つていよ、それじゃア磯之丞さん先へ往ゆこう」

とこれから別れて、案内と兩人連立つてまいります。此方こなたは三人で女房が薬罐を提さげて、右内が脇に附きまして、漸々ようく山道を小川村へ二里ばかり下りて、横に又四五町入つて見ますと、屋根には板の上に石を載せて嵐を防ぎ、実に見るかげもない山住いで、中へはいると大きな囲炉裏が切つてあつて、竹自在へ燻くすぶつた薬罐がかゝつて居ります。留守居をして居りますのが多助という、八歳になる角右衛門が一人子ですが、これが後に鹽原多助と申して、天下に名高い人になります者ですから、自然に他の子供とは違ほかいまして、おとなしやかに居ります。右内は如何いかに御運ごうんが悪いとて、八百石取のお身の上、人も通わぬ山さんちゆう中の斯こん様な茅屋あばらやに住つておいでになるのか、お情ないと気の毒そうに上つて来ました。

右「誠に思いがけなくお目にかゝりましたなア」

お清「あの、右内や、お前が屋敷を出る前に産れた多助という悴せがれはこれだよ」

右「え、あのお坊ぼつちやま様でございますか、お父とつさま様によく似ていらつしやいます、私わたくしは右内でございしますが、あなたは御存じごございすまいなア」

多「何だか知んねえやい」

右「どうもまるで田舎語いなかことばになつておしまい遊ばしたなア」

と涙を拭き、

右「成程獵師うちの家のよううでございすなア」

鹽「何しろ一杯つけな」

と是から女房が支度をするのに、前川まえがわで捕とれた山女やもめに岩魚いわなという魚に、其の頃会津辺からみりん 嗽みりんのような真赤まつかな酒で、

鹽「え、これは奥州から来る石首魚いしもちという魚の干物だ、一つお食くべな」

右「へ、どうも御新造ごさまのお酌しやくで恐入おそりますな、私わたくしが家出いをしましたのは矢張八月朔つ いたち

日、其の年の三月のお節句に、お客様きやくさまの帰かへつた跡で、御新造様のお酌しやくでお白酒しろざけを頂戴ちやうたいした事などを、かめとお噂うわさをして居ゐりました、家出いをしたのも、かめが懐妊かいにんを致いたしました故ゆゑでございす、只今では七歳しちさいになり、名をおえいと申まをします」

清「お、左様そうかえ、お前に似てもかめに似ても好子い、こだろうが、見ることも出来ないのう」
 右「それでも彼あれが裏家うらやま住いに馴なれて、誠に当節はよく馴なれて居ります、働はたらきのない私わたくしでございませうから不自由勝たで、へい、妙なお酒ですなア」

清「お前は喫たべた事はないだろう」

右「へい、甘いような酢すぱいような変すですなア、へえ、これが会津から来るので」

鹽「あの、其方そなたの親父うへい右平は屋敷に永年奉公をしてくれて、其の悴せの其方も屋敷に勤めて居たのだから、家来とは云いながら家来でない、殊わには私の妹わしを女房にしているから弟も同様どうでのう」

清「旦那様は故あつて御浪人あそばしても、お固い御気性だから、二君に仕えずと云つておいでだが、此の悴せはどうか世に出したいと思つているが、私の甥せに当る戸田様の御家来のざわげんさくで野澤源作のざわげんさくという者が宇都宮の藩中だから、それへ頼もうと思つて、度々たびく手紙をやつた処ところが、どうか重役に相談して世話をして上げますから、それに就つて、どうか話をしたいから出て来いと云つて、返事を寄越したが、四年あとの山水で田地から諸道具衣類まで皆流ながされてしまつたゆえ、今ではどうする事も出事できず、今お金が五十金あれば、江戸のお屋敷へお住込すまが出来いるのだから、此こゝで私がお頼みだが、かめと兩人ふたりでどのようにも才覚さいかくし

て送つてはくれまいか」

右「へい、どうか致しましょう」

鹽「馬鹿ア云うな、旅商人たびあきんどの右内に五十金出来よう筈はない」

清「それだつて良人あなた、これに頼むより他に仕方がございません、それに右内は家出をする時、家のお金を甘金持つて逃げておいでだよ」

右「え、誠に恐入ります、只今では金子の出来よう筈はございませんが、来年の三月までお待ち下されば、どうか致しましょう」

清「来年の三月じゃ遅いじゃないか、是非今年の中うちにと云つても、雪があつて来られまいが、どうか今年の中に送つておくれ」

右「なに、どうか致しましょう、なアに子がなければおかめを勤め奉公に売つても、え、これは御新造様の前で、なにかどうか致しましょう」

と口には云つても右内が今の身の上では才覚の出来よう道理はございませんが、どのようにも才覚しようと考えながら、其の晩は寐ねまして、翌日立とうとするを彼是と引留められます、昼少し過ぎに漸々ようく振切つて出立しますと、此方こなたは親子三人で須賀川すかがわの堤とてまで送つてまいりました。

右「左様なら御機嫌よろしゅう」

と云うので此方も見送る、右内は見返りながら、金の出来よう筈はないが、神仏の
 恵で、何うか才覚したいものだと考えながら、うかくと大原村という処へ掛りました所
 が、大きに草臥れましたから茶店に腰を掛けて休んでいると、其処へ入つて来たお百姓は
 年齢四十四五で、木綿のぼうた布子に羽織を上に着て、千草の股引で、お納戸色の足
 袋に草鞋を穿き、

客「誠に久しく逢いません」

婆「おやまア角右衛門さん、おあがなんしよ」

角「ちよつと来てえと思うが、秋口になると用が多くつて来られねえで、まアあんたも達
 者で」

婆「まことに此間もあんたの方へ向けてやったら、演劇を見せてくれると云うから、遣
 った所が、角さんなればこそ世話アして見せてくれて、娘子を遣つたら宜く世話アして
 呉れやした、帰つて来てどんな狂言だったと云うも、何だかしんねえが弁慶縞の衣物を着
 たお侍が出て来て、脇差のあたまへ徳利を提げていたが、余程酒の好きなお侍で、跡か
 ら機織女が緒手巻を持って出て来たところが、其の娘子を侍が脇差で突ツ通すと、女が

ふりがみぶ
振髪打つて眼睛まわしてほっこりきエツたつて云いやんすから、跡で聞いたら妹脊山
の狂言だツて」

角「はい、碌に構えませんでハア、家のお爺さんは居やんすかなア」

婆「へい、居りやんす、新田の角さんが来やしたよ」

爺「へい、あんた無沙汰をしやんした、あんたに見せべえと思つていた青爪で、三歳五
ヶ月になる馬で、いゝ馬だ、今見せるから待つて下せえ」

角「あゝ馬かえ」

爺「マア物を見なせえ」

と云いつゝ引出して来たのは実に駿馬ともいうべき名馬で。

角「やア、いゝ馬でがんすなア」

爺「あんた、此の馬は実に珍らしい馬でね、えら一つ起して、噓一つした事がねえ、どん
なに引いて引まわしても、足に血溜一つ出来る馬じゃアねえ、見なんせえ」

角「まア見べえか」

と云いながら齒を見たり爪を見たり、前足を撫でたり、暫く見て居りましたが、
角「こりやア買いてえねえ、幾許だアな」

爺「五両五粒だツて」

角「高えなア」

爺「高えつて五両五粒がものはあらア」

角「そうけえ、己ア今金はあるが、千鳥村へ田地の掛合に來たんだから、田地が売買にならなければ歸りに直ぐ買つて往くから、何しろ手附を置いて往くから、馬を置いて下せえ」

と懐から取出す胴巻は、木綿か紬か知れませんが、つるく〜とこいて落ちた金は七八十両もありましようか、其の中から一両出して、

角「さア此処へ置きやす」

と残りの大金を懐中へ括し附けまして、

角「外へ売らねえように、左様なら」

婆「左様なら、歸りにお寄んなしよ」

先刻から兩人で話をしてゐるのを岸田が見るとはなしに、其処へ落ちたのは大金、あゝ有る所には有り余るものだ、あの金さえあれば主人を世に出し、御恩報しも出来るものと思ひますと、面炮の出るほど欲くつて堪らないから、うか〜と思わず知らず追貝

村まで彼の百姓の跡を尾けて来ました。百姓はそれと知らず谷合までかゝりますと、

右「もし旦那え〜」

角「なんだえ」

右「へえ先程大原村の茶店で馬を買ってお手附をお出しになる時、側に茶を喫んで居りました私は旅商人でございます」

角「はい」

右「始めてお目にかゝって恥入りますが、私は元は武士でありましたが商人になりました。岸田屋宇之助と申します、私の主人が故あつて浪人をして、此の先の小川村に住んで居りまして、昨日図らず逢いましたところ、五十両の金があれば世に出られるから才覚をしてくれと云われましたが、私の只今の身の上では、逆も才覚は出来ませんから、心配している所へ、あなたが手附をお出しになった時見た金は、七八十両はあると思います、誠に押付けたお願いですが、屹度御返却申しますから、来年の三月まで五十金拝借はなりませんまいか」

と云われて角右衛門は驚きまして、そつと懐へ手を入れ胴巻を押えながら、角「なに五十両貸してくれと、己は数坂越を幾度もするが、汝工のような盗賊がいるか

ら旅人が難渋するのだ、さア名主へ連れて往くから来い」

宇「盗賊どろぼうなんのと云うものではございませぬ、名前までお明し申す程でございませぬから、お得心下されば、これから主人の所へまいりまして、兩人で連印れんいんの上拝借します、どうも主人を世に出さなければ済みませぬ、神かけて御損は掛けませぬから、何卒どうぞ来年の三月までお貸し下さい、印形を押して証文を入れますから、なア申し」

角「馬鹿野郎、五十両という大金を汝われがような始めて逢った奴たれに誰が貸す、主人のためだの忠義だなんと云やアがって、己が金へ目を附ける盗賊どろぼうめ、さア名主へ来い、往かゆねえか」

と拳を固めて右内の横よこ面つらを打ぶつたから、顔から火の出るようだが、

右「ア痛いたたく、御尤もでございませぬが、明かして願うのですから、私わたくしの身体は主人のたぬなら十や廿打ぶたれましても厭いといません、主人は立派な侍で、あんな所へ置く人ではありません、江戸表へ参りさえすれば、百石取りぐらいになるのは造作もございませぬ、主人さえ世に出ればお金の融通も出来ますから、もつと早く御返却致します、何どうぞ貸しておくんなさい」

角「黙れ、汝われえ己おれに打ぶたれるか」

右「へえ、お打ちなさい」

角「さア此処へ来い」

と髻もとぎりを取つて引寄せて、二十ばかり続けて打ちましたから、実に頭の割れるほど痛いのが耐こらえて、

右「それで貴方御承知なら主人の所へどうか御一緒にお出で下さい」

角「馬鹿野郎、まだ金を借りたいと云うか、名主へ連れて往ゆくのは面倒だから打ぶのめしたんだ、往ゆけつたら往ゆかねえか」

と云いながら力に任せて右内の胸を蹴けて、横面よこつらをポーンと打ぶつたから、其処へ倒れしました。日頃柔和な右内だが、余りのことと思わず道中差へ手をかけて角右衛門を瞋いらむ。

角「汝われア脇差見たようなものをさして、己を斬る気か」

右「なに斬る気はございませんが、打ぶたれゝば金を貸してやると仰しやったから打たせたのに、打つた上に土足に掛けて金も貸わかさず、私わたくしも武士の禄を食はんだもの、見ず知らずの土民そつかに足下そつかに掛けられましたは捨ておかれませんか、何うあつても貸されませんか」

と威おどして取ろうと思ひまして、ピカリと引抜く刀の光りに、百姓だから驚きまして、トツ／＼と逃出したから、右内は跡を追掛けて往ゆきますと、彼かの百姓は運悪く木の根へ躓つまい

て倒れる処へ、右内得たりと上に乗し掛りて百姓の頬へ抜刀を差附けて、

右「さア貸しておくんなさい、お前さんは人を土足に掛けるとは余ではありませんか、さア貸して下さい、どうあつても貸して呉れなければ抛よんどころなくお前さんを殺さなければなりません、さア貸して下さい、さア貸さなければ殺しますよ、お前さんは五両五粒いっつぶの馬を買うような立派な人ではありませんか、貸して下さい、貸せないかい」

と責めつけられても百姓は生命いのちより金の方が欲しいと見えて、「盗賊どろぼう々々」と云う声こゝろが袂たもとに響きますが、誰たれあつても助ける者はありません。此処は追貝村の入口で、西の方は穂高山ほたかやま、東は荒山あらかやま、北の方は火打山ひうちやまで、南の方は赤城山あかぎやま、山又山の数坂峠かずさかとうげ、大樹は生茂つて居りまして、大泉小泉たいせんこせんという掘割の岩間に浮島の観音というのがあつて、赤松が四五本川かわべり辺へ枝を垂れ、其処に塚が在あつて、翁おきなの詠んだ「夏来ても只一つ葉のつかな」という碑があります、此の大泉小泉の掘割から堅科川かたしなかわという利根の水みな上へ、ドツ／＼と岩へあたつて落します水に移るは夕日影、さしひらめく刀の光り、右内は心がせきますから、サア／＼と責めつけられ、下では只人ひと殺ころし々々と云っている。此の時向う山を通りかゝりましたのは鹽原角右衛門で、先刻右内に別れてより、家に帰つて只うつく／＼と致して居りましたが、「お獵にでもいらした方が宜しゆうございましょう」

と女房の勧めに、鉄砲を担いで山狩に出ましたが、小鹿を見失って帰る折から、向の岸で「盗賊どろぼう々々」という声があるが、雑木山の林で生茂って、下は薄暗く、確しかとは見えませんが、旅人が山賊に出逢つたに違いないから助けてやりたいと、片膝立って有合わす鉄砲に玉込めいたし、引金へ手を掛けて、現在自分の家来なる忠臣岸田右内と知りませんから、胸元へ狙いをつけましたが、是から何う相成りますか、この次に申し上げます。

二

引続きまする鹽原多助一代記は多助が八歳の時のお話でござります。彼の岸田右内は忠義のためとは云いながら、心得違いに見ず知らずの百姓が五十兩懷中致して居りますを知つて、無心を云いかけますと、彼の百姓は驚きまして争いとなり、右内は百姓の転びし上へ乗つかゝり、お主しゆうのためには換えられぬと、嚇おどして五十金を奪おうとする。下では百姓が人殺しやまむらと云つて居りますが、往來は稀な山村で、名におう上野こうずけのくに国東口の追貝村、頃は寛延元年八月の二日、山曇りと云うので、今まで晴天でいたのが暗くなって、霧が顔へかゝりました、暗さは暗し、向う山では鹽原角右衛門が山賊を打とめ、旅人を助け

んと家来と知らず鉄砲の狙いを定めて、ガチリツと引金を引く拍子に、どうんと鈎こたまへ響いて、無惨や右内は乳の上を打抜かれて一度は倒れましたが、一方かたへ刀一方かたへ草を掴んで立上り、足を爪立て身を慄ふるわせ、ウーンと云いながら、がら／＼と血を吐き出しますと、其の血が百姓の顔へ掛りますから、百姓は自分が打たれた心持がして、人殺し／＼と慄えながら云っている所へ、鹽原角右衛門まるきばしが独木橋を渡つてトツ／＼と駈けて来ました。

鹽「これサ御旅人お怪我はありませんか」

角「はい怪我アしたかもしんねえ、真赤な血が出やした」

鹽「それは私が今上の賊を打留めたによつて、其の血が貴方にかゝつたのだろう、それとも少しは切られましたかな」

角「へえ、道理で痛くも何ともなかった、助かったかな、有難うござえやす」

と血だらけになつた百姓が仰向いて見ますと、麩鹿かもしかの膏あぶらな無しに山猫の皮を前掛にしまして、野地草やちぐさの笠を背負しよい、八百目の鉄砲を提げて、

鹽「まアお怪我が無くつて宜よかつたなア」

角「猫かりゆうじ 夫さんでござえやすか、既に此奴こいつに殺される所を助かりやした、私の懷わし中に金

のあるのを知つて跡を尾けて来て、取ろうとするから、名主へ連れて往くべえと思つていた所が、既に殺される所でがんした」

鹽「いや悪い奴でございます」

と云いながら賊を見ると右内だから恟りして、

鹽「右内やア〜、心得違ひをしたな、右内やア〜」

と呼ぶ声が忠義の心に通じましたか、右内は漸々細き目を開いて見れば、目の前に主人の顔、

右「旦那様々々々」

と云いながら鹽原の手に縋り付く。

鹽「何故心得違ひをした、手前も元は侍ではないか、如何に落ぶれ果て、食うや食わずの身となるとナア、何故其の様なさもしい了簡に成つてくれた、渴しても盜泉の水を飲まず位の事は心得ているではないか、何ういう訳で人の物を奪る氣になつた、手前とは知らずナ、此の角右衛門が旅人を助けようとして打留めたのであるぞ、これ許してくれえ〜」

というに、右内はハツ〜と息を吐いて、ものが云いたいが、外へ出る息ばかりで、漸

く微かすかな声を出しまして、

右「旦那様、八年ぶりで貴方にお目にかゝりました所、彼の通り見る影もないお身の上、御新造様からも五十金才覚してくれと家来の私わたくしへ手をついてのお頼み、此の旅人が金を所持して居りますのを見て、あなたを世にお出し申したいばかりで心得違いをいたしました、あなたのお手に掛つて死ぬのは本望でございませ、永らく御奉公をいたして、御恩を戴いた御主人の妹を連れ出して逃げるような心得違いを致しました右内ゆえ、天罰しゅうば主しゅ罰つ報むくいきた来きたつて、只今此の所で旦那様のお手にかゝつて死ぬのは当あたりまえ前まえでございませが、江戸表に残つた女房おかめと、まだ年のいかない娘が此の事を聞きましたら嘸さぞ歎なげきましよ、うが、決して盗どろぼう賊ぞくをして殺されたのではない、旦那様を江戸表へお連れ申したいと思ふ心得で、斯かよう様な事を致しましたと云う事を、旦那様から仰せ聞けられて下さりませ、あゝ最もう目が見えん、此の世のお別れ」

と云いながらバタリと倒れましたから、鹽原も思わず声が出まして、

鹽「あゝ不ふ憫びんな事をした、家内が聞いたら嘸さぞ歎なげくであろう、許してくれ」

と歎くのを百姓が聞いていて、ホロリ／＼と泣出しました。

角「とんだ事になりました、あゝ金を貸せば宜かつた、道理で主人のために金が入るだ、

主人も私も印形を捺いて証文を張るからつて名前さえ明かしたが、よもや、嘘だと思うから貸さなかつたツけ」

鹽「はい全く私共の家来でございまして、手前を世に出したいばかりで、此の様な事をいたしました、何卒御勘弁を願います」

角「御勘弁どころじゃねえ、鉄砲を打たなけりやア己が殺される所だ、何とそう云う良い家来を鉄砲で打つたら嘸悲しかんべえ」

鹽「あなたも不憫と思召すならば、此の屍骸は私一人では持つてまいることは出来ませんが、此処に細索がありますから、これで括げて吊りまして、鉄砲の差荷いで、一方担いではくれませんか」

角「ハア担ぎますべえ」
と泣くく担いで小川手前まで帰つて来ました。家ではお清は角右衛門の帰りが遅いから案じて居ります所へ、

鹽「今帰つたよ」

清「お父様がお帰りだよ、おやくあなたお一人でいけないからお手伝いが入りましたか、猪でも打ちましたか」

鹽「いや飛んだ物を打ちました、お前が聞いたら嘸驚くだろう、話をするからマア貴方、此方へお上り」

と百姓を上へあげ、これ／＼の訳だと話をして、

鹽「おせい、間違いとは云いながら、今朝別れた右内を鉄砲で打とうとは思わなかつた」

清「何処どこに居ります」

と云うから簑笠を反除はねのけますると、情ない死しにやま状。

清「あゝ、今朝お前に別れる時、金さえあれば旦那様が元の侍になられると無理な事を頼んだから、私共わたしども兩人を世に出したいばかりで、非業ひごうな死をさせたのも、私が酷わたくしひどく頼んだから心得違こころあひだいをしたのだらう、あなた何うして人と獣けだものと見違まえました」

鹽「いゝえ、獣と間違えて打ったのではありません、此の方にかゝった山賊と心得て打ったのだ、泣くどころじゃない、お詫わびごとを申せ」

清「はい／＼悲しいのに取とり紛まぎれ、御挨拶も申しません、これは家来とは申しながら、私わ共どもの妹を女房にして居りますから、家来と申しても弟と同じ事あつ、後には七歳ななつになる子

もありまして、不憫なものでございませ、何卒忠義どうぞゆえと思召おぼしまして御勘弁ごなされて下

さいまし」

角「私も斯ういう事になるんなら話合いにしたものを、打擲るべえと思つたら此様な事になつてしまつて、誠に氣の毒だ」

多「お父さん、なんで叔父さんを鉄砲で打つたかなア、江戸にいる叔母さんだのおえいと
いう従弟が聞いたたら、どんなに怨むか知れねえから、若し叔母さんが来たら、多助が間違
て打つたと云うから、あんたは殺さねえふりをするが宜いよ」

鹽「あゝ宜いゝ、小兎にまで苦勞をかけて濟まない」

角「誠に年はいかねえが、へえ八歳ぐれえなもんで、へえ実のなる木は花から違つて、
あんたお侍えでござえやすな」

鹽「取紛れまして、まだ名前も申上げません、手前は鹽原角右衛門と申します浪士で」

角「イヤサ私が鹽原角右衛門という百姓さ」

鹽「へえ私が」

角「あんた何時から鹽原角右衛門と云いやす」

鹽「何時からと云つて先祖から」

角「私が名前も先祖から」

鹽「手前の先祖は下野の国塩谷郡塩原村の郷土鹽原角右衛門という事が書類に残つて居り

ますが、精しくも調べては見ません」

角「私わしが先祖も野州塩谷郡塩原村で、沼田へ来て鍬一つから今では田地や山も持つて居りやすが、それじゃア貴方も、元を洗えば同じ血統ちっすじで」

鹽「妙な縁ですなア」

角「縁は縁だが、此こん様な事になつては悪縁だねえ、さア此処に金が五十両あるから、これで身形みなりを整えて、立派なお土さむれえになつて下せえ」

鹽「何う致しまして、見ず知らずの貴方に頂戴ちんたいすることは出来ません」

角「だつて元を洗えば、同じ血統ちっすじじゃないか」

鹽「左様ではございますが、大金を戴く訳はありません」

角「訳がねえツていうが、あんたが鉄砲で打ぶたなければ、己おらア命を取られて、金も取られ

てしもうのだ、それを助かつたのだから貰つて下せえ、あんた此の金で江戸へ歸けえらねえと、此の右内どのが犬死になりやす、命を捨てゝも主人を助けてえというのだから、此の事が

世間へ知れせえしなけりやアいゝのだ、貰つて早くお屋敷へ歸かえつて下せえ」

鹽「いえゝゝ家来が悪い事を致したのだから、手打ちにしても宜しいので」

角「それでは五十両で貴方あんたの大事でえじな物を買つて往ゆきやすべえ」

鹽「はい左様でしょうが、四年前の山水で大事なものは皆流されてしまつて何もありません」

角「こりやア貴方の悴でしよう、これを私に下さい」

鹽「何う致しまして、これは一人の悴ですからいけません」

角「お前方は年が若えから未だいくらも子が出来るよ、己ア四十二歳になるが、いまだに子がねえから、斯ういう子を貰つて往けば、こんな有難え事はねえ」

清「これは何う致して上げられません」

角「鹽原の子を鹽原が貰うのだから、宜いじゃないか」

鹽「上げられません」

清「とんだ事を仰しやいます、家来に無心を申したのも此の悴を世に出したいからでございます、何う致しまして出来ません」

角「よく考えて御覽なせえ、あんたが江戸へ往つて此の家来を此方へ埋めて、江戸から此の数坂峠を越して追善供養をしに来ることは出来やアしねえ、私が此の子を貰つて往けば、私は沼田の下新田、此所までは半日で来られるから、墓参をさせて、追善供養もしようじゃないか、私は三百石も田地があり、山もあり、不自由はさせねえから、殊には、此

の子のためには叔父さんに当ると云うだから、子のねえ昔と諦めて下せえ」

鹽「成程面白い事を云う、親切な方だ、宜しい、上げましょう」

清「何を仰しやいます、多助を遣つて良人あなたどうなさいますえ」

鹽「宜しい、黙つていろ、これく多助、此処へ来い」

というと、多助はハイと云つて、愛らしい紅葉もみじのような手をつけて其処へ坐る。

鹽「これく手前は私わしの本当の子ではない、此の沼田のお百姓の子だが、乳がないので藁の上から預かつて育て、くれとお頼みゆえ、八歳まで育てたから、もう下新田とやらへ歸つて、角右衛門様御両親に孝行を尽せ、そうして此の死んだ叔父さんの追善供養をしろ、よ、いゝか解つたか、其のお前を育てた礼として五十兩を下すつた、此の金子で私わしが身形みなりを整えて江戸の屋敷へ歸るから、よう、よう分つたか」

多「あい、毎時いっつでもお母つかさんが私を抱いて寝ていて、お父とつさんが金があれば江戸のお屋敷へ歸れると云うから、あゝ金が欲しいと思つても仕様がねえから、坊が今に大きくなれば稼いで上げべえと思つていたが、それじゃア厭だけれど、此の下新田の叔父さんの子のもりで往ゆきやすべえ」

角「あゝ何でも知つてるからいけねえ、どうか聞き分けてくれよ」

鹽「宜く聞き分けてくれた」

清「お前お母つかさんが毎晩愚痴を云つたのをよく聞き分けておくれだ、お前も悪いたずら戯や何かすると不孝になりますよ、私どもはないものとお思ひよ」

角「有ありがて難えな、それではお達者で、また此地こちちの田舎のお父とつさんの家うちの方へも来て逢う事がありやすべえ」

鹽「いや屋敷奉公をすると便たよりが出来ん、殊にお前の為めにならんから、こりや多助、此の親は仮の親と心得て、沼田のお父とつさんに孝行をしろ」

多「はいく孝行をしますから、早くお屋敷へお帰りなさいまし」

と云われてお清は堪こらえかねて泣きながら、

清「寝ますと踏ふみぬ脱ぬきますから氣を注つけて下さるように、どうかお目にかゝりませぬが、御家内様に宜しく、御面倒を願います」

角「なアに心配するには及びやせん」

これから祝いに酒肴さけさかなで親類固めに仏の通夜と酒宴さかもりをして、翌日三日の朝、村の倉く田平四郎らたへいしろうという名主へ届とどけをして、百姓角右衛門が多助を十文字に背負いひまして、夫婦は須賀川まで送つて来まして、夫婦は「どうか道をお厭いといなすツて」

角「へえ、道は気を注げるから大丈夫でがんす、どうか屋敷へ帰って御奉公をなされたら便たよりを聞かせて下さいよ」

鹽「御無音勝ごぶいんがちでございますから何分願います」

多「お父とつさん、お母つかさん、達者で屋敷へお帰んなせえよ」

と後身うしろみになって此方こなたを伸び上つて見る。鹽原夫婦も見送りく、泣くく帰るかゝり
ますと、向うからわい／＼という声で大勢たいぜい駈けて来る其の先へ、真まっしぐらに駈けて来た
のは青馬あおうまで、荒れに荒れてトツ／＼と来ます。此の道は左右が谷川で、一騎打きうちで何処どつちへ
往ゆくことも出来ません。あゝ此の子に怪我をさせては済まないと気をもんでいると、見る
より浪人鹽原角右衛門が馬の前に仁王立になって、馬の轡くつわを押えて百姓に渡すと、幸い此
の馬は角右衛門が買おうと云つた馬だから、直ぐに馬を受取つて、多助を馬に乗せて沼田
の下新田へ参ります。浪人鹽原は角右衛門から恵まれた金で支度を整え、名主の所へ別れ
を告げに参りますと、名主も名残が惜いからお立たちい祝いわいをしたいと云うので、村で鹽原に
劍術を教えて貰つた者もありますから、九月の三日まで留められました。これが鹽原多助
の生立おいたちでございます。さてお話替つて江戸表に居りますおかめは、娘おえいが毎日お父と
様つさまは未だ帰りませんかと云われるので、おかめも案じて居りますと、堺屋傳吉は帰つて

来まして、

傳「宇之助さんは上州の小川村で知人に逢つて、別れて私は沼田の大竹屋で待つていたが来ないので、何時までもばかりと待つてもいられないから帰つて来たが、未だ宇之さんは帰らないか」

と云われたので、種々心配して神鬮を取つたり売卜者に見て貰いなどしたが分らない、殊に借財方から責められて、逆も身代が持切れませんから、身代をしまいまして、七歳になるおえいを十文字に背負いまして、心当りを尋ねようと出立しましたは九月の三日、唯上州小川村と聞いた計りで、女の独旅でござりますから、馬士や雲助などの人の悪い奴にからかわれ、心細くも漸々のことで中仙道の 大宮宿泊り、翌四日は鴻巣の 田本が 中食です。例の旅費が乏しいから勿論駕籠なんぞを雇うことは出来ず、馬を雇うくらいですが、それも十分には行きません。漸々 田本で中食を誂えていると、側にいる客は 年齢四十二になる女で、衣裳は小弁慶の衣物に細かい縞の半纏を着ている 商人 体のおかみさん、今一人は息子か供か、 年齢は廿二になる 商人体のいゝ男で、 盲縞の脚絆 掛も旅馴れた様子で、頻りに中食をしておりますと、 男「お母さん、いゝお子でございますねえ」

女「あゝ、いゝお子だねえ、もしえ、おかみさん、あなたのお娘子むすめでございいますか」

かめ「はい、左様でございいます」

女「お幾歳いくつになりますえ」

かめ「はい七歳ななつでございいます」

女「あなたは何処へおいでゞす」

かめ「私わたくしは上州小川村までまいりますのですが、小川村というと何処へ出ましたら宜しゅうございましょう」

男「小川村というのは上州も東口とやら、山国やまぐにと聞きましたが、大層遠方へおいでゞご

ざいますねえ」

女「お前さんは江戸言葉のようですが、何の御用で小川村へお出いでになります」

かめ「はい私の良人わたしのつれあいが小川村に居りまして、それへまいります、誠に旅馴れせんから困ります」

女「左様ですか、私わたくしどもは前橋に居りますが、もとは中橋で生れまして、江戸生れでございいますから、前橋でさえ寂しくつていけませんに、そんな山の中へおいでになるのは、お一人で嘸さぞマアお心細いでしょう、ねえさん此処へお出で」

人見知りをしらない子ですから、

えい「おばアさん」

と顔を横にして云うから、

女「さア此のお肴をお喫り」

かめ「あれさ、いけないよ、誰方様の所へでも構わずあがつて困ります」

女「私は子煩惱ですが、子と云うのは此の悴ばかりで、女の子はどうも可愛らしくツて、

さア、これをおたべ」

と彼はいう内に直に馴染みまして、取附いたり引附いたりするから、

女「どうせ熊谷へ泊るつもりで、松坂屋というのが宜しゆうございますから、そこへ泊

りましょう、貴方はお草臥でしようから、私が負つて上げましょう」

というので、おかめも一人旅で、連が出来たから心嬉しく思っておりますと、最う悉

皆そのおかみさんに馴染んで、おかみさんと一緒に寝なければ聞かない。

女「今夜は私が抱いて寝ますよ」

というので、かみさんが抱いて寐て、翌日出立しました。前には熊谷より前橋へ出ますには本庄宿の手前に御堂坂と申す所より榎木戸村から八丁川岸、それより五料と申す所

に日光一の関所がごぞいます。当今馬車道になりましたが、其の頃は女は手形がなければ通られぬとて、久下村くげむらより中瀬なかせに出て、渡しを越えて、漸々さか堺かいという所まで来ますと、七さがつ下りになりました、足が疲れて歩かれませんか。

女「何うしよう、伊勢崎いせさきまで往ゆけようかね」

男「お母さん、此の辺には好い宿屋がないから、伊勢崎の銭屋へ泊りましょう」

女「そうしよう、そうしておかみさんも疲れているから駕籠を、アレサどうせ私どもが乗るんですから、宜しゅうございます」

と云っている中に、男が暫く経たつて、馬を一疋駕籠を一挺頼んで来ました。

男「お母さん、駕籠は一挺ほかありませんから、おかみさんは馬に乗り附けますまいから、おかみさんを駕籠に乗せて、お母さんは馬でお出でなさい」

女「それじゃアそうしよう、お前はお母さんとお駕籠へお乗りよ」

えい「いゝえ、私わたしや叔母さんと一緒でなくツちやいや」

かめ「あれまア聞き分けのない事ばかり」

女「それでは仕方がないから、少しの間気味が悪くも乗って御覧なさいな、馬には乗って見ろ、人には添って見ろということがありますから」

かめ「はいく乗つて見ましよう」

とこわ／＼乗りますと、乗り付けませんで、殊に道中馬は危ないから、油汗が出て確かに捉つかまっている。シャン／＼と馬方が曳き出す。これから百々どうくむら村へ出まして、与久よく村むらから保泉村ほずみむらへかゝりますと、駕籠より馬の方が余程よっぽど後おくれましたから、心は焦せけど馬のろは緩ゆるく、後あとより来る男は遅く、姿は見えません。其の内うち雑木山ざつぼくやまがありまして、左右から生な茂りて薄暗い所へ往ゆきますと、馬士まごが立留つて、

馬「あんた、此処から下りて下さい」

かめ「此処から下りちやア仕様がな、伊勢崎の銭屋まで往いくのじやないか」

馬「私わしは与久村の者だから駄賃より出越して来たんだから、此処で下りて下せえ」

かめ「私は始めてゞ困るから、跡から兄さんの来るまで待つておくんなさい」

馬「いけねえから下りておくんなせい」

と云いながら無理におかめの腰を押えて引きずり下してしまいました。おかめは道中馴れないから、

かめ「何をするんだ」

と云つても仕様がな、其の中馬方うちまがたはシャン／＼と馬を曳いて往つてしまいましたから、

かめ「誠に道中の馬士というものは悪いものだ、あゝ彼の兄あさんは何うしたろう」

とおどく／＼していると、雑木山から草を踏んで来る悪者が、物をも云わず掴ゆわまえるから、「アレー」という中うちに一人が足を縛ゆわえ、一人が手を縛ゆわえ、担ゆいで行きますところへ通りかゝりましたのは、沼田下新田の角右衛門で、木崎から帰り道、暗さは暗し分らないから、悪者に突き当ると、おかめを担ゆいだなり倒れました。角右衛門は見ると、女を担ゆいでいるから、此奴こいつは盗賊どろぼうだなど、突いきなり然拳骨こぶで打ちますと、百姓で力があるから、痛いいの痛くないの、悪者は驚いて逃げ出しました。

角「おかみさん／＼怪我はありませんか」

かめ「はい、誠に有難うございます、女一人でございますから、どうも苛ひどい目に逢うところろで、お蔭かげ様で助かりました」

角「全ぜん体ていあなたは何処へお出でになるんで」

かめ「伊勢崎の銭屋へまいります」

角「私わしも銭屋へ往ゆくんだから一緒に往ゆこう、お前さんお一人かえ」

かめ「先へ娘がまいつて居ります」

角「何しろ一緒に往ゆきなさい」

とこれから伊勢崎へ来て錢屋へ往くと、左様な娘さんを連れて来たお客はありませんと云うから、ひよつと宿屋の名前でも違いはしないかと、外の宿屋を捜しても知れないから、角右衛門は、こりやア此のおかみさんは悪者のために、娘を勾かどわか引ひされはしないかと思ひしゆえ、

角「おかみさん、娘むすめっこさんは器量けりりょうは宜いいかえ、フウン、親だから好よく見えるだろうが、七歳ななさいとはいいながら、勾かどわか引ひと云うものがあるから、見みず知らずの子を可かあ愛いがるのは、了りょう簡かんがあつてかどわかしただけではねえかと思つてサ」

かめ「はい、私の良人やどが歸りませんから、尋ねて参りますのでございしますが、仮令たと夫むつとめにり逢あひましても、一人の娘をかどわかされては、どうも良人に濟たすみません、何処どこの御方ごうかは存ぞんじませんが、娘を取返とすことは出来こますまいか」

角「取戻とすことも何も出来こねえが、お前めえさんは何処どこの者ものだい」

かめ「私わたくしは江戸の本郷春木町ほんきょうはるきまちに居ゐります 旅商人たびあきんどの、岸田宇之助かしたのすけと申まをす者の女房にようばうでござい
ます」

角「え、それじゃアお前まえは鹽原角右衛門しほのかくゑもんというお侍さむらいの妹いもうとで、其そのの家来けらいの岸田右内かしたのうちにんさんのおかみさんで、おかめさんと云いひやすんかえ」

かめ「何うして御存じですな」

角「何うしてツて、もう魂消た、実に不思議な縁さ、併しあゝ気の毒なことだが、あんたのお兄さん角右衛門様という人は、小川村に浪人して居るだが」

と云われて驚き、

かめ「あなた、何うしてそれを御存じでございます」

角「兄さんにも御亭主にも私が逢わせようが、まだ兄さんは支度も出来めえから逢わして上げやすべえ、心配しねえが宜うがんす」

と云いましたけれども、沼田の角右衛門は、それでは夫が非業に死んだ事も知らず、子供を連れて来る道で、娘をかどわかされるとは気の毒な事と、おかめを不憫に思いまして、これから娘をかどわかされた事を、其の地の名主にかゝり、八州様へ願って手配してもらい、おかめは計らず下新田の角右衛門の世話になりますというお話は次に申し上げます。

三

沼田下新田の百姓角右衛門は、私用がありまして木崎までまいって帰りがけ、保泉村と

いう処で計らず岸田右内の妻おかめの災難を助け、親切に世話をして身の上話を聞くと、これく〜というから、あゝ不憫なものだ、小川村で非業な死を遂げた岸田右内の妻か、殊には夫を尋ねて来る途で、娘までかどわかされたか、如何にも気の毒な事と心得ましたから、直ぐに伊勢崎の名主へ掛り、八州へ願つて、其の悪者をいろく〜と捜しました所が、三日ほど経ちまして縛られてまいりました悪者三人は、百々村の倉八と太田の金山の松五郎、今一人は江田村の源藏で、段々お調べになると、其の者共の申口に、旅稼の親子連の者に金を三両宛もらつて頼まれたので、何と申すか其の者の名は知れませんが、いと云うので、いろく〜お調べになつたが、親子連れの旅人は更に行方が分りませんゆえ、三人の悪者は江戸表へ送られました。おかめと角右衛門は日数が長く掛りまして、伊勢崎に長くも居られませんかから、角右衛門が「私は沼田の下新田の者で、お前の兄さんにも逢わしてやるから、私の家へ来なさい」というので、一緒に下新田へ連れ帰りましたが、五日程かゝりましたから、下新田の角右衛門の宅では余り主人の帰りが遅いゆえ、案じくらして居ります所へ、

角「今帰つたよ」

妻「おや良人マアこんなに遅くなる訳はねえが、何処へ往きやんした」

角「少し訳えあつて、飛んでもねえ間違まちがえが出来て、此方こつちの災難見たような訳で、ハア大きに日数ひかずもかゝったから案じていべえと思つていたが、手紙も出さねえでハアどうも」

妻「そうでがんですか、多助も父様とつさまが帰らねえつて心しんべえ配して、五八も案じているし、村でも心しんべえ配して、見舞みめえに来やすから、何も追剥に逢う筈はねえが、久しぶりで往つたんだから、木崎の親類で留められて居るんだんべーつて云つて居やんした、五八、われえ其所を片付けて鹽たれえをあげろ、戸口に立つて居りやんすのは誰だ」

と見ますと、年としごろ齡は廿四五で器量はよし愛敬のある婦人でございますから、妻「あんた此処えお掛けなせえ、お連れじやありませんかえ」

角「あゝ、これは己が伊勢崎で合宿あいやどになつたおかみさんよ」

妻「はアイー」

かめ「誠に不思議な御縁で、此の度たびは此方こちちの旦那様に助けられましたて、行き所ゆもない身上で、可愛かあいそうだと仰しやつてお連れ下さいましたものでございます、どうか行末長くお目を掛けられまして下さいまし」

女房はハイと云つたが、見馴ぬ女、殊に姿といい言葉遣いといい、近所の者でないから、妻「旦那さん何処から此の方を連れて来やんした」

角「おれが保泉村を通りかけて、此の内儀かみさんの難儀を助けてから、余儀なく此の内儀さんの事にかゝつて、泊つて居るような訳で、五日銭屋へ逗留していたのよ」

妻「へえ、此の内儀さんと一緒に銭屋へ逗留していて、へえ、そうとも知らねえで、家うちじやア案じていたのに、銭屋へ泊つて此こ様な美つくくしい内儀さんと五日も逗留して娯たのしんでいたんでがんすか、良人あんたマア幾歳いくつになるだか」

角「馬鹿ア云え、此の内儀さんに災難せいなんがあつて、伊勢崎の名主へ掛つて、八州様へ頼んでいたのだ」

妻「八州様へ頼んだかお女郎屋へ頼んだか知んねえが、五日銭屋へ泊つて居いれば知れたもんだ、ハア、だめな、家うちじやア案じて居るものを、そりよう家を五日も明けてよくのめノと歸けえられた義理だかマア」

角「あゝ云う事をいう、マアおかみさん心配しんぺえしねえが宜い、仕様のねえ婆ばあだ、四十面づらをさげて飛んだ事をいやアがつて、マア貴方あんた心配しんぺえしねえがようがんす」

と云つて少しも訳をおかめにも云わず、又女房にも云わないから、おかめは居たにくうございます。四五日経うちつ中、雪が降りまして、道が絶えてしまいましたから、角右衛門はおかめを小川村へ連れて往つて、鹽原角右衛門に逢わせたいと思つても、連れて行くゆことが

出来ませんので、其の年も暮れて、翌年寛延二年三月になりまして、角右衛門はおかめを連れて、小川村の鹽原の所へ尋ねて往きますと、鹽原は去年九月の三日に此の村を出立したと云うから、あゝ、それでは直ぐに支度をして立つた事かと思ひ、角右衛門も仕方がないから岸田右内の墓場へまいりますと、まだ新らしい卒塔婆が立ちまして、村の者が手向けますか、香花こうはなはたえずに上げてあります。其の石塔の前へまいりますと、

角「もしお内儀かみさん、此処へ来なせえ、お前の御亭主めえに逢わせてやるから此処へお出でな
んしよ」

かめ「誠に不思議な御縁で、あなたがお助け下さつて、今年まで御厄介ごやくかいになつて居りましたが、兄も江戸表へ出立しましたとの事ですが、私の夫岸田屋宇之助わたたくしは此の村に居りますか」

角「はい、これがお前の御亭主めえでがんす」

かめ「はい、何処どこに居ります」

角「そこに徹巖てつがん忠操ちゆうそう信士しんしと書いてある、これがお前の亭主めえさ」

かめ「えゝ、それでは私の亭主わたたくしは、あの亡なくなりましたのですか」

角「訳をいうのも気の毒だから、今までは云わなかつたが、云わなけりやア分らねえから

云うべえが去年九月の二日、私が用があつて金を持って千鳥村まで往くと、あんたの御亭主が後から来て、もし旅人さんく〜というから、はいと云つて振りかえると、私が主人の為に五十両入るだから貸して呉れ、ば、主人が江戸へ帰れる、損は掛けねえから貸して呉れると手をついての頼みだが、見ず知らずの者に其様な事を云うのだから、盗賊だと思つて打ち撲るべえと思つたら、お前の御亭主が脇差を抜いて追掛る時に、私が打倒んだ上へ跨がつて殺すべえとするから、一生懸命に人殺しい〜と云うと、其の時向山を通り掛けたのは貴方の兄さんで、鹿を打遁して帰る路で、私等を見て盗賊が旅人に掛つたのだと思つて、鉄砲を撃つて、其の玉が宇之助さんの胸へ当つて、現在自分の家来と知らずに兄さんが鉄砲で打つたと云つて、おい〜泣きやんすから、私も氣の毒になつて、死骸を小川村へ送つて往つて身の上話をする、あんたの兄さんも、私も元は先祖が一つで、一人は沼田へ出て百姓になり、一人は阿部様の家来に成つて又此処で巡り逢おうとはハア実に驚いた訳で、不思議な縁でがんすから、私が五十両遣るべえと云つた処が、受けねえと云うから、何うしたら宜かんべいと思つて、岸田が犬死になつて可愛そうだから、独息子を無理無体に貰つて来たのが家にいる多助さ、あんたの為には甥でがんす、其処え又貴方を私が助けて、家に連れて来て見れば伯母甥が斯うやつて一つ所に来て、委

しい話をするとうのは、前世からの約束と諦めて、あんたも御亭主さんの死んだ事は、何時までも鬱々と思つていて身体にでも障るといけねえから、諦めておくんなんし」

かめ「誠にそう云う事とは知らず、連の者が先へ歸つて来ても良人では歸つて来ませんから、何うした訳かと案じて居りましたが、田舎では其の地に長らく居りますと、養子にすると云う事を聞きましたから、良人も外へ養子にでも往つたのではないか、女房子を振捨て、他へ養子に入るとは余り情ない不実な人と怨んでいたのは私の過まり、良人が左様いう訳になりました、唯一人の娘を勾引されましたは生甲斐のない身の上、寧そ一思いに死にとうございますから、先刻来る道にありました谷川へ身を投げて死にますから、貴方はお先へお歸り下さいまし」

と泣倒れますから。

角「そんな馬鹿な事を云うもんじゃねえ、あなたの娘は勾引されても、死んだか生きてるか知んねえのだから、それよりも私が家へ歸つて多助と兩人で娘の行方を捜し、私も亦捜してやるから、手分をして尋ねたらおえいさんとやらにも逢えねえという訳もねえから、今早まって命を捨てるよりも、生きていて、死んだ宇之助さんの菩提を弔うのは貴方と多助ばかりだ、何卒私の云うことを聞いて下さい、ようく」

と云われて、おかめは「はいく」とばかりで泣いて居りましたが、角右衛門の言葉も捨兼ねて、是非なく兩人で沼田へ歸つて参りましたが、扱お話兩つに分れまして、鹽原角右衛門は其の前年の九月の三日に小川村を出立致しまして、沼田の御城下に泊りまして、翌日は前橋に泊り、其の翌日が熊ヶ谷泊りで、それから鴻の巣、桶川と中仙道を下りましたが、足弱の連で道も抄取りませんので、天神橋へ掛りますと日はトツプリ暮れ、足は疲れましたから御新造は歩けませんから、蔦屋という茶屋へ寄りました。

鹽「誠に困つたものだなア、足は痛むかな」

清「へい、幾ら薬を付けても癒りませんので困ります」

鹽「誠に草鞋喰と云うものは悪いものでな、其の癖山道は歩きつけていたが、平地は却つて草臥るといふのは何ういうものだろう、これく女中、これから大宮宿までは幾程あるな」

女「これから一里四町ありやんすが、ハア日は暮れてお困りでがんしょう」

鹽「当家では泊めて呉れまいかな」

女「こゝな宅ではハア堅うござえやすから、どんな馴染のお客でも泊めましねえから三味線や芸はいりやしねえよ、私どもは堅え家でなくつちやア勤まりましねえ、其の代りにや

アこゝな家は忙がしくて、庭の中を一日に十里位の道は歩くから、夜は草臥れて顛倒つてしまふのサ、それから見ると熊ヶ谷の女共は柔え着物を着ていて楽な代りに、此家へ来ると三日も勤まりやせんで、ハア誠にどうも何もごぜえやせん、玉子焼に鱈汁に生節豆腐でハア」

鹽「よし、何でも好いから早く」

と云うので、此の家で支度を致しまして、

鹽「これ、女中勘定をしておくれ、これお清、此の包をお前持って往つてお呉れ、これは端錢で出して置くから、これは私が持つて行く」

と云いながら荷を分けて居りますと、側にいた年齢廿二三で半合羽を着ている商人体の男が、草鞋の穢れたのを穿いて頬冠りをしながら、此の男も出に掛りますと、突然傍にあつた角右衛門の風呂敷包を引攪つて逃げましたから、角右衛門は驚きまして、盗賊待てと云いながら追掛けました。彼は一町余りも追掛けて、加茂宮村という所から西へ別れて加村まで三町ばかり追掛けましたが、鹽原は最早間に合いませんから脇差にあつた小柄をズツと抜いて手裏劍に打ちますと、打人は名におう鹽原角右衛門の腕前ですから、狙い違わず悪者の右の太股へ立ちましたから、アツと云つて畑へたおれまし

た所を、角右衛門は悪者の髻を取つて引^ひけし、

鹽「やい盗^{ぬす}人、旅^り中の事ゆえ助けて遣^はるまいものでもないが、包をよこせ」

悪「はい、貧^{ひん}の盗みでございませぬ、どうか命ばかりは助けて下さい」

鹽「黙れ、貧の盗みなどと申し、左様な事に欺^たまされるようなものではない、今度は免^{ゆる}して遣^はわす、以後たしなむか」

と云いながら、側にあつた榎^{えのき}の根株へ頬^ほ片^ぺを擦^こすり付けますから悪者は痛くて堪^たりませぬ。

悪「どうか御勘弁を願います、盗^{どろ}賊^{ぼう}ではございませぬ、実は私^{わたくし}の母^お親^ふが眼病で難^い澁^{くすり}して居ります、それに七^{なな}歳^{さい}になる妹^{あな}がございまして生^{くら}計^しに差^さ支^しえますから、母^い親^{くすり}に良^い薬^{くすり}を服^のませる事が出来ませんので、何^ど卒^つして良^い薬^{くすり}を服^のませて癒^いして遣^はりたいと思^{おも}ひまして、実は今^{こん}日^{にち}鴻^{わう}の巢^ねまで薬^{くすり}を買いに参^まりまして、天神橋の蔦^{つづ}屋^やで休^{やす}んでおりますと、且^{かつ}那樣^{やう}が荷^に物^{もの}をお分けなすつて、これだけは端^は金^{しん}で出^でして置^おくと仰^おしやつたのを側^わで聞^きいておりまして、不^ふ凶^と悪^{あく}い了^り簡^{かん}を出^でして、お包^かを持^もつて逃^にげましたが、中^{ちゆう}にお書^か付^けでも在^ありましては、お氣^きの毒^{どく}でございませぬから、今晚^{こんぱん}のお泊^{とまり}りへ持^もつて出^でて返^{かへ}そうと思^{おも}つて居^ゐりましたのでございませぬ、誠^{まこと}に悪^{あく}い事を致^{いた}して済^すみませぬ、どうか御勘弁を願います、足^{あし}が痛^{いた}くて歩^あきませ

んから、どうか小柄をお抜きなすつて下さいまし」

と泣きながら申しますと、

鹽「成程賊という者は様々のことを云うものだな、先刻荷物を攫つて往く様子が貧の盗みとは思えんわい」

悪「いえ真実の盜賊ではございません、其処が私の家でございますから、嘘だと思つたら往つて御覽なすつて下さい」

と云ながら、ダクく血の流れる足を引摺つて、上総戸のもとにいざり寄り、

悪「お母ア、お前の眼病を治そうと思つて飛んだことを致しました、此のお侍様にお詫言をしておくれよ」

と云いながら戸を明けますと、四十三四の母が眼病の様子にて、其の側に七歳ぐらゐなる女の子が居ります側へ這いより、

悪「お母アく、お前の病氣を癒そうと思つて済まねえ事と知りながら悪い心を出して、此処にいる旦那の荷物を奪ろうとする所を捕まつて、今お詫をしている所だ、お母アお前もお詫をしておくれ、お母アくようく」

母「何か悴が不調法を致しまして申訳がありません、何卒お免し下さいまし」

鹽「これは手前の宅か」

と云つて居る所へおせいも駆けて参りまして、

鹽「よくお前来たねえ」

清「はい、様子が分りませんで心配になりますから参りましたが、アノ包はございましたか」

鹽「なに、包は奪とられはせん」

母「何方様どなたさまでございますか、さつぱり見えませんが、どうか御勘弁を願います、不届至極な奴でございます、サアこれへ来い〜」

といいながら悴たぶさの髻を取つて引寄せまして、三つ四つ続け打うちに撲うちました。

惡「お母つかア勘忍してくれ〜」

母「勘忍して呉れと云つて、コレ手前も元は禄を取つた者の子ではないか、仮令たと如何に貧乏すればとて、人様の物を奪とつては亡なつたお父様とつさまに濟まない、どういふ了簡りょうかんでそんな事をした」

と泣きながらむしりついて打擲ちようちやくしますから、側に見ていた鹽原角右衛門も氣の毒に思いまして、

鹽「お母免ふくゆるして遣つて呉れ、これが貧の盜みだという事だから、併しかし仮令親たといの為でも人の物を取るの宜しくないぞ、以後斯こん様な事があつてはならんよ、これは少しばかりだが、小兒こどもが怖いと云つて泣いてるではないか、さ、これは聊いさかだが小遣いに遣るから何か好きな物でも母ははに買つて遣れ、だがそれと知らず氣の毒なは足に手裏劍を打つたから嘸さぞ痛むであろう、余程痛むかな、それは貴様が心得違ちがいをした故仕方ない、よし／＼これ別れる」

母「どう致しまして、悴せが悪い事を致したのに金子を戴くなんぞという事は出来ません」

鹽「少しばかりだが取つて置け」

惡「はい／＼お母つかさん折角の思召だから戴いて置きな」

母「面目次第もございません」

と云いながら親子の者が夫婦を見送りまして礼を申します。此方こちらも取急ぎますから出て行きました。親子は上総戸かずさこの所まで鹽原夫婦を見送り、兩戸を閉たて、顔見合わせ、彼かの母お親おは眼病だと云つたのが眼をパツチり明きまして悴せに向い、

母「間拔、どじをふんじやアいけねえじゃねえか」

惡「え、悉すつかり皆遣り損なつてしまった」

母「躰びつてに成つてしまつて高飛をする時どうする積りだ」

悪「此の小柄は滅法いてに痛えや、お母つかア彼奴あいつは今夜大宮の栗原へ泊ると云つたから、今夜後あとから往つて意趣いしゆげえ返しに仕事をして来るからよ」

母「よしねえ、お前めえのすることは何てもどじばかりで仕様がねえ、又遣り損うといけねえから止しねえよ」

と親子で争つてゐる所へ、ガラツと戸を明けて来たのは繼立つぎたての仁助にすけという胡麻の灰。

仁「お母ア何しろ此処こゝにいる事は出来ねえ、あの子を勾かどわか引した事からづきがまわつたという訳は、百々村どゞむらくらの倉八と金山かなやまの松まつと江田村えだむらの源藏げんぞうが捕まつて、己達へ足がついて来たから、直すくに逃げなくつちやアいけねえぜ」

母「それ見ねえな、躰びつてに成つて何うするんだい、此処こゝに薬があるから附けねえな」

仁「どうしたんだい小平こへい兄貴、やア何うしたんだ」

小「なアに詰らねえ仕事を仕損なつて」

母「此の野郎は遣り損つて足へ小柄を刺されて、痛くつて逃げる事が出来ねえ、本当に半は間んまな野郎で仕様がねえよ」

小「其代りにやアこれから此の小柄を持つて行つて、足を痛められただけの仕返しけえしをしな

くつちやならねえ」

と言つてゐる所へガラリツと戸を明け、鹽原が息を切つて参りまして、

鹽「今小柄を忘れて行つたから返して呉れ」

と云われたから、今まで眼を明けて居たおかくは急いで眼を閉いでしまい、小平もまご／＼して、

小「へい小柄は此処にあります」

と差出すのを受取つて鹽原は脇差へはめて、

鹽「考えて見れば誠に気の毒な事をしたな」

と云いながら急いで歸つて往きました。

母「これだよ、する事為す事半間じやねえか、彼の侍の金を取つて、足へ小柄を刺されやがつて、これを取りに来ればハイと云つて渡すんだもの仕様がねえじやねえか、このどじさをよ」

仁「そうサ、小平兄い失錯遣つちやアいけねえぜ、何しろ此処には長くは居られねえから、是から信州路へ掛るにやア秩父へ直に山越して逃げよう」

と悪者三人相談して、勾引したおえいを脊負いまして、此処を逐電致しましたが、悪

事というものは遁れ難いもので、再び追手に掛りますというお話になります。此方は鹽原角右衛門夫婦、其の夜は大宮宿の栗原と申す旅籠屋に泊り、翌七日江戸に着し、本郷春木町に参りまして、岸田宇之助方を尋ね、妹おかめに逢い、右内が變死の事と、其の事より沼田の百姓角右衛門に五十兩貰い受け、支度をして帰府致した事を知らせようと右内の家を捜しますと、近辺の者の申すには、おかめは宇之助さんが帰らないから世帯をしまい、此の月の三日に子供を連れて旅立ちたと聞いて鹽原夫婦は残念に思いましたが、返らぬ事故、直に筋違橋内戸田能登守の家来野澤源作と申す者は、妻お清が従弟どちなれば、是を便り戸田侯へ奉公ずみ致し、新地五十石にて馬り組に召抱えられました。が、翌寛延二己巳の四月、御主人は野州宇都宮より肥前の島原へ国替仰付けられ、鹽原も戸田侯の御供を致しまして国詰の身と相成りましたから、とんと沼田下新田の角右衛門方へ音信は打絶えましたが、再び実子多助に逢いますお話は、一息つきまして申し上げます。

四

引続きますお話は鹽原多助一代記でござります。是は文化文政の頃まで おおひょうばん 大評判のもので本所相生町に居りまして地面の廿四ヶ所も持ち、炭薪の大問屋でございませが、わずかの間に儲け出し、斯様な おおしんだい 大身代に成つたと申しますが、なんでも其の頃は未だ世の中が開けぬ時分でございませが、当節は追々開けてまいり、仕合せの事には大火という者が とん 頓とございません、是は家造りが やつく 石造或は店蔵に成つたり、又は煉瓦造に成りましてので、マア火事がございませも、焼ける道が塞がつて居りますから、大きな火事がございませんが、開けぬ昔は折々大火がございませました事で、うしどし 丑年の火事、うまどし 午年の火事、或は佐久間町の三味線屋火事など種々 いろく 大火もございませました。其の中で一番大きいのは本郷丸山本妙寺火事、目黒行人坂 ぎやうにんざか の火事、これは皆様 みなさんがた 方も御案内の事で、それに赤坂の今井谷から出まして、麻布十番から古川雑色 ぞうしきつなぎさか 綱坂を焼払い、三田寺町、ひじりざか 聖坂から三角 かく へ掛け、田町へ出まして、これが品川で鎮火致しました、大きな火事でございませが、これが宝暦十年二月四日の夜 よ に出まして、一日おいて又六日に出火致しましたのが神田旅籠町から佐久間町を残らず焼払い遂に浅草茅町 かやちよう 二丁目まで延焼し、見附を越して両国へ飛火 とびひ 致し、両国一面火になつて、馬喰町 ばくろちよう を焼き、横山町三丁目残らず、ほんちよ 本町 うしお 通りを出て日本橋通りから江戸橋の方へ焼け、四日市小網町一面の火になり、深川へ飛

火いたし、深川一面の火となり、漸く鎮火致しました。すると、其の翌晩また芝神明前しんめいまえから出火致しまして、芝片門前かたもんぜんほんしば本芝残らず焼払つて、お浜で鎮火致し、たった二日の間に江戸大半を焼き尽しましたが、これは開けぬ昔のお話で、只今斯様な事はございませぬ。田舎のお話も此の時分のお話を致しますと、とんと嘘のように聞えます。沼田下新田などと申しますと甚しい山国の片田舎のようでもございしますが、只今では沼田から前橋まで人力車で参られ、前橋から汽車に乗り、パイと上野まで忽ちに来られ、一日の内に東京から往復ゆきかえりが出来まする事で、追々開けて参りました故、これからは鉄道が日本国中へ蜘蛛の巣を掛けた様になりますそうですが、マア何の位便利になるか知れませんが、其の頃は一寸旅立するにも中々億劫おつくうな事で、田舎のお方が江戸見物に出るにも泣きの涙で出ましたもので、江戸ツ子が上方見物に往くにも実に億劫なことに思い、留守中何ういう事のあるも知れぬ、万一これが永い別れになるかも知れないと云つて、水盃などをして、刺青ほりものだらけの狭な兄いなせいが、おい／＼泣きながら川崎辺あたりまで送られてまいり、

朋輩「そんなら達者で往つて来なよ」

男「お母つかあの事を留守中何分頼む」

なぞと云つて泣き出しまする。これが遠国へでも往くのかと云うと、僅か百三十里ばか

りの処へ往くにも此の通りでございしますが、現今では大違いで、「君鞆を提げて何処へ」
 「いや鳥渡ちよつと 亜米利加まで行つて来ます」などと云うような訳で、隣の家へでも行くよう
 に思つていらつしやいますが、其の頃沼田下新田と申しては随分山国の片田舎でございま
 した。さておかめは角右衛門に連れられて此処へ参りまして、一年半ばかり居ります中に
 角右衛門の女房が歿みまかりましたが、角右衛門も未だ老朽おいくちる年でもなく、殊に縁合えんあいにな
 つているおかめさん、多助さんにも叔母さんに当るそうだから、これを後添うちに直したら宜
 かろうと村の者等が切しきりに勧めますが、角右衛門は中々堅固な人だから容易に承知せず、
 あんな年の違つている若い女を女房に持つては世間へ対して誠に宜しくないからと云つて
 聞入れませんのを、そうでない、貴方あんたの跡目相続をする多助さんの叔母なり、殊に彼あの子
 を可愛がつて宜く世話をしなざるから女房に持つがよいと、分家の者始め村方一同の勧め
 に、止むを得ず承知いたし、不思議な縁でおかめを後妻のちぞえに直しました。これから十二年
 経ちましてのお話で、丁度宝暦十年に相成りますから、角右衛門は年が五十四歳になりま
 した。五八という奉公人を供に連れ、江戸見物ながら余儀ない用事があつて国元を出立致
 し、馬喰町に宿を取つて居りますと、二月四日の大火で、赤坂今井谷から出火し、品川
 まで焼け込んで鎮火したと申しますから、怖おっかねえこんだと思つて居ると、又一日隔たつて神

田旅籠町から出た火事は、前申上げました通り故、角右衛門も馬喰町を焼け出され、五八は大きな包を脊負つてせつくと逃げ出しましたが、往来々々アリアア〜などと云いながら、大きな荷を担いで右往左往に駆け、此方からはお使番が馬に乗って駆けて来る。仕事師は纏を振り鉤をかついで威勢能く繰出してまいる騒ぎに、二人はまごごしながら漸く逃出しましたが、行き所がありません。

五「旦那さん怖ねえじゃねえか、一昨日大けえ火事があつて、又今日こんな火事が始まるとは怖ねえこんだ、江戸は火早いと云いやんすが、こんなに大けえ火事がこう続いてあるとは魂消やした、火には追掛けられるようだよ、危えとも危えとも、あんな何うも先の尖った鳶口を担いで駆けていやすから、頭へでも打つけられて怪我でもしては大変でがんです、旦那さん何処へ逃げやすか」

角「己も始めて江戸へ出たのだから困った、仕様がねえが此の間一度尋ねた小網町の積荷問屋な、彼処へ行くべい」

とこれから小網町へ参りますと、此の火事が日本橋から江戸橋、四日市、小網町へ焼け込んで参りましたゆえ、角右衛門は又此処を焼け出されました。

五「怖かねえ処だ、江戸てえ所にやア二度と再び来る所じゃねえ、火に追かけられて居る

んだねえ、旦那さん何処へ逃げべえか」

角「仕方がねえ、外ほかに往ゆき所どこもねえから深川の出船宿でふねやどへでも行ゆくべい」

と深川高橋までまいり、ホツと一息吐つく間もなく、又此の火事の飛火とびひがしまして、深川一面の火となり、火の粉がばらく落ちかゝりますから、

五「旦那さん、又何処へ逃げべえねえ」

角「何処へも行ゆきようがねえ」

五「あゝ二度と再び来る所ところじやありやしねえ」

角「仕様がねえ、馬喰町は焼けてしまったから、板橋へでも往つて泊るべえ」

五「板橋まで焼けて来やしねえか」

角「そうしたら沼田へ帰けえるべえ」

五「沼田まで焼けて来たたら何うする」

角「馬鹿言え」

と言いながら二ツ目の橋を渡り、お竹蔵辺あたりまでまいり、ホツと一息吐きながら後うしろの方を見かえせば、天は一面に梨地の色を現わし、火事の明りで往來を見え透き、人々皆疲うれていちにん人も出るものはなく、往來はパツタリ止つてしまいました。夜よも段々と更け、以前の

お竹蔵前で当今交番所のある所から割下水の方へ掛りますと、女の金切声で、「アレー人殺しく〜」というから、角右衛門は気が付き向うを屹と見ますると、「一人の悪者が島田鬻の女を捕えて打擲するのみならず、娘の持ったる包を引攫って逃げ行きました。跡に娘は泣き仆れて居りましたが、何思いましたか起上り、前なるお竹蔵の大溝へ身を跳らして飛込もうとする様子に驚き、角右衛門は親切な男ゆえ、駈け寄って突然娘の帯際取って引留め、

角「おい娘子、お前此の溝へ飛込むのか、身投じやねえか、何だか様子は知んねえが、男がお前の荷物を攫って逃げ、それに大そう打たれた様子だが、一体何ういう訳でがんす」
娘「有り難う存じますが、どうぞお放しなすってくださいまし、私は深川の火事で焼け出され、母親と一緒に逃げて参ります途中、母親にはぐれ、一人で此処までまいりますと、跡から附けて来た悪者が突然私を突仆し、撲ち打擲致しまして、大事な荷物を持って行つてしまいました、彼の中には金子も入って居り、殊に大事な櫛笄や衣類も入って居ります故、あれを取られましては母親にどんな苛いめに逢わされ、殺されますか知れませんか、寧その事死のうと思うのでございます」

角「まあ待ちなせえ、私は田舎者で、始めて江戸へ出て来たもんだが、宜く物を考えて見

なせい、盗賊どろぼうに荷物を取られるくらいは災難とはいいいながら些細ささいの事だ、此のマア大でっけえ江戸の火事を見なせえ、何千軒とも知んねえ家が焼け、土蔵倉を落す中で、盗賊どろぼうに包を取られた位ぐらゐはなんでもねえに、母親おふくろに済まねえからと云つて此の溝へ飛込んでおツ死ぬとは、年はいかねえが余あんまり分別がねえ話だ、お前めえさん様がお母つかさん様に逢つて斯ういう訳せえなんの災難で取られたと云つて、あんたが詫事わびごとをしたら、お母つかさん様も聞かない事もあんめえ」娘「でも何うぞお殺しなすつて」

角「馬鹿な事を云わねえもんだよ、あんたがお母つかさん様に云いにくければ、私わしと一緒に往つて詫事わびごとをして上げべえから、あれさ、マア心得違ちがえをしちやいけましねえ」

と留とめるも肯きかず、娘は泣いて身をもがき騒さわぎまするに困り果て、

角「仕様がねえな、五八やく、此処こけへ来こう」

五八「何あんだかねえ」

角「早く此処こけへ出て来こう、何処どこえ往つた」

五八「己おらア人殺しくくと云うから、怖おつかなくつて堪たまりやしねえから、此処こゝに引下ひきさがつて居りやすのだ」

角「今此の娘むすめっこが身こい投げしようとして、留とめめても肯きかねえから此処こけえ来て手伝たつて押おせえて

くれ」

と言われ五八出て参り、

五八「なに身に投るつて、止しなせえ、止すが宜えよ、此んな小けえ所へ這入つて死ねるもんじやアねえ」

角「なアに母様に済まねえから身に投るだつて」

五八「よすがいゝよ、死んじやア命がなくなるよ」

角「あたりめえ然の事だ、娘ツ子私ア田舎者ですが、此の火事に焼け出され、彼方此方逃あつちこつちにげまわ

つて、包を背負たまゝ泊る所もねえので、此処らをうろくして居る所だが、貴女の死のうとするのを見掛け、どうも此の儘見捨てゝ往く訳にやアいきやしねえから、貴方の家まで一緒に送つて上げやんしよう」

娘「有難うございますが、私も焼出されて家はないのでございます、赤坂の火事で焼け出され、深川櫓下の親類共へ参つて居りますと、今晚の火事で焼けてしまい、行き所はございません」

角「仕様がねえ、困つたもんだアねえ、どうか捜したら知んねえ事もあんめえ」

五八「何うか捜したら知んねえ事もあんめえ」

角「私わしらも馬喰町から焼出され、小網町から高橋の方へ逃にげつて泊とこ所ところもないが、何しろ

此処は往来だから、マア一緒にお出でなせえ」

五八「此処は往来だから、マア一緒に来なせえ」

角「なんだ同じ事ばかり言つていやアがる」

と三人連立ち、山の宿しゆくへまいり、山形屋と申す宿屋へ泊り、段々娘に様子を聞くと、

「私わたくしは三田の三角のあだやと申します引手茶屋の娘で、お梅と申す者でございませが、おかくと申す母と二人で深川櫓下の親類内に居りますると、又焼出され、逃げる途中母親はやおやにはぐれてしまい、先刻さつきの男に包を奪とられました、あの中には金子もあり大切な櫛簪くしざんに衣類も入つて居りますから、あれを奪とられた事を母が聞きますれば、どんなに詫びても許す事じゃアございませんから、何卒どつぞ身を投げますからお見逃してください」

とばかり云つて居りますゆえ、角右衛門も困り果て、

角「困つたもんだねえ、何しろ捜して見ましよう」

と外ほかに仕様がございませんから、当てもないこととございませが、三田の三角へ尋ねに行きますのに、若い娘を一人置いて、心得違いな事でもあつてはならんと存じまして、五八を附けて置き、角右衛門は出掛けまして、三角から深川を彼方あつちこつち此方と三日の間捜しまし

たが、とんと心当りもなく、鼻の穴を黒くして、埃だらけになつて歸つてまいりました。
五八「お帰んなんし、旦那さん知れやしねえかね」

角「知んねえよ、どうも困つたもんだ、あの何とか云つたつけね、姉さんまア此処えお出なせえ、あんたも知つての通り、今日で三日の間捜しやすが、なにしろ焼け原べいで尋ねる所もなし、自身番へかゝつて尋ねても何うも知んねえ、誠に困つたもんだが、斯んな事を云つて気にしちやアいけねえが、是程の火事だつて、なんぼ私らが田舎者だつて、こつやつて手間をかけて尋ねて知んねえ訳はねえが、何しろ大火の事だから、お母様も己と同じ五十の坂を越している人、殊に女のこつちやアあるしするから、殊によつたら焼原へ突飛されて、おつ転んだ上へ人がぶち乗つて、マアそんな事もあんめえが、焼け死んだよ
うな事があつたら、貴方の身の上は何処へ連れて参つたら宜いか知んねえから、それが心配でなんねえ」

娘「御親切様、有難う存じます、私共の母親は事によつたら焼け死んだかも知れませんが、焼け死にますれば、私の身体は身抜けが出来て、却つて仕合でございませう」
角「馬鹿なことを云うもんじやアねえ、年イいかねえつて、母様に小言云われるのが辛いもんだから、焼け死ねば宜いなんぞと、苟めにもそんなことを云つちやア済みやしねえよ」

娘「いえ、本当の母親おふくろではございません、嘘の母親でございます、それに心得違いな人で、悪い事ばかり致し、私は幼わたくしちいさい内から育て、くれましたから仕方なく附いて居りますが、ヤレ妾めかけに出るの、それが否いやなら女郎いらぬに売ると無理難題を申し、まだそれ計りではありません、阿兄あにきと云う者がございますが、私には義理ある兄でございまして、私のような者を捕いえ猥いやらしいことを云いかけますが、仮にも兄弟でそんなことは出来ませんと衝放つっぱねましたら、私を憎み出し、母親と二人して虐いじめますゆえ、四五年前から駈出かきだしてしまおうかと思いましたが、参る所もないので、仕方なく悪党の親子の側に喰附くつついて居りますが、母親が焼死やけしにますれば、どんな辛い奉公をしても、私は堅気になりたいと思つて居ります」

角「そりやアえれえこんだが、何か外に親類でもあつて、預けて往ゆく所はありやしねえか」

娘「私わたくしには、親も兄弟もない者を助けて幼ちいさい内から育てたのだと母親おふくろが申して居りますから、何なんにもございませせん」

角「いくつ位から育てたのでがんす」

娘「七歳ななつのときから育てたのだと申します」

角「でも実の親が有りやしよう」

娘「あるのでございましょうが、何処どこに居りますやら一向私わたくしには分りませせん」

角「こりやア困つたが、実の母かゝさま様の名は何と云いやすか」

娘「なんと申すか存じません」

角「それじゃア尋ねる手掛りがねえが、実のお父とつさんの名も知れねえかえ」

娘「親父おやじの名は私の少わたくしちいさい時分懐わくに抱いて寝ていながら、迷子まよこにならないようにと口で教えたことを幽かすかに覚えて居ります、本当か嘘うそかしりませんが、慥たしか本郷春木町味噌屋の裏で岸田宇之助の娘おえいと云えば、はぐれないと云われた事が耳に残つて居ります」

角「なに岸田宇之助の娘だと、はてね、そんなら慥たしか十三年あと保泉村の原中で賊のためかどわに勾引かどわかされた岸田屋宇之助さんの娘おえいさんか」

娘「はい、貴方はどうして御存じ」

角「これは魂たまげ消した、五八なんとマア不思議なことだのう」

五八「どうもマア不思議なことで、おえいさんが出て来るとは不思議なわけだ、して見ると此の火事も中々ちやちや好いい火事だ」

角「ええ、まア心配しんぱいをぶたねえでも、貴方あんたの実の母かゝさま様は達者たつしやでいるから、逢あわせてやるべいい」

娘「ほんとうのお母つかさん様に逢あわせて下さいますと」

角「それには種々訳があるが、話は家へ帰ってから緩くりしべい、己は沼田の下新田という山国だが、お前さんの実のお母様は己が家にいるんだ」

娘「どうもマア不思議な御縁で、どうぞお伴れなすつてくださいまし」

角「実に不思議な縁だ、構わねえで行きやしよう、其の母様は尋ねないでもいゝ」

と急に支度をして三人連立ち、道ではお祭には何も深い話もせず国へ帰りましたが、国の方では江戸は大火事で、江戸中丸で焼けてしまったようなことを話して居る所へ帰りました故。

かめ「おやまア旦那お帰り遊ばせ、江戸は大火事であつたと云いますから、お怪我でも無ければいゝと何んなに心配をして居りましたろう、なんだか江戸は残らず焼けてしまったようなことを申しますし、又後で聞けば、観音様は残っているという人もあり、どんなに心配していましたか知れませんが、五八さん大きに御苦労だつた」

五八「へい只今戻りやした、どうも江戸はえれえ怖かねえ所で、なか／＼好い所だと云うのは嘘でがんです、側から／＼火事が追掛けて来て、彼方此方逃つて、漸くのこん帰つてめえりやしたが、孫子の代まで遣る処じゃアありやしねえ」

角「おかめ、江戸へ往つた土産に好い物を連れて来た、おい此方へおはいんなんし」

かめ「おや何処から連れて来たの」

というに、角右衛門は娘に向い、

角「こりや己おらア鼻かアだ」

娘「これはお初にお目にかゝります、私は旦那様のお蔭様で此方こちらへまいりました者、何分宜しくお願い申します」

かめ「そうでございますか、こんな山の中へ宜くマアお出いでだねえ、久し振で江戸の風ふうを見たが、何うもいゝ器量だこと、年は幾許いくつ、なに十九だとえ、オヤそう、焼け出されてそれで、それはマアお気の毒な、旦那これは何処の娘です」

角「これは十三年あと、保泉の原で勾引かどわかされたお前の娘のおえいだよ、よく顔を見ろ」
かめ「なにえー」

角「これがお前めえの實の母親おふくろだアよ」

と云われ、親子は思い掛けなき再会に、おかめは娘の手を取ってつく／＼顔をながめながら、

かめ「旦那様、どうして此の子を連れて来て下さいましたか」

角「なんとマア不思議なわけで、此間こねえだの火事の時、此の娘こも焼出され逃げる途中母親おふくろ

に別れ、一人で来る後うしろから悪者に附かれ、持っていた包を奪とられ、母親に済まないという所から身を投げようとする所へ己おれたちが通り掛り、助けた上で様子を聞けばこれ〜という話に、己も飛立つばかり嬉しく思い、直すくに連れて来たんだが、何なんと嬉しかんべい」かめ「どうもまあ思いがけない事、大層大きくなつたんで、一寸表で逢つたつて知れる気遣いはありません、お前が七歳ななつの時、私がお前を負おぶい、馴れない旅をして、お前は勾引かどわかされ、私は悪者のために既に殺されようとした所を、こゝの旦那が助けて下さり、それから後御厄介になり、今でも何一つ不足はないが、暑いにつけ寒いにつけ朝夕共にお前の事を些すこしも私は忘れた事はありません、本当にマア幼な顔を見覚えてるよ、旦那の前でこんな事を云つて誠に済みませんが、先せんの配つれあい偶あひの宇之助さんに誠によく似て居りますよ、どうもマア本当に思い掛けない事で、夢のような心持です、一寸立って見なよ、まあ大きくなつたこと、そして風ふうのいゝこと、一寸坐つて見なよ、一寸　り　りなよ」

なぞといろんな事を申し、先まず安心して、先せんの名を呼ぶがいゝと、これから名をも改め、おえいと呼び、多助とは従兄いとこ同士の事故ゆえ、行末は、※めあわせるの心得で、二月の末から五月の頃まで中よく日を送りました。一日角右衛門あるひが多助に云うのに、おえいがまだ御城下を見たことはあんめえから、一緒に連れていって見せて来こう。沼田は土岐様の御領地でござ

います。多助はおえいをつれて参り、見物させて帰つてくると、其の跡から続いて内へ入つて来た男は、胴金造りの長物をさし、菅の三度笠を手に下げ、月代を生し、刷毛先を散ばし、素足に草鞋を穿いて、

男「はい、御免ねえ」

五八「ヒエー何所から来た」

男「鹽原角右衛門さんと云うのは此方でごぜえやすか」

五八「へい、此処でごぜえやす」

男「今この家へ二人連れで這入つた若いお方は此方の若旦那でございますか」

五八「へい、今こけえ這入つたのは己ア家の息子どんの多助さんだが、なんだえ」

男「その若旦那と一緒に附いて這入つた美しい姉さんは此の家の娘でございやすか」

五八「己ア家のおえいさんと云う娘さんだが、なんだえ」

男「へい、そうですね、そんならお前さんのところの娘に違えねえのだね、おいお母ア、

こつちへ入んねえな」

婆「はい御免なさい」

と云いながら這入つて来た婆アは、年頃は五十五六で、でつぶり肥り、頭を結髪に

して、細かい飛白かすりの単衣ひとえに、黒鷲絨くろびろうとの帯を前にしめ、白縮緬びんどうしのふんどしを長くしめ、鼠ね甲斐絹ずみがいきの脚絆かぎに、白足袋麻裏草履はくすくという姿なりですから、五八はいろんな人が来るなアと呟つぶややいて居ますと、

婆「角右衛門さんというお方にお目にかゝりてえもんだねえ」

五八「己おらア旦那は高平村まで用があつて往ゆきやして居りやしねえ、若旦那べいだ」

婆「そんなら若旦那に一寸お目に懸りとう存じます」

五八「多助さん、何んだか知んねえが、貴方あなたに逢いてえという人が来やした」

え、
というに、奥より出て来る多助は今年廿歳はたちで、おとなしやかな息子で、慇懃しんしんに手をつか

多「生憎あいにく親父おやじは居りましねえが、お言置いひ置きで宜よろしいことなれば、私わたくしが承うけわり置おきまして

親父おやじに申聞もうしきけましょう」

婆「貴方あなたは御子息ごしよさんでございますか、只今貴方と一緒に此処こゝの家へ這うりました娘は、

此方こゝの娘むすめだと此の御奉公人ごほうこうにんが云つたそうでございりますが、一体あの娘は何方どゝからお貰もらい

なさいましたか、それを承うけわりとうございます」

多「いえ、貰もらつた訳ではございませぬ、あれは私わたくしの家の先せんからの娘でござります」

婆「お惚とぼけなすつちやアいけません、ありや私の娘だよ、私わたしア三田の三角のあだやと云う引手茶屋のおかくという婆アだが、あれは私の大事な金箱かねばこむすめ娘、此の二月大火事の時深川を焼出され、逃げ出す途中ではぐれてしまい、今日が日まで行方が知れないから、※々《だんく》手分けをして捜がしたが、何うしても知れなかったのが、不図山の宿の山形屋という宿屋に泊っていた客が、娘を連れて沼田のこれくのの処へ一緒に帰つたと聞いた故、私も娘がいなけりやア商売も出来ない事故ゆえ、悴うれを連れて怖ろしい開けない白井はっさい八崎きなんぞと云う怖い山越しをして、此処へ来て、沼田の御城下へ宿を取り、三月の間尋ねたが知れぬも道理、こんな山の中に居るんだものを、阿魔女あまつちよも罰ばちだ、さつき御城下でお前めえと一緒に歩いていたのを見掛けたから尋ねて来たのさ、このの家の御子息うちが悪足わるあしになつて居るか何うだか知らねえが、どういふ訳で、誰に沙汰をしてお前の処の娘にしたか、それを承わりたいので」

多「はい、どういふ訳でがんすか、私わたくしから精くわしい事を申した所がお聞入れもありやすめえし、親父は留守でがんすから、親父の帰るまでお待ちなすつてお呉んなせえ、高平まで参りやしたのですから、明日は慥たしか戻りやしよう、待たれやすなら明日まで待つてください」

婆「待たれませんかよ、お帰りまで宿を取り銭を遣つかつていられるものか、今までの位路銀

を遣つかっているか知れねえ」

多「沼田の何処へ宿を取りなさるか、そこを聞かせて下さりヤア、親父が帰けえつたらお迎むかいに出すようにいたしましょうから」

婆「出来ませんお腹なかがすいたから御膳を御馳走になり、旦那のお帰りまで泊めて置いて下さい、若わか衆しゆさん、盥へ水を汲んで来ておくんなさい」

五八「旦那が留守だから、若旦那がいろ／＼話をするのに解らねえことをいう」

婆「何でもいゝ、私の娘をこゝへ連れて来て、我物顔に娘でございませと云われて、はい左様でございますかと云つて帰けえるような人間じゃアございませんよ、田舎じゃア少ちいさい時から木綿着物で育て、教える事は糸いと繰くりから機はた織おりぐらいで済むけれど、江戸育ちの娘というものは少ちいさい中うちから絹おかいこ布ぬいぐるみ、其の上金にあかして芸事を仕込み、これから親が樂を仕ようと思つて居るのに、其の恩を忘れ、親を見捨てゝ家出をするような阿魔女あまつちよだから唯は置かれぬのだ、マア御免なさい」

と云いながら上りにかゝるから、

五八「上つちやア駄目だ、名主どんにそう云うぞ」

婆「何処へでも往つてそう云え、こつちで名主へ出るのだ、ぐず／＼すると勾かどわか引ひしの罪

に落すぞ」

五八「なに、勾引しとは何んだ」

と云いながら屹度詰寄るを、

小平「やい／＼何をするのだ、手前おれのお母を打つのか、やい百姓、大間抜け、おれのお母に指でもさすときかねえぞ、まご／＼しやアがると此の家へ火を付けるからそう思え」
五八「たまげた、火を付けられちやアたまんねえ」

と五八は江戸の火事で懲りて居りますから驚きました。此の権幕に奥ではおかめとおえいが何うしたら宜かろうと途方に暮れて居ります所へ、角右衛門が帰ってまいりましたが、此の人は名主から三番目の席に坐る家柄と云い、殊に分別ある人ゆえ少しも騒がず落着き払い、彼の親子連の大悪人お角婆アと道連の小平を向うへ　わし、掛合のお話は此の次に申し上げます。

五

さて百姓鹽原角右衛門という人は、田地の三百石も持って居りますが、村方で田地の三

百石も持つていると大したものでございます。殊に家柄もいゝから、座席も名主から三番目というので、其の頃は家柄を尊びました。其の百姓の家だから旨く往つたら二三百両も強請ゆすつて往いこうという権幕で、相手は名に負う又旅お角、是はちよく／＼旅へ出て、昨日帰つたかと思うと又今日旅へ出た、又旅へ出たという所から自然又旅のお角と綽名あだなを取りました者で、其の子として道連の小平、是も胡麻の灰の頭かしらぶん分ぶんで、此奴こいつがどツさり上あぐらげ胡座を搔くと梃てこでも動かないという、親子諸共名うての悪党だから、其の権幕の強いのに怖れて五八も後あとへ下り、名主へ訴えようとしている所へ帰つて来たのが主人角右衛門で、奥へ往つて様子を聞くと、これ／＼と云いますと、なか／＼の沈おちつき着つきものですから、直すぐに出でてまいりまして、

角「はい、是はお初にお目にかゝります、私わしは鹽原角右衛門でございますが、生憎只今高平まで参めえつて居りやせんでござりやしたが、何かマア訳は知りやせんが、忤わけや若わえもんどもが頻りに心配しんぱいして居りやすが、どういう訳で私の所ところへお出でなすつて、人の娘をかどわかしたから名主へ届けるというのでがんです、其の次第を一通り承わつた上で御挨拶を致しやすが、一体貴所あなたがた方たは何処どこのお方ちからでございやす」

かく「はい、貴方が角右衛門さんですか、お初にお目にかゝります、私わたくしは江戸三田の三角

であだ屋という引手茶屋の主人あるじおかくという婆アでございますが、此の間の深川の火事で娘を見はぐり、行方が知れませんか、只今も申すとおり漸々ようくの事で突き留めて、怖ろしい峠を越し、此の沼田という所へまいり、宿を取つて捜して見たが知れませんが居たが、今日不図御城下まわりで見掛ける女は娘に肖にているから、跡を附けて来て見ると、此方こちらの家へ這入ったから、此の奉公人に尋ねると、家うちの娘だと云いなさるから、それはどう云う訳で他人の娘を誰たれへ沙汰をして娘にしなすつたか承わりますと、此の奉公人が名主へ訴えるとか打ぶつとか叩くとか云うから、売言葉に買言葉、果ては遂に大きな声を出しました所、悴が腹を立て、大声を出しましたが、其様そんな事をしないで何うでもお話に成る事だが、お前さん一体どういいう訳で己の娘だと仰しやいますか、それを承わりたいねえ」

角「なる程、ハイ御尤もの次第でござりやす、実はお話をしない事は訳わかりましたねえが、少しマア用向が有つて、今度初めて江戸へ参めえり、馬喰町へ逗留して居りやすと、御案内の通り大でっけい火事、私も始わしめて火事に逢いやした事ゆえ、誠まことにたまげやして、彼方あつち此方こつち逃にげつて、本所のお竹蔵へかゝると、美しい姉ねえさんがお竹蔵の溝どぶへ身い投なげて死ぬべいと云う処を、私がお助け申して段々仔細を聞いて見れば、これ〜でお母ふくろにはぐれ、悪者のために包さらを攫さらわれました、中には大事な櫛笄くわがもあり金も入はいつて居りやすから、あれを取られて

は何うもお母に云訳がないからおつ死ぬと云うから、マア待たつしええと、いらざる事だが私も見兼て、マア兎も角もと宿屋へ連れて往つて、それから貴方の行方を捜したとも捜さねえとも、三日の間焼原を探しやしたが、どうしても貴方の行方が知れやしねえ、困つたもんだと思つたが、何処へ預けると云う処もなく、親類もないというし、仕方がねえから私の家へ連つて参つて段々様子を聞くと、親御もなく兄弟もないというもんだから、私の娘にするより外に仕様がねえじやアあんめえじやねえか

かく「お惚けなすつてはいけませんよ、何だといえ親の行方が知れないから、お前さんは自分の娘にしたとお云いだが、それが立派なお百姓さんの御挨拶でございますかえ、承わりますれば此の村方でもお前さんは名主から何番目へとかへ坐るとかいう立派なお家柄で、田地の三百石もお持ちなさる立派なお百姓さんが、何の挨拶だ、仮令親の行方が知れないと云つても、其の町内に自身番も有れば名主もある事だから、それ／＼へ掛つて名主へでも預けて帰らなければ、本当の親切とは云えない、私がこれから彼の阿魔女で少し息をつこうと思つて居たに、大事な娘を攫われたお蔭で家を持つ事も出来ないから、岡引に頼んで金を遣い、娘の行方を尋ねて貰つたが知れない、その内漸々山の宿の宿屋で、沼田の是々の二人連の百姓が、斯う云う娘を連れて国へ帰つたと云うから、跡を附け

て来て見ると、沼田から三里も引込んだ処とは知らず、宿錢を遣つて長い間捜し、漸々突留めてお掛合をすると、そんな御挨拶、又阿魔女も阿魔女だ、親が知れないからと云つて、ずう／＼しく此処の娘になつて居る了簡が悪いや、他の娘を一晩でも泊めて見れば瑕を附けたとしか思われませんかから、私はもう連れては帰られません」

角「そんなら私の方へお貰い申しやしよう」

かく「貰うなら貰うように、私の方へ話の極りを附けて、得心の上で貰うようにおしなさいな、只は上げられませんよ」

角「なアる程、是は御尤な次第だが、貴方が愛想が尽きて私の処へ呉れるなら、貴方から慥かに娘にくれたという書付を一本お貰い申していもんだが、たゞは上げられないとは何ういう訳でがんす」

かく「旦那、お金を三百両おくんなさい」

角「なに三百両とえ、そんな事を云つたつて出来ねえ相談だ、何故三百両呉れると云うのでがんす」

かく「何故と云つて二月から五月まで他の娘を引攫つて、斯様な山の中へ連れて来て居るんだよ、私は引手茶屋をして居るから娘が居なくつては商売をすることも出来ねえから

長休みをするのみならず、路銀を遣つて山の中へまで尋ねて来てサ、はい上げましようと言つて江戸へ帰られますかえ、呉れるなら上げまいものでもないから、それだけの入費をお出しなさいな、私も十九まで育てた埋草をしなければなりませんよ、金が出来ねえなら直ぐお返しなすつて下さい、連れて帰つて女郎にでも何にでも打ち売つて埋草をするから」

角「誠にお気の毒でございませうが出来ません、どうもハア三百両は逆も上げる訳には参りやせん」

かく「旦那、ただ参りませんで済みますかえ、そんなら何故他の娘を無沙汰で連れて来たよ」

角「親に無沙汰で連れて来た其処は重々済まないが、何分親御の行方が知んねえもんだから、抛なく連れて来やしたので」

かく「親の行方が知れないから連れて来たという訳で済みますかえ」

角「誠に済まねえが、全体彼は貴方の娘に違ねえのかえ」

かく「私の娘だから私が路銀を遣つて態々追掛けて来たのさ」

角「それがサ、あのお梅という娘は七歳の時に保泉村の原中で勾引かされたお榮という娘

だが、何うしてそれを貴方が娘にしなすつたえ」

と云われおかくは慥とし、

かく「はい、貴方は何をお云いなさる」

角「何も云いましねえ、あれは岸田屋宇之助と云う旅商人の娘ですが、母親が亭主の歸りの遅いのを案じ、あの娘をつれ、亭主の行方を捜して小川村まで来る途で、親子連の胡麻の灰のために勾引かされた娘だが、それを何うしてお前さんは娘にしたか其の次第を承わりていもんだ」

かく「どうもマア思い掛けない事をおいいなさる、勾引かされたか何だかそんな事は知りません」

角「お前さん惚けたつて無益だよ、おかめ此処へ来て一寸お目にかゝれ」

と云われ、怖々ながら出て来るおかめとおえいは、角右衛門が居るから大きに気丈夫に思い、おかめはズツと進み出て、

かめ「おい、おかくさんとやら、お前忘れはしまい、十三年あと鴻の巢の田本で中食をした時お前さんと道連になり、やれこれ云つておえいを可愛がり、それから駕籠へ乗せに来ると、保泉の原中で此のおえいを攫い、よくも此の年月娘にして居なすつたよ」

と云われ、

かく「おや、おかみさん、どうもマア」

と云つたが、実母のおかめが此の家うちにいるとは思いがけない事ゆえ、流石さすがのおかくも仰天して、言う事も前後致し、おどくしながら、

かく「誠に何うもマアおかみさん、思おもがけない処でお目に懸りました、あなたは何ういう訳こつちで此方にいらつしやいますか」

角「これにはいろく訳があつて、今は私わしが鼻かに持つて居りやすよ、それから火事場でもつてからに母親おふくろにはぐれておつ死のうとする娘を助けて連れて来ると、私がほんとうの娘だという訳よ」

かめ「マアどうもいけしやアくよく他の娘ひとを攫さらつておいて、強談いすりがましい事をおいだが、誰たれに沙汰をして他の娘を自分の娘におしだよ」

かく「まアおかみさん、そう仰しやればお腹も立ちましようが、私も旅なれない事故ゆえ、あの折おりはお前さんにはぐれたから、どうか捜してお前さんに渡そうと思つて、彼方あちこち此方と捜しました、どうしても行方が知れず、あの子に聞いても頑是がんぜのない七歳ななつか八歳やっつの子供ゆえ何も分らず、親類は知れず、仕方がないから江戸へつれて行つて私の娘にして育てるの

は当然じやありませんか」

角「お前さんの云う所も又尤もだ、親を尋ねても知れず、何を聞いても頑是ねえ子供で分らねえから、あんたが娘にしたと云ったねえ」

かく「左様でございますよ、それを勾引かしたなんぞと云われちやア詰りやアしません」

角「御尤もの次第でがんす、私も其の通り火事場で彼方此方尋ねり、どうか爺さんに

渡して上げべいと思つたが、どうしても知れず、外に親類もねえと云い、仕様がねえから連れて帰つて娘にしたんだが、お互の訳じやアありやしねえか」

かく「お互と云つたツて、それじやア何うもマアお前さんどうも、江戸から四五十里もある沼田まで連れて来るのは酷いじやアありませんか」

角「あんたも保泉村で勾引かしてもあるまいが、親の行方が知んねえからと云つて、江戸まで連れて往つて娘にすれば道理は同じ事だ」

かめ「本当にマアおかくさん、なぜ他の娘を」

角「騒がないでもいゝ、己が云う所があるから、黙っている、扱これは実の母親でござりやす、あんたも実親が知んねえから、自分の娘にして居たんだらうから、実親が知れたら返すだらうねえ」

かく「返すツたつて、どうも徒は返されません、私も路銀を遣い、こうやって態々々尋ねて来たんですものを」

と言つている側から、道連の小平がしやばり出て、

小「お母黙つていねえ、お母は耄碌しているから詰らねえことばかり言つている、旦那えお前さんは火事場でお母の行方が知れねえから娘にしたと仰しやるが、私の方じゃア七歳の時からお母が丹誠して、お絹布ぐるみ、其の上にいるくいな芸事を仕込んで、これから樂をしようと思つている其の恩義を忘れて、ぬくくと此方の宅にいる阿魔女も阿魔女だ、それをたゞ此方の宅へ取上げて、只帰そうといっちやア、旦那それじゃア話が出来やせん、私も出る所へ出て話を付けやしよう」

角「出る所へ出るなら勝手に出なさいな、だが全体あの時娘を勾引かされ、母様が悪者に慰さまれようとする処を、私が通り合して助けて遣り、伊勢崎の銭屋へ掛り、手を分けて捜して貰つたが、何分娘の行方が知れないから、八州へ頼み段々勾引しの詮議をすると、馬方の倉八とかいう奴と松五郎源藏という三人を縛つて、名主の庭へつれていつて調べて見ると、親子連の胡麻の灰に三両宛金を貰つて頼まれたと白状したから、三人は送られてしもうたが、親子づれの胡麻の灰の行方が知れず、仕様がねえから、マアおかめを私の処

へ連れて来て置くうち、縁あつて今じやア女房にしている訳だが、これを表向にするならおしなせえ、伊勢崎の錢屋へ係つて調べの繕よりを戻せば、お気の毒だがお前達の腰に縄が付くべいという考えだ、それでもいゝなら遠慮はないから出る処へ勝手にお出でなせえ、本當なら己おれらが方から出べいと思うんだが、そんな荒あれえ事もしたくねえから、五両の金を上げべえから、草鞋錢と思つて、これで帰けえるならば、最もう紛いさくさはなしに娘を返けえしたという書付を一本置いていつて下さい」

小「お前さん、そんな解らないことを云つちやア困るじやねえか、七歳ななつの時から育て、路銀を遣つかつて斯こんな山の中まで尋ねて来て、五両ばかりの端た金を貰けえつて帰けえられるか帰けえられねえか考えて御覽なせい」

角「帰けえられねえけりやア何うする、己おれが方から訴えて調べの繕よりを戻せば、五両の金も取れないばかりでなく、腰に縄が付くんでがんすが、五両の金も遣やりたくもないから、いやなら然そうしようか」

かく「どうもお前さん、そんな只どうも」

小「母おふくろ親のいう通り、五両ばかりの金じやア仕様がねえ」

角「否いやなら訴える方が宜かんべい」

かく「訴えるがいゝツて、そんな勝手な事を云つちやア困りますねえ」

五八は先刻から此の様子を見て居つて、

五八「旦那さん、こういう奴は矢張話の縊を戻して、繩ア掛けて、名主様へ引いて往つて、闇え所へ押入る方がよかんべい、鳥渡名主どの所へ往つてくべいか」

かく「お待ちなさいまし、帰りますよ」

と訴えられては身の破滅だから、五両でも取らぬは損と思ひ、

かく「小平や書付を書きな」

と云われ、しぶくしながら小平は書付を書き、五両の金を請取り出て行きましたが、

残念で堪りませんゆえ、どうかして再び勾引そうと思ひ、須川村という処へ宿を取つて

様子を伺つて居りますと、此方は安心致しました。処が六月初まりになりまして、角

右衛門は風の心持から病が重りて、どつと床に就きましたゆえ、孝行な多助は心配いたし、

神仏に願をかけ、精進火の物断で跣足参りを致しまするが、何分効験もございませ

ん。角右衛門は村方一同に好く思われて居る人故、代る／＼見舞にまいるうちに、六月

の晦日頃は最う息も絶え／＼になりましたゆえ、家内親類枕元を取巻き看護をして居

り、分家の太左衛門は参りて伯父の看病を致して居りますと、角右衛門は苦しい息をつき

ながら、

角「太左衛門く、一寸こけへ来う」

太「はい、伯父様貴方確かりしねえではいけませんよ、七十八の爺さまではなし、死ぬなんぞという弱え気を出しては駄目でがんす」

角「駄目だツて駄目でねえツて、今度は何うしても死病と諦めたから、汝がに只だ一言臨、終に言い残す事があるから此処え呼んだんだが、おかめも此処え来う、多助も此処え来う、おえいも五八も皆呼んでくれ」

というから大勢枕元を取巻きました。

かめ「旦那しつかりなさいよ、貴方しつかりして下さいよ」

多「お父さん、気を慥かに持つて達者になつて下さいよう」

角「太左衛門己が血統というは汝より外にねえ」

太「私も若えうちに親父に死なれ、又母親にも早く別れ、今まで皆な伯父様の世話になつた事は私も心得て居りますから、あんたが達者でいて、わしもこれからちつたア貴方になつてもさせべいと心得て居りやすから、弱え心を持つちや駄目でがんすよ」

角「実は此処にいる多助を己が跡目相続に貰つた訳というものは、十三年あと八月二日、

千鳥まで田地を買いに行く時、追貝村おつかいむらでな、今の唄かゝあのおかめの先せんの亭主、岸田屋宇之助という旅商人たびあきんど、元は阿部様の御家来鹽原角右衛門と云う己と同じ名前の侍の家来けれえだが、其の御主人の角右衛門様という人は、小川村へ浪人して居った所、八年ぶりで宇之助さんがお目にかゝり、段々の話に何うか主人を再び世に出していと宇之助という人が、己が金を持つて知っていることを知つて跡を附けて来て、金を貸してくれろ、主人を世に出してえから貸せと云うから、己おら泥坊だと思つて泥坊々々となると、突いきなり然脇差を引抜いて追掛おつかけて来たから、逃げべいとすると木の根へ躓つまずき、打ぶつ転ころがると、己の上へ乗し掛り殺すべえという訳だ」

太「ハアえ、これは初めて聞きやした、成程飛んだ訳で」

角「所がなア、己が下で泥坊々々となつていと、其の時向山を通りかゝった獵人かりゆうどは、鹽原角右衛門という浪人で、己のがなるを聞いて助けべえと思つて、現在忠義の家来なり、妹を片付ければ弟も同様な岸田屋宇之助を鉄砲で打ぶつたえ」

太「はアえ、成程大でつけえ間違まちがえになりやんした」

角「それがサ間違まちがえで、そうすると其の獵人が駆付けて来て、死骸たまげを見て魂消たまげて、あゝ宇内か知んなかつた、己が浪人して居るのを世に出してえと思つて金が欲ほしくなつたかえ、そ

うとは知らず汝われを打ぶつた、あゝ可愛かわいそうな事をしたつて、その立派な侍が男泣きに泣くつてや〜」

太「はアえゝ、成程フン、とんだ気の毒な間違いで」

角「するとア、仕様がねえから己も手伝つて其の死骸を鉄砲で担いで、小川村の浪人の内へ行つて名告なり合せて見ると、向うも鹽原角右衛門、己も鹽原角右衛門、同じ名前なめえで不思議に思つたから、段々聞いて見ると、元は野州塩谷郡塩原村の者と分つて見ると、元は己と由縁ゆかりのあるものと分つたから、命が助かつた替りに金を向うへ遣り、其の時貰つて来たのが此処に居る多助よ」

太「はアえゝ、とんだ深い縁でがんす」

角「すると其の年の九月の五日に、保泉の原中でおかめを助け、段々様子を聞けば、娘がかどわか勾引され、亭主が死んだことを聞き、身い投げて死のうとするのを、段々論さとして止めて置くうち、先せんの鼻アが死んで、おめえ等が勧めに斯うやつて今じゃア女房に持っていた処が、此の二月江戸へ往つて火事場から連れて帰つたおえいは、十三年あと勾引された娘だという訳から、斯うして居るのだが、己が亡ない跡では此の多助もどうせ女房を貰つてやんねえければなんねえが、おえいと多助とは十九と廿年はたむしあい合も好かんべいと思う、母親おふくろは

多助のためには実の叔母なりするから、血統三人で此の家を履めば大丈夫、そうして太左衛門汝が後見をして、農作の事から何かから万事指図をして呉れば、此の鹽原の家は潰れぬえと考えるから、己の息のあるうちおえいと多助と盃をさせ、夫婦にして、年に一度も小川村へ往つて右内という人の法事供養をさせてくれるように汝に頼むのだが、己の考えは悪いか」

太「悪いどころじゃアねえ、誠にはア尤もの訳だが、そりやア貴方が癒つた後の事でよかんべい」

角「癒らねえと思えばこそ盃をさせるのだ、サア此処へ来て早く内輪ばかりだから酒だけでいゝ、太左衛門媒人になつて早く酌」

と急立てられ、多助おえいの兩人は恥かしそうに坐っている所へ、太左衛門は酒を持って来て、まア嫁ツ子からと云われた時は、何というべき言の葉も岩間の清水結び染めて、深き恵みに感じつゝ、有難涙に暮れて居りましたが、角右衛門は七月二日終に歿かり、戒名は一庵了心信士と申し、只今に八軒寺町の東陽寺という寺に石碑が残つて居ります。先ず野辺の送りも済ませてしまい、それから三十五日に多助はおかめおえいと五八を連れて、養父の墓参りに参りました。其の時用事あつて太左衛門はまいりません。参詣終

りて四人連立ち、帰り道で雨が降出しましたから、

多「五八や雨が降って来て困るなア、沢山たんとの降りも有るまいが、ひどくなると困るから此の木の下に雨宿りして居るから、駆けて行つて傘を取つて来てくんな」

五八「へい、往つてまいりましょう」

と急ぎ足で往つてしまうと、いつから附けて居りましたか、道連の小平と繼立の仁助が横合から頼冠りして出て来て、突いきなり然おえいを担いで連れて往ゆこうとしますゆえ、多助は驚き、一生懸命小平の足にしがみ付き盜賊どろぼう々と云うのを、えゝ邪魔するなど蹴返けかえせば、多助は仰向けに倒れたが、又起上り取付けば、おかめも驚き取付く所を横面よこつらを擲はりたお倒す、又這寄つてしがみ付くうち、ずるゝとおえいを仁助が引ずりながら脇道へ入り込む。

えい「アレー人殺しゝゝ」

と云つても田舎の事ゆえ、助ける者は一人もなく、所へ通りかゝりましたは土岐伊豫守様の御家来原丹治はらたんおなじぞんぎぶろう同丹三郎という親子の侍、湯治に参りまして帰り掛けに、先程から女の声で人殺しと云うは何事なるかと急いで来て見ると、雨の中で打合うちあいが始まり、大の男が女を捕とらえて蹂躪ふみにじります様子が烈しいゆえ、見兼て丹治殿が突いきなり然女を連れて逃げようとする仁助の横鬢よこびんを打ぶつ、打ぶたれて仁助は跟よろける途端、前足を挙げてはたと蹴けられて

尻餅をつく、又小平が向つて来るやつを扇子を以てトーンと頭を打ちましたから、兩人は呆氣に取られて居ります。

丹治「狼藉者、女を捕えて何をする」

かめ「お蔭様で助かります、娘を勾引かそうとする悪い奴でございませす、どうか殿様お助け下さいまし」

小「殿様は何も知らねえからだ、あゝ痛え、滅法に頭を打たれた、殿様此の阿魔女は私の妹ですが、勾引かして江戸から此の沼田の下新田まで連れて来た事を知り、母親と二人で掛合に来やしたら、土地の者には叶わねえ、大勢万ぜい寄りたかつて私共に赤恥をかゝせて帰そうとするから、腹が立つて堪らねえ、私が妹を私が連れて行くに何も不思議はねえ」

かめ「殿様、なアにこれは私の実の娘でございませす、七歳の時彼奴が勾引かしたのでございませす」

小「なに殿様は何も御存じないのだ、私の妹に違いないのだ、此の間の火事に母親に放れ、行方も知れねえから段々様子を聞くと、此所に居る事が分り、路銀を遣い、此様な山の中まで尋ねて来て、手ぶり編笠で帰られませすか」

かめ「そうじゃアありません、彼奴から私の方へ此の娘を渡したという証文を入れ、印形まで捺おしてよこしたから、金子を五両遣つたのでございます」

小「旦那は何も御存じはありません」

丹治「何だか貴様達の云うのは己にはさっぱり分らん」

と云いながらおかめに向い、

丹治「一体どう云う訳だ」

かめ「全くは私が娘で、七歳の時に勾引かどわかされた者でございます」

丹治「そうだろう」

と云つて居る後に立うしろつていた倅せがれの丹三郎は、折々朋友ともだちに誘われ、三田のあだ屋へ遊びに往つた事がありますから、お梅も小平も予かねて知つて居る事ゆえ、

丹三「お父様とつさま、あの男は道連の小平という悪い奴で、胡麻の灰なぞをすると承うけわつて居ります、母親おふくろも余程悪党だそうでございます、嘘うそでございますよ、慥たしか其の娘は幼年の時攫さらつて来たのか知れませんが、何でも其奴そいつは胡麻の灰だという事です」

小「何だ人を胡麻の灰と云つたな」

丹三「黙れ、貴様己を知つて居るだろう、同役と一緒に貴様うちの家へ往つた事があるが、胡

麻の灰だと云う事だ、ぐずぐずすると手打にするぞ」

と云われて兩人ふたりの悪者は這ほう々々の体ていで逃げて行きゆます。後あとに親子三人の者は大喜びにて、マア兎も角もお礼を申したいから、宅へ入らして下さいと云うので、これから丹治親子を下新田の宅へ連れて帰りましたが、これが多助のために大難の来る起りに相成ります。お話は、次回つぎまでお預りに致しましょう。

六

鹽原多助は養父角右衛門みまかが歿みまかりまして、三七日の寺詣りにまいりました。帰りがけ、悪者小平、仁助のためにおえいが再び攫さらわれてまいる所へ通り掛りましたのは、土岐様の御家来原丹治親子で、危い難儀を救つて呉れましたゆえ、実に地獄で仏たとえの譬たとえの通り、誠に有難いお方で、どうか私宅わたくしまでいらつしやいますよう、何はなくともお礼を申し上げたいと申し、またおえいは三田のあだ屋に居りました時分、丹三郎がちよくく遊びにまいり、馴染ではあるしする所から、打連れ立って多助の宅へ寄り、馳走になりましたが縁となり、是より度々たびく此の家うちへ丹治親子が遊びに参りますると、丹治も年四十五歳なれども鰥やもめぐ

暮しでございませすし、おかめも夫角右衛門が亡りまして未だ三十七という年で、少し梢す枯れて見ゆれど、色ある花は匂い失せず、色気沢山たつぶりでございませす。殊に家来右内と密通して家出をするくらいの浮気ものでございませすから、酒の上とは云いながら、遂に丹治と密通致し、おかめは深く丹治を思ひませするが、世間の手前多助の前もありませんが、忍びく逢うことも度たび重かさなり、今ではもう恥かしいのも打忘れ、公おおびら然で逢ひ引を致しませすゆえ、人の目つまに掛ることも度々あり、おかめは何うか丹治と一つになりたいが、そうするには多助を追出さなければ邪魔になつてなりませせんが、多助を追ひ出すには何うしたら宜よからうと考へませすと、又悪智の出るもので、丹三郎も未だ独身ひとりものなり、どうか丹三さんとおえいと色にでも成つたなら、私も丹治さんと俱とも々々に未永く樂しめるだらうと思ひませして、主ぬしあるおえいに色事を勧め、丹三郎と密通をさせ、親子同志で姦まおとこ通をいたし、誠に宜しからぬ事で、多助も薄々知つては居りますが、事荒立てゝは血で血を洗う道理、家の恥おのれ己の恥こと、殊に亡なつた養父角右衛門のお位牌へ対して濟まないし、あゝ情ない心得違はくいの母親おおや、殊に女房おえいまで左様な事を致すとは、犬畜生のような奴と思ひませするが、何うも事を表向にする事が出来ませせん、相手は御領主土岐様の御家来なり、迂濶の事を言たて立たては出来ませせんが、どんな人の好よいものでも、自分の女房を人に取られて腹を立

たないものはございませんから、多助も腹が立ちますから寧ろ此の家を駆け出してしま
 うかと思いましたが、いや／＼此の家を出たならば必ず原丹治親子が此の鹽原の家へ乗込
 んで来るに違いないが、侍には百姓業はとも出来ないから、鹽原の家は必ず潰れてしま
 うに違いない、どうも此の家を潰しては八歳の時から貰われて来て育てられ、大恩ある親
 父様に濟まぬ義理、石の上にも三年の譬えもあれば、どうか此処で優しく孝行を尽したら
 終には母の心持も直り、丹治親子を寄せ附けぬことにもなるうかと思ひ、母子諸共非道に
 多助を虐めるのを怨み返しも致しませんで、優しく孝行をすれば猶更附上り、其の年の
 九月になりました所、益々多助を悪みます。多助も色白で短身な、温順しい好い男でござ
 います、田舎稼ぎを致しますからじゝむさく、家にとては居る事も稀で、月に六度ぐ
 らいは馬を引いて歩るき、殆ど家には寄り附きませんから、日に焦けて真黒になり日向
 臭い、又丹三郎は江戸育ちのお侍で男振も好く小綺麗でございませぬから、猶更多助が厭
 で実に邪見にする事全一年、その間一つ寝もせず振付けられても、多助は辛い所を忍びノ
 けて馬を引いて出ますが、人に話も出来ませんから、泣きながら馬を引いて歩くので、世
 間の人泣き多助々々と緋名を致します位のこと、それでもおかめ母子は増長して多助
 を虐め出そうとするうち、丁度八月朔日の事でございませぬ、丹治父子が多助の家へまい

りましたゆえ、どうか多助を無いものにしようと思ひ、おかめは丹治に向ひ、

かめ「私もマアこうやってお前さんに何時も御無理なことを願ひ、貴方もお非番の時には度々来て下さいますが、お役人様ゆえお泊りなさることも出来ませんけれども、どうかして月に五六度はお泊め申したいと思つて居りますが、世間の手前多助の前もありまして、思う様に参りませんが、本当に此の頃は変に多助が悪く思つて来ましたよ」

丹治「斯うやって父子で度々遊びに来るのは宜しいが、多助も馬鹿でない男だから、疾くり訝しいと感附いて居るだろうが、来る度に厭な顔もしないで、旦那様宜くいらつしやいました、お母さん御馳走をして上げて下さいよとハイ云つて畳へ頭をこすり附けるようにされるので、何となく来にくくつてのう丹三郎」

丹三「毎度お父様も左様仰しやつていらつしやるのサ」

かめ「なアに貴方彼奴だつて私の子ですから私の氣に入らなければ叩き出しても宜いのですが、そもいきませんから、何ぞ仕様があつたらばと思つて居るんですが、貴方も宜く心掛けて置いて下さい」

と話をしている所へ奥からおえいが手紙を持って出てまいりました。

かめ「旦那様がお兩人来ていらつしやるのに何をして居るんだよ、マア此処へお坐りよ」

えい「おや旦那様宜くいらつしやいました、アノお母さん、多助さんが今朝帯を締める時に袂からこれが落ちましたよ」

と手紙をおかめの前へ出し、

えい「分家のお作さんから多助さんの所へよこした色文で、まア馬鹿くしい事が書いてあるの」

かめ「おやまア年頃になるとおかしなもんだねえ、多助がいゝとか何とか云つて惚れて居るそうだが、まア旦那此の文を御覧なさいよ」

と云うに、丹治はどれくくと云いながら其の手紙を取り、

丹治「成程少さいうちから機織はたおりや糸繰いとくりばかりさせて置いて、手習などをさせんから手の書けないのは無理もないが、俗にいう貧の盗みに恋の歌とやら、妙だなア、鉄釘かなくぎの折おれのようにポツく書いたなア、えゝ、なにく……一筆書ひとふできしるし 《より》……アハハ、これでは丸で附文つけぶみのようだ」

と丹治が手紙を読みました故、おかめはこれを好機会いゝしおにして分家へ話をすれば、分家の爺じいは堅いから多助を追出すのは手間暇あひいらすだから、斯ういう都合にしましょう、彼あいう都合にしましょうと密々ひそく話ばなしをしている所へ、何にも知らず、仏と云われる多助が帰つてま

いり、勝手の方から上つて来て、

多「旦那さんお出なさいまし、此間こねえだは私わしらが留守の所へお出でゞがんとしたそうでした
が、何時もろくな物も上げましねえでおそうく々べい致しやす、今日は又宜くいらっしゃい
やんした」

丹治「おゝ多助か、毎度来て厄介になつて気の毒だ、外に馴染もないものだから、それゆ
えに斯うやつて来るのだが、お前もちい小さい時から田舎者に成つたけれども、江戸生れだそ
うだが、斯うやつて江戸子同志えどっこで寄集よりあつまるとは誠に頼もしいものだ、毎度種々いろく馳走に
なつて濟まない、決して構つてくれるなよ」

多「何も上げる物はがんせん、お母かさん、どうか旨い物を出して御馳走をして上げて下せ
え」

と云いながら表へ出にかゝると、

かめ「出て往つちやアいけねえよ、少し話があるから待ちねえ、お前は本当に呆れたひど
い奴だよ、此の節は家うちへ寄り附かないと思つたら、分家の娘お作と私いたずら通をして居るね」
多「へい、なんですなえ」

かめ「とぼけなさんな、お作とくつついて居るだろうよ」

多「こりやアまア魂消たなア、お母さん誰がそんな事を云いやんした、分家の娘と浮気狂いをした覚えはがんせん」

かめ「おい／＼いくら口の先でしらを切つても、書いたものが証拠だ、これでも嘘だと云うか、これを見な」

と彼の手紙を多助の前へ投げ出すを、多助は手に取り、

多「こりやアお作が己ん所へよこした手紙だが、こんな手紙があつたか、困つた奴だナア、まアお母さん、私が所へ此の手紙を送つたか知りませんが、私覚えはござりやせん、どうしてあんた此の手紙を持つて居やんす」

えい「多助さん、お前さんが今朝衣物を着換える時袂から落ちたから、私がお母さんにお目にかけてのだが、お前さんもあんまりだねえ、私もこうやってお前さんと夫婦にはなつて居るものゝ、今日までろくに口もきかないが、其様なに私が気に入らなければ、お母さんに話を附けて貰つて離縁状を書いて下さいよ」

かめ「おえいは私には只た一人の可愛いゝ娘、其の連添う夫に私通をされては世間へ対して外聞が悪いから、世間へ知れない内、只た今おえいに離縁状を書いて渡して遣つておくれよ」

多「お母さん、何うぞ御免なすつて下せいまし、仮令書いたものがありやしても知りやせん、私お作と私通アした覚えは何処までもがんとせん、又おえいに離縁状を出すことは出来やせん」

丹治「これく多助、何もそんなにしらを切る事はない、此方には書いた物という慥かな証拠があつて母が云うのだ、又男の働きで一人や二人の女をこしらえるのは当然だか前だから、くつついたらくつついたと云う方が宜しいわナ」

多「宜も悪いも私些とも覚えはがんとせん」

かめ「書いた物が何よりの証拠だに、お前が幾許知らないと云つても無益だよ、これから分家へ往つて話をするから一緒においで」

と云われて多助は当惑致し、

多「分家へ往くつて、これは何うも困りやしたなア、叔父さんは物堅えから、そんな事を聞かせたら怒つて、私い済みませんで出入りも出来なくなりやんすから、どうか御勘弁を願えてい」

かめ「御勘弁だつて、慥かな証拠があつて見れば仕様がな、そういう了簡ならばおえいに添わせて置く訳にはいきませんと云つて、何時まで独身でも置かれなから、亭主を持

たせるから離縁状をお出しよ、何故離縁状が書けないのだよ」

多「何故書けねえつたつて、是れべいはどうあつても書けやしねえ、死んだお父様の遺言に、汝とおえいとは従弟同志だから夫婦にしてやるが、苟めにも喧嘩して夫婦別れをするような事があると、草葉の蔭から勘当だぞと云いやんしたから、私も大概な事があつても父様にめんじて堪えていて、何一つ云つた事はがんせん、私も我儘ものでがんですが、家内で物争いが出来て、おえいを離縁しては、何うも死んだ父様のお位牌へ対して済みやしねえから、おえいに私が氣に入らねえで夫婦に成つて居るのが厭やならば厭やで構いやせんから、家内は切れても表向だけは夫婦と言わなければ、世間へ対し、分家の叔父様に對して済まないから、何うぞ然うして下せい」

かめ「それ程義理を知つて居ながら、何故分家のお作と淫事をしたよ、ぐずぐずして居てじれつていな」

と云いながら、有合せた細い粗朶で多助の膝をピシイリくと打ちますから、多助は泣きながら、

多「御免なすつて下せえまし」

と言うを耳にも掛けず、これでも言わねえかくと二つ三つ続け打に打たれて、多助は

心の中で、情ないとは思いますがもしおらしく、

多「お母さん、何うぞ堪忍しておくんなんし」

と下から出れば附け上り、おえいも共にまくり立て多助にくって掛る所へ、這入つて来たのは此の家の分家の太左衛門で、此の様子を見兼ましたから、つかくとおかめの傍へまいり、

太「まア待たんしよ、何だ多助、まアく私^{わし}が来たから待つておくんなんし、やい多助、汝^{わが}大え形をして母^か様に折檻^せされるという様な馬鹿なことが有るか、母様^かどういふ訳だか知んねえが、まア待つてお呉んなんし」

かめ「おや、お前さんがお出でなさろうとは思いませんでした、ほんの家内^{うちわ}だけの事ですが、余^{あんま}り私も腹が立ちますからつい暴^あれいことをしましたが、今お前さんの所^{ところ}へ往^ゆこうかと思つて居る所^{ところ}へ、あの御城内の原さんがいらつしやつて」

太「これはへい毎度多助から承^{めいど}わつて居りやすが、私^{わし}は一つ村方でも上^{かみ}下^{しも}を隔てゝ居りやすから、ろくに此の家^{うち}へ参^まりやせんから、御挨拶も致しやせん、何分御鼻^{はな}貞^{ぢん}を願^{ねが}ひやす」と慇^{いんぎん}懃^{じん}に両手を付きますと、

丹治「いや、とんだ間違いでねえ、手前も迷惑を致した」

太「何か知りやせんが、届かん奴で意気地なしでがんすから、それは母親に打たれるという馬鹿で、多助、汝此処の家の相続人で、汝が此の家の心棒だ、一軒の主たるものが仮令どういふ悪い事が有つたつて、母でも無闇に打たれるという論はない筈だ、何をしくじつた」

多「私悪いでがんすから、叔父さんお母さんに詫言して下せえ、お願いでんすから」
太「何悪い事を仕たんだえ」

かめ「なにお前さん、どうも人に話も出来ませんけれども、言いましようが、実はお前さん処のお作さんと多助と密通いて居りますねえ」

太「はて、それはどういふ訳で」

かめ「親の目つまを忍び逢引するが色事で有りますが、本家分家の間柄で、大それた事をして居りますから、私が厳しく云わなければ世間様へ済みませんよ、是を見て下さい」

と言いながら彼の手紙を太左衛門の前に置く。

太「はい成程、己アお作が多助へ送つた文だが、馬鹿なマア此間まで、青鼻アくつ垂して、柎の葉で笛を拵えて遊んで居たのがハア、こんな事を仕出かすように成つたかえ、ナント馬鹿々々しい事だがのおかめさん、此の手紙の文を読むと、娘が多助に惚れて手紙

を送つたか知んねえが、多助が方では知んねえに違いねえというものは、未だ密通くつついたとも色事をしたとも文面に証拠はねえのに、之を証拠にして荒立て、事を出かせば、此処うちの家も己おら家も恥になるからこれは私わしに負けておくんなせえ」

かめ「お気の毒ですがまげられませんよ、他の事とは違います、本当に呆れた奴でござい
ます、多助がそういう根性だとおえいが可愛そうでございませうから、今うちの中に切れ話にし
て、おえいに実のある堅い亭主を持たせる了簡ですから、離縁状を書いてわたした其の上
で、多助をお作さんの婿にするとも何うとも勝手におしなさいよ」

太「まだ色事を出かした訳でもねえのだから、穩便に済ませれば世間へも知んねえから」
かめ「いけませんよ、馬鹿々々しい、余あんまりな不人情だからお前さん早く離縁状を書かせて
下さいましよ、書かせて下さらなければ、私もおえいと一緒に出て往ゆきますよ」

太「お前めえが何も出る訳はあんめえじやねえか、そんなら是程頼んでも勘弁は出来やせんか、
己おら娘は未だ主ぬしのあるものじやねえ、処きむすめ女でございやす」

かめ「だつてお作さんは、幸右衛門こうえもんどの倅の圓次郎さんが養子に往ゆく約束になつて居る
じや有りませんか」

太「約束になつて居りやすが、未だ結納を取交した訳でもなく、唯ほんの口約束だけの事

で、婚礼をした訳ではがんせんから、どういふ事があつても間男と云う訳はあんめえ、又男の働きで一人や二人の女も出来ねえとも云われねえ、それ処どころじやない、立派な亭主持の身で有りながら悪いことをするものが世間にはいけいこと有りやす、一昨日おと、いたな店で盆の余り勘定をしていると、彼処あそこでは酒も売り肴もあるもんだから、若いお侍さむれえが腰掛けて一杯ぱいやつていた、其の人の年頃はそうさ廿二三で、ちようど其処そこに入らっしやる丹三郎様ぐれえの年恰好で、貴方あなたに能く肖よているお方サ、すると女の艶書いろがみの伝つてを兎守子こもりっこに頼んで手紙を其のお侍さむれえに渡すと、お侍さむれえが惚れた女からよこした手紙だから飛立つように喜んで、其の文ふみを開いて読んでしまい、丸めて袂へ入れた積りで出て往つた跡を見ると、其の手紙が落ちて居たが、これは済まねえ訳だと思ふが、此の文の文面で見ると、去年のマア八月あたりにから悪い事をしやアがつて、今年になるまでくつついて居て、其の亭主が邪魔になるもんだから追出してしまひてえと思ひ、科とがもねえ者へ不義の名を付けようとするだ、太ふてい阿魔あまじゃねえか」

と云いながら懐より手紙を取出し、

太「なに〜名前は丹三郎さま参るおえいより、何だ手を出さねえでもえ〜よ、似た名もいけい事あるもんだ」

おえいより丹三郎さまと聞くより、おかめも顔色変え、
かめ「詰らない事をおしなさるな」

と云いながら太左衛門の持つている手紙を取りに掛る。

太「手を出さなくつてもいゝよ、斯ういう悪い事をする太い阿魔があるだが、天命で此の文を落し、己が手に入るのは罰だ、併しこれも世間へ出せねえ文、己ア娘の書いた此の文も世間へ出せねえ文だから、此の二通とも一緒にして囲炉裏の中へ投焚べて反故にすべえじゃねえか、私に預けておくんさい、世間へ知れゝば家に疵が附いて、お互の恥だ」

と云われておかめは丹治父子と目と目を見合せ、おどろししながら、

かめ「お前さんが入つて口をきいて下さいましたから、これからは当人も謹みましようし、実にどうも捨て置かれませんか折檻しましたが、そんなら此の手紙はお前さんに預けますから、どうでも好い様にして下さいまし」

太「それは有難いこんだ、これ多助よ、去年の六月三十日汝え親父が死ぬ時に枕元に己を呼んで云うのに、おえいは多助と従弟同志なり、今の母様は多助のためには実の叔母だ、一家に血統が寄集り、此の家を相続するだから、鹽原の家に取つては此の位な芽出た事はあんめえから、多助がおえいと夫婦別れでもする様な事が有つたら、汝え後見人に

成つて、どうか鹽原の家に疵を付けねえように頼むと、死んだ父さまの遺言をば、此の文のように反故にされてはだめだぞ、馬鹿野郎め、汝様な意気地なしがあるかい、二十を越した男が母様に打たれるとは情ねいこんだ、己ア家へ来う、大えこと小言云わなければなんねえ」

多「重々、濟みましねえ事に成りました、どうぞ堪忍して下せえ、お母様宜く勘弁しておくんなすつて有難うがंस、直にお宅へ往つて御意見を受けます」

太「誠に皆様に御迷惑を掛けやした、左様なら」

と態と多助に荒々しくいいつゝ引立て、太左衛門は帰りました。跡に丹治はおかめと顔見合わして太息つき、

かめ「どうもねえおえい間拔じやないか、丹三さんへ送る手紙を無暗に守子などを頼む奴があるものか、いけねえよ、そうして爺に拾われ困った事をした、なんぼ年がいかないからといつて、さわくばかりして居るよ、気が利かないじゃアないか、多助が帰らないうち丹三さんをお寝かし申しな」

と氣を利かして二人を次の間へ遣る。丹三おえいは屏風の中に入って逢引を致します。跡はおかめと丹治と差向い、

かめ「あの爺はなんぞというかわい／＼云つて多助の鼻肩をするので私はしみ／＼多助が憎らしくなりました、旦那貴方どうか多助の畜生を殺して下さい」

丹治「殺して下さいと云つて、殺した後を何うする積りだ」

かめ「殺してさえ下されば、誰だか知れない、大方追剥でも殺したのだろうと云つて済ませます、当人さえ居なければ名主へ一寸話をして置きますから、時が経つたら丹三さん

は病身でお屋敷奉公は出来ないという所から、おえいの養子によこし下さい、そうすれば貴方は御城内に勤めていらしつても御隠居というので、表向にちよく／＼お出になるに都合が好いじやございませんか」

丹「うっかり村方で殺ると、百姓共に勘づかれるといかんから浮かとは出来んの」

かめ「此の五日には多助が元村へ小麦の俵を積んで往きますが、日暮方から遣りますから、山国の事ゆえ天氣の好いのは当にならなから、桐油を掛けて往きなど云つて、鹽原と大きく書いてあるのを掛けてやりますから、見違える氣遣いは有りません、多助が馬を引いて帰つて来る時、桐油を見当に庚申塚辺でむちやくちやに斬り殺して、お屋敷に帰り、知らん顔をしていて下されば、此方では試し斬りにでも逢つたとか何とか云つて極りが付いてから、丹三さんをよこして下さいれば、三百石持の主人、それに未だ些とは貯えもござ

います」

丹「跡^{あと}方^{かた}の知れるような事が有つてはならんよ」

かめ「大丈夫でございます」

と云われて、そんならばと庚申塚に身を潜め、多助の帰りを待受けて斬殺^{きりころ}す了簡になりましたが、誠に不届な奴でございます。其の日は丹治父子^{おやこ}が帰り、扱^{さて}五日になりますと、多助は何にも知らず馬を引いて諸方を歩いて、夕方帰つてまいりました。

かめ「アの御苦労だが、追々秋ぐちは用が多いから、直^{すぐ}に小麦を積んで往つて来ておくれ、また降るといけないから桐油を掛けていきな、あの新しい方がいゝよ」

と云われ、多助は「はい」と云いながら、曳慣れたあおという馬を曳いて御城下の元村へ参ります。道は三里あまりで、上下六里の道でございすから、何程^{いくら}急いでも只今の十時、其の頃の四ツ余程　りました頃で、五日^{よいづき}月^こは木の間に傾^まきほのぐらく、庚申塚までは三町ばかり手前の所まで参りますと、馬は自然に主人の危難を悟つたものか、足が進みませんで、段々跡の方へ退^{さが}りますゆえ、

多「青、困るべえじゃねえか、ヤイ青、荷^{みん}を皆^{おろ}な下^{おろ}してしまつて空身^{からみ}に成^{なつ}て、歩^{なつ}けねえ事はあんめえ、遅^{けえ}く帰^{かへ}ると母様^{かゝさま}に叱^{なぐ}られるから急いでくんろよ、そう後^{あと}へ退^{さが}つちやア困るべ

えじやねえか、青々どうした青」

と言いながら力を込めて手綱たづなを引きますけれど少しもきくません、引けば引くほど馬はだん／＼あとへ退さがるから、多助は涙ぐんで馬を引出そうと致しますが、中々動きません。すると後あとの方から荷を担いで来る人の足音に、只見とれば幸右衛門の倅圓次郎と云つて、今年廿五歳になり、多助とは極中好ごくなかよしの友達でございます。

圓「其処に居るのは誰だ」

多「圓次どんかえ、何なんにねえ己おらア元村まで往つた帰りだが、己おらア青が此処で急に動いじかなくなつて、打ぶつても叩たたいても後あといべえ退さがつて困るだ」

圓「そりや困つたナ、己おれ見てくれべえ」

と云いながら荷を卸し、馬の傍に寄り、

圓「これ青や、どうしたゞ、これ後あとへ退しやるか足でもどうか成つてるか、痛むきづ氣遣けえはねえが、多助の母様かゝさまは喧やかましい人だから早く往つてやれ、青どうした、汝塩梅われあんべいでも悪いか」

そんな事を云つても馬は何とも申しません。

圓「誠に困つたな、己おれ引いて呉れべえ、ハイ／＼／＼、歩くようになった」

多「誠に有難うがんす、己おれ手においねえから、何うしべえかと思つた、さ一緒に参めえりやす

べえ」

と往ゆきにかゝると、

多「あれ、又止つたよ、青どうした」

圓「今汝われえ歩いたじやねえか、どうしたゞ、動いごかねえか」

と圓次が引出し、

圓「はいくくくく、歩いて来た」

多「誠に有難ありがたえ、平常つねこんな事はねえ、どんな重い荷いい付けても悪い顔かほをする馬ではが

せん、アレ又止つた、青々」

圓「青々」

青の掛合でございます。

圓「何ういうものだが、己おれが引けば歩くだから、己おらア此の馬を引いて往ゆくべえ、汝われ此の荷を担いで呉れ」

多「ハア、そうして下せえ、そんなら此の荷は己おらが担いで往ゆきますべえ」

と担いで見ましたが、多助は肩に力がありませんから蹠よろめきながら担かぎ出す。圓次は馬を引きながら、シャンくくくくと庚申塚へ掛つて来る。此方こちらは先刻より原丹治が

刀の柄を握りつめ、裏と表の目釘を濡して今や遅しと待設けて居る所へ、通り掛りまするという、此の結局は何う相成りますか、この次までお預りに致しましょう。

七

譬えにも、禽獸といえど道有つて理なきにあらずという事がございまして、畜生が口をきく訳はございせんが、人間の云う事は分るまいと思ふと分りますと見えて、此の頃は何方様へ参りましても洋犬が居りまして、其の洋犬が御主人の使をいたし、或は賊を見て吠える所で見ますれば、他人と主人とは正と自然に其の區別を知つて居りますので、今多助が引慣れた青という名馬は南部の盛岡から出たもので、大原村の九兵衛方より角右衛門が買取つたのを、多助が十二歳の時より労わつて遣つて居りますから、庚申塚の前へ来ると馬は足が自然に前へ進みませんのは、丹治が待伏している事を知り、後の方へ退ります。圓次が引けば動き、多助が引けば動きませんゆえ、圓次は右の青を引出し、多助は御膳籠を担ぎ、急ぐ積りでございますが、馬は足早にポカ／＼駆出すように行つてしまひ、庚申塚へ掛つた時は最早圓次の姿は見えなくなりましたゆえ、余程後れた様子、多助

は重荷を担いで居ります故、七八町も後れましたから、畑中を突切れば道が近いと云うので、荷を担いで桑畑の間をセツセと参ります。此方こなたは圓次が今庚申塚へ通りかゝる。時は宝曆十一年八月五日、宵闇の薄暗く、木の間隠れに閃く刃やいばを引抜きて原丹治が待受まちうける所へ通りかゝる青馬に、大文字おおもじに鹽原と書きたる桐油を掛けて居りますゆえ、多助に相違ない心得、飛出しぎまプツツリと菅笠の上から糸いと経たてを着ている肩先へ斬込まれ、アツといいながら前へ俯のめる時、手綱が切れましたゆえ馬は驚きバラ／＼と花野原はなのばらを駆出し逃げて往ゆく。手負ておひはうんとばかりにのたりまわるを、丹治は足を踏み掛けて刀を取直し、喉のど元もとをプツリと刺し貫き、こじられて其の儘い氣息いきは絶えました。丹治は死骸きものの衣服で刀の血を拭い、鞆たづに納め、急ぎ其の場たちを立退き、多助の家の裏手から庭先へ忍び込みまして、雨戸そつをホト／＼と五つばかり叩くと、合図と見えておかめは丹治と心得、そわつきながら密そつと雨戸を明け、

かめ「スツパリ殺してお呉んなすつたかえ」

丹治「手筈は十分だった」

かめ「有難う、まア本当に万ひよつと一やりそこなやしないかと、どんなに心配したか知れませんが、彼奴あいつさえ殺してしまえば是からは自由ですから、今夜はお泊り遊ばせな」

丹「いや／＼泊る訳にはいかん、直ぐ城内へ帰つて当分は来ない」

かめ「初七日でも済んだら、とんだ事だったとか何とか云いながら顔出しをなさらないと人がけどりますから、七日でも済んだら来て下さいよ、氣を付けてお帰りなさいまし」

丹治は其の儘立歸る。左様な事とは少しも知らず、多助は荷をギシ／＼担いで圓次郎の家へ遣つて参り、

多「伯母さん明けておくんなさえよ、伯母さん」

婆「あい、誰だかえ」

多「多助でがんす」

婆「おやまあ、今明けやす、宵から締りを附けて置きやんすよ、さアお這入んなせえ」

多「誠に御無沙汰をしやした、月が替つてから大く寒くなりやした、なにねえ元村まで小麦い積んで往つた帰り、庚申塚まで来ると馬が退つて動かねえで困っている所へ、圓次郎が通り掛け、圓次郎が見兼て引いてくれたら青が歩くから、己馬を引いてやんべいから、汝荷担いで帰れと云つて、圓次郎は先へ帰りやしたよ」

婆「圓次は未だ帰りやせんが、寄り道でもして居るかも知んねえ」

多「己より余程先へ出た積りだよ」

婆「後あとから帰けえるかも知んねえから：まア茶いっぺい一いっぺい杯いっぺい呑いみなさんしよ、多助たすけさん、村むらの者ものが皆みんな噂うわさして居いりやすが、母かゝさま様さまが邪じやくん見けんで、お前まへのようやな温やさしげ順しんげな人ひとを打ぶち敲たたきして折し檻えんするとは情なさけない母かゝさん様さまだ、そんなでも怨うらみみもしねえで母かゝさま様さまを大だい事じにする、あんな温やさしげ順しんげな人ひとはねえと噂うわさをして居いりやんすよ、どうかマア軽かるはずみ躁そうの心こゝろを出ださなければ好えいと心しんべい配はいして居いりやんすから、身み体ていを大だい事じにして時とき節せつを待まちつがようがんすよ」

多「はい、有あ難なんうがんす、伯母おちやうさん己おちア母おふくろ親おふくろは我われ儘ままものでがんすが、私わしも亦また遠とほ慮りなしに抗たが弁べん事ことをしやすから、そんなで打ぶち敲たたかれやすのだから、強あながち母はは親おやばかり悪わるい訳わけではがんせん、私わしが届とどかねえから小こ言ごを云いわれるので、どうか心しんべい配はいしておくんなさるな」

婆「その心こゝろ根ねが別わかだよ、宜よろうがんす、はい、マア大だい事じに」

多「伯父おぢさんにも宜よろく云いつておくんなさえよ、左ひだり様さまなら」

と圓次郎えんじやうの家いえを出いまして、我わがや家やの門かどまで来きると、生垣なまきりの榎木えのきの所ところに青あおがによきりと立たつて居いりました故ゆゑ、

多「青あおどうした、汝われ独ひとりり此こゝ処ところに来て何なにだ、圓次えんじはどうした、家うちへ帰けえつたか」

と云いつても馬うまが挨あ拶だは致いたしませんが、家いえ来きのようやな心こゝろ持もつと見みえます。是こゝれから馬うまを引ひいて小こ屋やに繋つなぎ、自みづか分ぶんは台たい所ところ口くちの上かみ総そう戸どを明あけながら、

多「はい、只今帰りました」

という声におかめは驚き、幽霊かと思ひ、声慄わしながら、

かめ「どうしたんだえ」

多「誠に遅くなりました、どういう事か宅の青が庚申塚辺まで来ると後へ退つて、些とも動かねえで困っている所へ圓次が通り掛り、圓次が引くと青が歩くから、圓次の荷を私が担いで、荷は今圓次の家へ届けて帰つて来ると、青が表に立っていたから馬小屋へ引込んで、大きに遅くなりやした、御免なせえ」

かめ「そうかえ、道理で帰りが遅いと思つた」

と口には云えど腹の内、扱は丹治殿は多助と間違えて圓次郎を殺したに違ひない、忌々しい事をした。と思案に沈むは実に悪むべき奴でござります。幸右衛門の家では圓次郎が帰らぬというので家の騒ぎは一方ならず、すると或る人の知らせに、圓次郎な庚申塚の前になさけない死状をして居るといふので、急に検使を受け、泣く／＼村方の寺へ野辺の送りを済ませましたが、多助は如何にも氣の毒に思ひ、一緒に来れば宜かつたと幸右衛門夫婦に詫をする、夫婦は諦めの宜い人で、是も定まる約束すくだろうから心配しておくんなさるな。と事なく済みましたが、多助は小さい内から仲好の友達のこゝゆえ、間

さえあれば圓次の墓所へまいり、墓掃除をいたし、香花を毎日手向けてやって居りました。丁度十日目のことで、多助は墓参をして帰つてまいりますと、

かめ「多助何処へ往つたえ」

多「へえ、圓次の墓参りに参りやした」

かめ「そうか、墓参りでもしてやらなければ冥利が悪いから、度々してやんなよ、圓次も浮ばれやしないのサ」

多「誠に気の毒な事ですが、私も種々訳を話して幸右衛門どのの母様に謝りやしたら、なに皆な定まる事だ、因果と云うものがあるのだから心配しねえが宜いと云われるだけ、私は気の毒で堪りましねえ」

かめ「誰も居ないから話をするが、圓次郎はお前が殺して、荷を盗んで城下へでも売ろうと云う考えでやつたらうな」

多「へエ、フウ、どうも魂消やんしたなア、お母さん、他の事とは違いやす、私圓次を殺したと誰そんな事を云いやんした」

かめ「誰も云いやアしないが、天知る地知るの道理、皆な罰だ、お前のいう事が皆間違っているから、宜く考えて見な、此の間帰つた時何と云つた、馬を私が引けば動かず、圓次

郎が引けば動くいじと云つたじやないか、引き慣れた馬をお前まえが引けば動かなくなつて、圓次郎が引いて歩くと云うような間違つた話があるものか、大方お前が圓次を殺して、御膳籠に一杯ある荷を盗み、人知れず売つてしまつて、小遣にでも仕ようと云う了簡で遣つた所、露頭するのを恐れ、旨く拵え事をして圓次どんの所へ荷を返したんだらう、それを馬が動かないなんぞとずうくしい、お前のような怖い人はない、人には云えないが、しまいは親の寐首ねくびを搔き兼ないよ、今日という今日は実に呆れたから、只ただ今出て往つておくれ」多「モシどうぞ御免なさつてください、他の事ならどんな事を仰しやつても、お母つかさんの言う事は例え御無理が有りましても、お言葉に背くめえという願掛けでございしますが、圓次を殺したとは情ない、幼ちいさい時から一つ村で生立おいたつて、殊ことに仲の好ええ圓次を殺し、物を取つて城下へ売るなど何を証拠にしてそんな事を云いなさるか、お情ねえ、仮令たとえどんな事が有ろうとも神かけて覚えはござりやせん」

と泣声を振立て、言うに、おかめは、

かめ「とぼけなさんな、分家のお作とくつついて居るものだから、養子に行く約束のある圓次を邪魔にし、圓次さえなければ末永くお作と楽たのめるといふ了簡に違ちがひない、夫それほど程ほど氣きにいらぬおえいを女房に持たして置くのは氣の毒だから、只ただ今離縁状を置いて出て往ゆ

きな」

多「どうぞ御免なさい、此の家を出ては死んだ父様のお位牌に済みません、おえいの氣に入らなければ私を亭主と思わねえでも宜うがんす、又母様も子と思わず、奉公人だと思つて台所の隅へでも置いてくだされば有難うがんす、私は八歳の時から此の家に貰われて来て、死んだ父様の丹誠で大きくなりましたから、是から恩返しをしなければならぬ身体、今追出されては恩返しが出来やせんから、どうか堪忍しておくんなさい」

かめ「ならないよ、出来ませんよ、離縁状を書いて出て往きな、お前が出て往かれないければ私が出る」

多「あゝ申し、親を出して子が残っている訳にはめえりません、どうか御勘弁なすつて下さい」

と云つている傍から、

えい「今お母さんが云う通り、ねえ去年お父さんの遺言でお前さんと夫婦にはなりましたけれども、女房らしくしておくれでないから、それ程いやなものを無理にいてはお氣の毒でございます、お作さんも圓次さんが死んでしまえば自由氣儘だから、好いたお作さんと夫婦におなり、お前さんのような人は怖くつて厭だよ、お願だから離縁状を書いておくれ、

連添つてゐるのは厭でございます、直ぐ三行半を書いておくんなさい、黙つては分りませんよ、サ、早く書いておくんなさい」

と母子諸共まくし立て、言われ、流石に柔和の多助も余りの事ゆえ顔色を変え、居丈高になり、声荒らげ、

多「黙れおえい、お母さんは何を言つても己決して言葉返しをした事はないが、汝まで同じ様に圓次を殺したの、お作と訳があるのと覚えもねえ事を廉に取つて、離縁を取るべえとするか、お父さんの遺言を汝忘れたか、従弟同士で夫婦になれば家の治りもつくだから、苟めに私の遺恨を挿んで夫婦別れをするようなことがあると、草葉の蔭から勘当するぞと言わしつたことを忘れて、己を突き出すべいとして、夫婦らしくもねえと言うのは、そりやア己が方でいう言葉だ、汝の方で振付けて居るのじやないか」

かめ「大層亭主振つた利いた風な事を言うな、何の働が有つてそんな亭主振つたことをいう、本当に生意気だよ、高慢な事をいうな、親不孝め」

といいながら傍に有つた粗朶を取上げ、ピシリと打たれるはずみに多助は「アッ」といひさま囲炉裏の端へ倒れる処を、おかめは腕を延ばし、髻を取つて引ずり倒しながら、続け打に打擲を致している処へ、此の家の奉公人、忠義者の五八が見兼ねましたゆえ飛んで

来て中へ割つて入り、

五「お内儀さん呆れたものだ、謂れもないに何に仕やす」

かめ「多助の事というと出て来やがるよ、お前の知つた事じゃねえ、引込んでいな」

五「己今聞いて居れば何だとえ、多助さんが圓次を殺し、荷を取つて城下へ売ろうとしたとえ、多助さんは人を殺すような人か人でないか、あんたも大概分りそうなものだ、よしんば人を殺すような悪党でも、あんたのためには子じやアねえか、あんたの血筋の甥じゃねえか、サそれをお前さまの口からいうてえ事はねえこんだ、何処までも隠して陰になり陽になりして異見をしねえければならねえ処を、親が先へ立つて殺したんべい〜というのが本当に呆れた、多助さん、あんたが出れば此の家は潰れやすよ、私附いて居りやすうちはどんな事が有つても出しやせん、出るときゝませんよ、お内儀さん大概にしなせえ」かめ「多助の事と云うと目くじら立つて騒ぎやアがる、己の子を己が勘当するのは当

然だ、手前の世話にはならないぞ」

五「はい、私奉公人ですがんす、多助さんは此家な相続人だよ、お前様より多助さんの方が先へ此家へ貰われて来たは、十四年あとの八月で、お前さまは其の年の九月に来て、其の翌年先の内儀さんが死んだから、お前様を後添にしべえと、分家の旦那様と私が勧め

たけれども、旦那様は堅えから、余り歳が違うから村の者へ外聞が悪いというのを、多助さんには叔母さんの事だから、女房に持ったが宜かんべえと、其の縁合で此家へお前様を入れた時何と云わしった、有難いこんだ、果報やけがすると云つたじゃねえか」

かめ「何を云やアがる、手前の厄介になるものか、利いた風なことを云うな」

五「利いた風もないものだ」

と声高に言い罵るから多助が、

多「五八は酪酩^{よっぱら}って居りやして、強情べえ申しやすが、皆な私が悪いでがんすから、どうぞ堪忍しておくんなさい、五八マア此方へ出なよ」

五「どんな事が有つたつても多助さんは出されません」

かめ「手前から先へ出て往け」

五「私奉公人に違いないが、先の旦那様に抱えられたゞ、己出れば此の家は打潰れるから出ません」

と言い罵るを、多助は無理に五八を引出し、傍の座敷に連れ来り、

多「あんなに母様に抗弁し言をしては宜くねえわな」

五「でも貴方口惜くつてなりやせん、胸が一ぺえになりやすという訳は、あんたの事を世

間で泣き多助たすけくと云うから、どういふ事だと思つて人に様子を聞いて見れば、母様かみさんが悪い顔かほべえしていて、堪こらえ兼るから外へ出ては貴方あなたが泣きながら歩くといふ訳だ、三百石の田地持かみさんの旦那様かみさんが母様かみさんの機嫌きげんが悪く家うちに居られないから、馬を曳ひいて外へ出ると、あなたの内儀うちぎのおいどんまでが一緒いっしょになつて貴方あなたを突出とつすべえとするは、情ねえこんだから、私わし云うだけの事は云いやんす、貴方あなたが出れば原丹治親子はらにぢが乗込むに違ちがえねえが、屋敷者やしきものだから百姓業ひやくしやうぎは出来やすめえ、そうすれば此の鹽原の家しほのらは打ぶ潰つぶれるに相違ちがねえから、多助さん辛つれかんべえが辛抱しんぱうして此の家やを出ては成りやせんよ、私も共ともに貴方あなたと一緒になつて、どんな辛つれえ事ことをしても家うちの爲ために働はたらきやすから、我慢がまんして居ておくんなさいよ、家大事うちでえじでがんすよ」

多「あいよく、五八や宜うちく家の爲ためを思しんべて心しん配べしてくれる、原丹治親子はらにぢの事も知らない訳ではないが、言い立てをすれば血ちで血ちを洗せんうようなもの、世間よこへ対たいして家うちの恥ちになる事ことだから、今いままでは何なににも言いわず辛抱しんぱうして堪こらえに堪こらえて居ゐたけれども、実に辛つれくて堪こらえ切きれない事ことが度たび々々あるよ、察さつして呉くれれや」

五「御尤ごもでがんすよ、私わしも命いのちがけで貴方あなたと一緒にいっしょになり働はたらきやすから、どうぞ詰つまらない心こころを出だして下くださんなよ」

と眞実ほんとうの心から五八が慰め居りますと、馬小屋で青という馬がヒン／＼と嘶ないて、バタ／＼と荒れる事一方ひとかたならぬ物音に、五八は慌て、駈出して往つて見るに、繋いである馬がバタ／＼騒いで居りますから、五八が馬の口を取り鎮めておる所へ這入つて来ましたは原丹治でございます。これは丹治が圓次を殺した時の顔を馬が見覚えて居たものと見え、怖がつてバタ／＼暴れたので、丹治も訝おかしく思いながら奥へ這入り、おかめと差向いで何か密々ひそ／＼話を致して居ります。多助は馬の驚いたのに心付き、ハ、ア先達せんだつて庚申塚で圓次を殺したのは、丹治が私わしと間違えたものに相違ない、これは此処うちの家うちにいる時は殺されるかも知れない、若し命がなければ何んなに思つても此の家うちの爲になる事も出来ない、八歳やっつの時から住み馴れた村方を立退くのは辛い事ではあるなれども、一先ひとまずず此処を逃げ去つて、知らぬ江戸とやらへ参つて、どんな辛い奉公でもして金を貯めた上立帰り、一旦潰れたる鹽原の家いえを起さなければ養父角右衛門様に義理が立たん、余所よそながら五八や叔父太左衛門様へお暇乞いとまごをしようと思つて、これから沼田の下新田を立出たちいでるといふお話に相成ります。

追々お話が^{なか}央ばに相成りますから、これからが面白く成りますが、兎角開けぬ其の昔のお物語は嘘のようなお話が多いというのは、物^{もの}成^{なり}が極^{ごく}お安く、唯今では物価^{たかね}が高直で、昔のお値段の事を唯今申すと嘘らしいような事があります。近頃まで湯銭が八銅、髪結銭が廿八銅、寄席のお座料が四十八銅から五十銅でございましたが、当節では四銭と相成りましたから、お高いと心得て居りますと、中には又御鼻^{びな}頂^うのお方が仰しやいますに、圓朝や寄席の座料が如何にも安い、それでは国の恥になるから最う少し高くしたら宜かろう、西洋へでも参ると、丁度我国の大道講釈のようなもので座料の一円や二円は取るから、斯^こうやって楽屋の者が大勢出て、畳の敷いてある上へお客を坐らせて、僅か四銭ぐらいでは余り芸^{つたな}が拙^{つたな}いようだから、せめて一人^{ひとり}前^{まえ}五^ご円^{えん}宛^{づつ}も取^とつたら宜かろうと仰しやいます、それでは誰も寄席へお^{いで}出^{いで}になる方がございませぬ、仕方がないから四銭という事に致して置きます。昔は蒲^{かまぼこ}鉾^{ぼこ}が一本四十文であつたと申します。お値段のお安い話ばかり致しますようでございますが、下駄の鼻緒なども昔は二足で三文でございました、それからこちらへ厄^{やく}難^{なん}のものを二足三文と申す事だそうです。馬も昔は南部の極^た長^たけた所で五両ぐらいのもの、それが只今は馬^{うま}流^{りゅう}行^{ぎょう}で、皆さんが乗^{のり}つてお歩きになります、時々横^{よこ}つ倒^{たふ}しに

乗つていらつしやるお方がありまして、危い事で、当今の馬は何れも二三百円も致しますから大きに模様が違つて居ります事でございます。鹽原多助の養父角右衛門の買いました馬は、南部の盛岡の市で五兩五粒で買った良い馬でございます。多助は日々その青という馬を引いて山坂を歩いて居りましたが、田舎では月待日待という事がありましたして、十五夜廿三夜などには村の若い者が皆遊びます。多助も廿一歳の若者ですから、随分遊びたい盛りでございますが、人の遊ぶ中を重い荷をつけて馬を引いて、数坂峠という山又山を歩いて居りますも、家に居れば母親おかめに虐められまして、実に生傷の絶える事がなくらいの訳ですから家にとては居りませんで、馬を引いて歩きながらも種々思合わして見たが、どうも此の家に長くいる訳にはいかな。情ないかな母とおえいが馴合つて、丹治父子を引入れて逢引するとは、実に犬畜生同様の致方、殊に私を附け狙うから丹治父子が此の家へ出入る中は逆も居る訳にはいかな、命があれば死んだ養父に恩返しも出来るが、命がなくては恩返しも出来ないから、江戸とやらいう所は、どういふ所か勝手は知らないが、一先ず江戸へ出て辛い奉公なりとして、金を貯めた上で国に歸つて来て、若し家が潰れていたら立て直すより外に仕方がない、八歳の時から居慣れた沼田新田の村の模様も、これが見納めになる事かと、心の中で嘆きながら、豆を二俵附け、青を引

いて分家の太左衛門の所へ余所ながら暇乞いに参りました。

多「もし、叔父さんく〜」

太「おう、多助か、何処え往くんだ」

多「はい、高平まで豆を附けて参りやす」

太「お、高平へ往くか、久しく来ねえから案じていたが、此間五八が来て家に間違えの

あつた事も聞いていたが、汝の母親のような悪人はねえ、宜く勘弁して堪えているな」

多「はい、それもこれも死んだ父様に恩返しがしてえと思つて居るんで、父様のお位

牌へ対し、鹽原の名前を汚すめえと思つて居りやんす、八歳の時から貰われて来て育てら

れた恩は一通りでねえ、死んだ父様計りでねえ、叔父様も私が小さい時から多助々と云

つて可愛がつておくんなんした御恩は死んでも忘れやせんてハア」

太「べらぼうな、叔父甥と繋がる縁だ、世話アするのは当然だ、汝は切るにも切れね

え血統だから、辛い事があつても辛抱して居てくんろよ、もしや若い者だから又狭い心を

出して遠い所へでも失走してしまやアしねえかと思つて、心配でなんねえ、己も取る年

なり、婆アさんも年を取つてゐるし、子と云うものはお作べいで、あんな厄難な者だから

汝を力に思つて居るんだから、汝え詰らねえ心を出してくるなよ」

多「はいく、叔父さん人間は老少不定ということがあるから、若い者でも先へ逝かねえと堅い事も言われねえ、私が高平まで往く途で、どんな事があつて、ひよつと歸らねえようになり、これが叔父さんの顔の見納めになりはしめえかと思えば、一里でも二里でも踏み出すのは実に辛え事でがんす」

太「馬鹿ア云うな、今日は月待だから、己が家へ泊つて、高平へ往くのは明日にしろよ」
多「又往かねえと母親に叱られますから参りやすべえ、叔父さん、これから段々寒くなりやすから、身体を大切にしておくなんしよ」

太「そんな事を言つちやア心細くなつて仕様がねえ、婆や、多助が高平まで往くつて寄つたから、此処え来うよ」

と云うに、婆アも出て参りました、

婆「おゝ多助か、能く来たな、此の寒いのに往かねえでもいゝから泊つて行きなよ、此間はお作が悪戯アして気の毒な事をした、家なア阿魔を小言いつて打擲えたが、仕様のねえ奴で、堪忍してくんなよ」

多「はいく、往きますべえ、叔父さん、叔父さん、左様だら」

太「それだら何うでも往くか」

多「はい」

と云いながら出ましたが、これが別れになる事かと悄悄しおく々々として往ゆきます。叔父も多助の言う事が心に掛りますから戸口まで駆出して来まして、

太「多助々々早く往つてこうよ」

と云われて多助も泣きながら、

多「はい〜」

と言つて出掛けましたが、叔父の事も心にかゝりますから、心配しながら鎮守の森も、これが見納めか、清右衛門どんの家の棟やもこれが見納めになる事かと思返りながら、泣く／＼馬を引いて高平までまいり、錢を二分と一貫受取り、沼田原まで来ると、此の原中に物見の松という松の木があります、是は戦争いくさの時に物見をした松だと申す事でございます。やがて多助は其の松の根方へ馬を繋かぎ、吠かを卸かして秣まぐさを宛あてがってどっさり喰くわせ、虫の食くわれないように糸経いとだてを懸かけまして、二分と一貫の錢を持って居りますゆえ、大概のものなら駟かけおち落おちをするのだから路銀ろぎんに持つて行ゆきますが、多助は正直者ゆえ其の錢を馬の荷鞍にぐらへ結び付けまして、自分は懐なごりにあるほまちの六百の錢を持つて行ゆきにかゝりましたが、日頃自分の引馴なれている馬に名残なごりを惜おしみ、馬の前面まえづらを二度ばかり撫なでて、

多「これ青よ、汝とは長い馴染であつたな、汝は大原村の九兵衛どんが南部の盛岡の市から買つて来たのを、己の父様に買われて来たんで、其の時己も八歳であつたが、鹽原の家へ養子に来る所で、汝も己も一緒に来るんで、己は汝が背中へ乗つて此の沼田へ来て長い馴染、己が十二の時から引なれて、斯うやつて長い間一つ所に居れば畜生でも兄弟も同じ事、汝ア達者な馬で、今まで内爛一つ起して噓一つした事のねえ馬だ、それに十六貫目の四斗俵を二俵附けるなら当前だが、ハア三俵となると汝え疲れべいと思つて、山坂を越える時は己が一俵担いでやるようにするから、身体も今まで頑丈であつて、足い血溜り一つ出来た事はねえ、それに父様が丹誠して、年に三度ずつ金焼きに遣つて置いたから、足も丈夫だ、己が草を刈つて来て喰わせる時も毒な草が入つて居ちやアいけねえからと思つて、茅草ばかり拾つて喰わせるようにしたから、汝も大い坂を越るにも艱え顔を一つした事はねえで、家へ対して能く勤めたから、段々年を取るから楽をさせてやるべえと思つていたが、己アどうあつても彼の家には居られねえ、汝知つてる通り家の母様と噂アが了簡違えな奴で、己を殺すべえとするだ、汝え知つてべえ、此間も庚申塚で己を殺すべえと思つて、間違えて圓次郎を殺した時は、汝も駆出したくらいだから、己が居べえと思つても殺されるから何うも居られねえわい、己はこれから江戸へ往つて、奉公をして金を

貯めて歸けえつて来るから、汝われえそれまで達者で居てくんろよ、ヤア、己おれが出れば定めて五八も追ん出されべえが、五八が出れば誰も汝われに構う者がねえから、汝われにろくな食い物もあてがうめえ、汝われえ可哀そうでなんねえから己おれも出めいと思うが、己おれが家に居れば殺されてしまふによつて出て往ゆくんだから、何卒どうぞ汝われは辛つれえ所も辛抱して居て、己おれが江戸で金を貯めて歸けえつて来るまで丈夫でいてくんろよ、ヤア、ヤア、青、青」

と誠に我が兄弟か奉公人に物をいう如くに言い聞かせながら、馬の前まえ面を撫なでで摩さすりまして、多助は堪り兼て袖を絞しぼつて、おい／＼泣きますと、多助の実意が馬に感じましたか、馬も名残を惜む様子で、首を垂れてさも悲しげに泣出しまして、其なみだの涙が雨の如くはら／＼と砂原へ落ちまするのを見て、多助は尚更悲しく、

多「お、青、汝われ泣いて呉れるか、有がてえ、畜生でさえも恩誼おんぎを知り名残を惜むで泣いてくれるに、それに引換え女房おえいは禽獸とりけものにも劣つた奴、現在亭主の己おれを殺すべえとする人非人め、これ青、己おれが出れば原の父子が家へ乗込むで来るに違えねえ、そうすれば鹽原いへの家は潰れるに違えねえから、汝われ辛かんべえが何卒どうぞ己おれの歸けえるまで家に辛抱して居て呉んろよ、よう、よう」

といいながら行ゆきにかゝりますと、馬が多助の穿はいている草鞋の切れ目を踏ふみ、多助の

袖を嚙くわえて遣るまいとするから、

多「あはまだ留めるか、己おれも別れたくはねえが、居たくつても居られねえから其処はなを離して呉んろよ、よう、よう」

と惜しき別れを無理に振切つて別れまして、多助は泣きながらトツ／＼と御城下まで一目散に三里ばかり駈けて参りまして、これからは山越しをするのですが、何を云うにも路用は僅たつた六百文、此処らは只今のようたつに開けませんで、白井八崎しらいはつさきの難所を越え、漸くのこつとで岩上いわがみという処へかゝりますと、白りつと夜が明けて来ました。此処には利根川の支え流だがわがあり、其の河辺かわべりに松の木が五六本生えて居りまして、用水が流れて居り。只今では掛茶屋が出来て、此の用水が梶原の御用水に成つて居りますが、其の頃は極げつ淋しく、水は岩間に当つてドウドツと流れます。松の木の側に青面金剛せいめんこんごうという石が建つて居ります所に、兩人連れの者がし合羽を着て、脚半草鞋に旅荷を側へ置いて摺すり火びで頻りに煙草を喫のんで居りますのを、多助が見掛けまして、

多「少々物が承りとうございやす」

男「何だ／＼」

多「え、前橋めえはしという所へはどう出たら宜うがंस、前橋めえはしへ参まいりますには何う参めえつて

宜しゆうございやしよう」

男「前橋へ往くなア此処を構わずうツと真直ぐ往つて、突當つて左へ曲つて又突當ると、向うに橋が見える、それを渡れば直きだ」

多「はい、有難うござえます、お先へ参りやす」

と礼を云つて往きにかゝりますと、

男「これ／＼待て、手前は沼田の下新田の多助だなア」

多「ハア何方でがんですか」

と云いますと彼の男は、

男「多助久し振りで逢つたなア」

と云いながら被つて居た笠を取つたが、多助は心付かず、只見ますと昨年鹽原の家へ強談に來た道連の小平に、今一人は繼立の仁助という旅稼ぎの悪者二人ですから、多助は悔りしますと、

小「好い所で逢つた」

多「御免なすつて下せい」

小「去年手前の所へごたつきに往つて失錯つたので、お母も口惜しがって居るから、手前

がおえいと墓参りに往つた帰り道でおえいを攫おうと思つたら、侍が邪魔に入つて到頭それも遣り損つて口惜しくつて堪らねえ、さア手前は前橋へ買物に往くのなら、三百石の田地持の大尽だから些たア金も持つてるだろう、身ぐるみ脱いで置いて往け」

多「はい、買物に往くんじやがんしねえ、おえいも心得違えをしやんして、私も家に居られねえで、母親に追出され、六百の錢を路銀にして江戸へ往つて奉公する身の上でがんすから、衣物も一枚でも取られちやア困りやすから、御勘弁なすつて下せえまし」

小「嘘をつけえ、三百石の田地持が六百ばかりの端錢で江戸へ行こう筈はねえ、さアぐずぐずすると打ツ斬るぞ、仁助縛つちまえ」

仁「兄いがあゝ言い出しちやア肯かねえから、早く裸体になつて置いて行きな、出さねえでじたばたすると殺してしまふぞ、泣顔するねえ」

と云いながら閃りツと長いのを引こ抜いて、ずぶりツと草原へ突立てますと、

多「どうかお願えでがんすから命だけは助けて下さい、殺されてしまつちやア私義理ある家へ恩返しをする事が出来やせん、私はこれから江戸へ出て辛抱して、国へ歸つて鹽原の家へ恩返しをしなければ死んだ父様に対して済みましねえから御勘弁なすつて下せえまし」

と泣きながら掌を合せて拝みますと、

小「やい縁起が悪いや、神か仏じやアあるめえし拝みやがんな」

と云いながら草鞋穿の足を挙げて、多助が両掌を合せて拜んでいる手と胸の間へ足を
入れて、ドウンと蹴倒しまして、顛覆る所を土足で踏かけ、一方の手に抜刀を持って、

小「出さなければ殺すぞ」

と云うので、多助は実に危い場合に相成りましたが、何と斯る善人が家では母親や女房
に附け狙われますのを、漸く遁れてまいる道で、又悪者のために捕まって斯る危い目に逢
いまするのは、神も仏もないものか、実に不憫至極な訳でございます。これより多助の身
の上如何相成りますか、次回までお預りに致しましょう。

九

引続きまする人情噺しは兎角お退屈勝ちの事でございまして、草双紙でも芝居でも善人
あり悪人あり、善人が悪人のために困苦をいたし、後に善人榮えて悪人亡び、失いました
宝が出て可愛い同志が夫婦に成るといふ是れがどの跋でも同じようでございます。善悪二

つあるかと云うと一つだと仰しやいます方がありますが、其の一つは何だと云うと無形のもので、とんと形がない、善の魂が悪くなるのは何ういう訳だと伺つて見ますと、或るお物識ものしりのお講釈に、先ず早く云えば月に雲の掛るようなもので、これなどは圓朝にも解りますから、成程と云うて感じまして聞きました、唯人たゞが何も思わずに居ります時の心は冴えたる月のようなもので、誠に清らかで晴せい々くとしている所、煩惱の雲が掛り、心の月を曇らせますと申すは、向うでヒラ〜と青い札さつを勘定して居ると、あゝ大層札はしを持つて居るなと思えば、慾張つた雲が出て来て、心の月にかゝりますと暗くなります、アゝ欲しいものだと思ふばかりならいゝが、何うかして彼奴あいつを殺して奪とりたいと思えばボツリ〜と雨が降つて来て真闇まっくらになり、又気が附いてあゝ悪い事をした、斯様こんな事はふつりと思ふまいと思えば煩惱の雲がすうツと切れますると、光々こうくとした月になります。又向うに駒下駄の音がして赤縮緬あかちりめんの褌ふんどしが見えると、助平の雲が出て来る、彼れあは何者だろう、お嬢様か娘か、彼れあを口説いて見ようか、口説いても肯きかないといけないから、何処か淋しい所で押顛おっころがしてやろうかと思えば夕立ちで、ガラ〜〜と雷になる。あゝ悪い事をした、止ましようと思ふが付けば元のような良い月夜になる、又向むこうの鰻屋でバタ〜と鰻を焼く音がすると、あゝ彼れあを食いたいたいものだと思ふと、意地きたなの穢きたない雲が出て来る、それ

を気が付けば元のようになるが、其の雲の掛らんようにするには智慧という風でなければなりません、雲がかゝつて来た時、ドッコイと智慧という風で吹散らしてしまふようになければいけません「浮雲を払い出でたる秋風を松に残して月を見るかな」という歌があります、これは左様なる事に詠んだ歌ではない、月の事に就いて詠みました歌でございませぬ、雲を風で吹払つた跡は、松が枝に渡る風の声のみで、光々明明々々として月を見てゐる心になれば、年中間違ひはなきものゆえ、悟れば善になり迷えば悪になるもので、迷えば可愛い子を棄て、夫を棄てるように相成りますと申すは、前申上げました通り、おかめの心得違こころえちがひというものは恋という煩惱の雲がかゝり、心の闇に迷ひまして一通りの間違ちがひではない、原丹治と密通をいたし、現在の娘を唆そゝかして己の密夫おのれみつぶの悴丹三郎と密通させ、そのみならず孝子多助を殺そうとする罪は実に悪むべきものでござります。多助も家に居れば命あぶなが危い、命があれば又鹽原の家いえを立て直す時もあるうと思ひ、住馴れた家いえを立出だしだでました。家うちでは多助が翌日になつても歸つて来ないから、おかめの了簡りょうかんでは、彼奴あいつは江戸へでも往つたか遠い所へでも往つたか、大方家うちの辛い所を思つて、首でも縊くつてしまつたのであろうと、多助の死ぬのを待つて居りますと、奉公人の忠義な五八は多助が歸つて来ませんから心配して捜して来ましたが居りませぬ。すると沼田原の松の木に青という馬

が繋いであると言きましたから、五八は直すくに行つて見ましたが、ハテ解らんと思ふのは、馬の荷鞍に二分と一貫の錢と馬通いの帳面があるから變に思い、多助が他国へでも行くならば此の錢を持つて行く筈だが、これへ縛り付けて行くからは、身でも投げたか、但しは雑木山へでも入つて首でも縊くつて死んだかと思つて、山川を捜したが判りませんので、おめは心の中で嬉しいが、外面うわべでは五八に言付けて、何処へ往つたか捜して御覽と案じる振で捜させても分りませんので、おめも内々安心して居りました。すると九月三日に五八が他所よそから歸つて来まして台所の事をして居ると、

かめ「あの五八や、こゝへ来なよ」

五「お内儀かみさん、なんでがんす」

かめ「此処へ来な、アノ其処に膳があるから、それを拭いて置いてくんな、今日は家うちにお客があるから、そうして水を汲んだり何かしておくれ」

五「何処からお客が来やんすな」

かめ「何処からお客が来るつて、お前の知つての通り多助は此の家の主人だのに、家出をして行方も知れず、おえいと兩人ふたりで此の身代を持つて居いられないから、どんな者でもお婿を貰おうと思つて居ると、お前の知つて居る御城内の原さんの御子息丹三郎さんは病身で

お屋敷の御奉公は出来ないから、百姓か町人の家へ養子に遣りたいと云うので、名主からの口入れて相談も整い、今日は婚礼をするので、原さんと名主幸左衛門さんとが来るんだよ、お侍様が百姓の家へ養子に来るのだから勝手が知れめえから、お前も気を付けて上げな、あの方が此の家へおいでになるとお前も仕合だよ」

五「へい何ですか、おえいさんの処え婿が来やすか、こりやア変だなア、おえいさんには多助さんと云う亭主のある身で、又亭主を貰うと云うか、そんなら女というものは亭主を兩人持つてもいゝかね」

かめ「何を云うのだ、多助の行方が知れぬから、おえいに婿を貰うんだよ」

五「多助さんの行方が知れねえと云うて、多助さんは先月出たべいで、死んだか生きて居るか分らねえのに、おえいさんに婿を取るとは余り義理を知らねえじゃねいか、仮令人が婿を世話アしても、一周忌でも済んだら貰うべえと云うて断るのが本当だに、四十九日も経たねえのに家へ婿を取るとはひでえじゃがんせんか、多助さんも此の家を出たくはねえが、居られねえから出たんだから、又了簡を取直して帰って来るかも知れねえのに、婿を取って済みやすかえ」

かめ「彼アいうことを云ってるよ、彼が帰って来ても構わないよ、親を棄てゝ出るような

奴だから最う構いません、私は娘に婿を取らして樂をしようという訳ではないが、多助が居なければ婿をもらうのは当然だアねあたりまえ」

五「駄目でがんす、婚礼はなりやしねえ、よく考えて見なせい」

かめ「お前が何も知っている訳はねえよ」

五「それでも多助さんが死んだか生きてるか知れねえのに、婿を取るといふのは情ねえこんだ、これ、多助さんは三百石持の旦那様だのに、家うちにいれば小言べえ云われるので、外へ出て泣々歩くから村の者べえじやアねえ他村たむらの者にまで、泣き多助と名を附けられるのもお前めえさまが宜くねえからだ、多助さんは現在あなたの甥じやアねえか、それをいびり出して婿を取るといふ法がありやすかえ、私わしい何うしても取らせねえ」

かめ「彼あアいう事を云やアがる、主人が勝手にするんだ、黙っている、ぐずぐずいうなら出て行きな」

えい「奉公人の癖にお母つかさんに逆らうなら出て行きな」

五「出ねえや、出ませんよ、私わしア先の旦那様に長く御奉公をして、西も東も分らねえものが旦那様の丹誠で、今では馬通いもつけられるように成った恩があるから出られねえ、多助さんが居なければ此の家うちは猶なお危ねえよ、マア貴方あんた考えて見なせえ、御城内の者が百姓

の家へ養子に来て、何月の幾日に何の種を蒔けば、何月の幾日に芽をふくという事を知りアしねえ、其様な者を婿に取れば此な家は潰れるから駄目だ」

かめ「主人の云うのだから出て往けつたら出て往け」

五「駄目だ、己れ往つて相談して来る所がある」

といい捨て、分家の太左衛門の所へ往きました。

五「旦那様内か」

太「おゝ五八か、此方え入れ」

五「旦那様は己ア家の何に当るか」

太「馬鹿野郎め、何年奉公をしている、その位の事が知れねえという法があるものか、死んだ角右衛門殿の甥といえ己独りしかねえ」

五「それじゃ己ア家の分家だ」

太「そうよ」

五「其の分家が己ア家へ婿の来るのを知んねえで居るかえ」

太「フウン、誰へ婿が来るのだ」

五「それだから駄目だ、多助さんが出たから宜い気になって、おえいさんに婿を取ると云

うのだが、何と呆れ切つて物が云えねえ、彼の仏のような多助さんを追出して、悪い事をしていた丹三郎を婿にと云うので、我へ膳をふけというから、誰え来ると聞いたら婿が来ると言やアがるし、其の相手は城内の原丹治の悴が婿に来るというから、私い魂消た、あんた蒲団の上にぶつ坐つてゐる時じやアあんめえ、往つて掛合つておくんなせえ」

太「何とまア太い阿魔じやアねいか、何時婿が来ると」

五「今夜来やんす」

太「掛合つてやるべえとも」

五「往つて下せえ、なんとマア名主が媒人だつて、名主まで馴合つていやアがるんだもの」

太「これ婆ア、脇差を出せ」

婆「よすが宜いよ、又五八がそんな事を言わなければ宜いのに、相手は侍で名主が媒人だというから、間違えが出来るといけねえから往かねえが宜うがんすよ」

太「黙つていろ、羽織を出せ」

というので、襟巾が三寸五分ある小紋の白ばつくれたような羽織を着ましたが、前から見ると帯広裸体で居るような姿をして、五八と一緒に憤り切つて出掛けて往きます。此方

は今内祝言ないしゅうげんの盃を取ろうとする所へ太左衛門が物をも言わずに上つて来て、祝言の座敷へドツサリと坐つて、これから談判を致しますというお話になります。鳥渡ちよつと一息つきまして。

鹽原多助は実に孝行でございますが、人には幸不幸というものがあり、又始めの内に極結構な身の上で老年に至りて艱難するものもあり、始めに艱難辛苦をして後に安楽な身の上となるものがありますが、是は仏説で言う因縁でございまして、こればかりは何ういう事か解りません、間が好いと好い事ばかりで、間が悪いと悪い事ばかりあるもので、運のいゝ方は顛ころんだかと思えば札さつを拾い、川へ落ちてガバ／＼していると金側きんがわ時計を拾うような事があり、又間が悪いと途中で手水ちようすが出たくなつて、あゝ何所どこかに手水場があれば好いと思うと、幸い三足立せつだいの雪隠せついんがあるから入ろうとすると、皆みんなな咳払いをして塞がって居たり、横浜へ往いくのに汽車に乗ろうと思つて大急ぎで人力車で停車場へ駆付けると、汽車がパイと出て往つてしまつたり、天氣が好いと思つて合羽を脱いで外へ出れば雨が降つて来たり、芸者を買えばブツ／＼と憤おこつてばかりいたり、総すべて十分にいかんものがございます。多助のような好い人は神も仏も附添ついでつて居るかと思つと、前回に申上げたような難渋な目に遭い、自分が曳馴れた馬に別れを告げて漸く岩上村へ掛りますと、胡麻の灰道

連の小平と仁助に会つて土足に掛けられ、抜刀ぬきみを突付けて、さア金を出さなければ殺すぞと云うので、多助は青くなり、掌てを合せ「何卒免どうぞゆるしておくんなさい、裸体はだかにでも何にでもなるから」と云うのを耳にもかけず、

小平「仁助、剥いでしまえ」

と云うので多助の着物を剥ぎますと、着て居るのはぼうた布子で、バツタリと落ちたのは六百文。

仁「兄いほんとに六百しかねえぜ」

小「手前てめえほんとに六百しかねえのか、縁起わりが悪いや、夜が明けてしまふ、起ろおきく」

と云われ、多助は裸体はだかで小平を掴みますと、

小「縁起わるが悪い奴だ」

と云いながら、今多助が起き上ろうとする処を土足で胸を蹴けたから後うしろへ逆さま、利根の枝川の流れへドブウンと落ちまして、多助は流されましたが、川が浅いから漸くの事で這上つて来ますと、兩人ふたりの者は居りません。着物はなし六百文の銭は差さしが切れ、彼処あちらこちら此処へ散乱致して居りますのを拾い集めて漸く四百幾文いくら、五百に足りない銭を、これでも命の綱と思ひ、ずぶ濡れになつて前橋の手前まで来ると、少し日があたって来ました。朝日のさ

すのに裸体はだかでも歩けないから、宿しゆくの取付とりつきに古着屋ふるぎやがありますから、百五十文出して襦袢じゆばんを一枚買つて、帯がないから繩なはを締め、あまる錢きせんで木錢宿きせんやどへ泊り、四日路よっかじかゝつて漸く江戸表へ着きました、其の頃は只今と違つて路みちが難渋なんじゆでございまして、殊ことに多助は江戸の勝手を知りません、何処と云つて頼る所がないが、江戸という所は桂庵けいあんと云うものがあつて、奉公人の世話をするそうだが、それには受人うけにんがなければいけまいと思ひ、ふと考え付いたのは、十四年前に別れた実父鹽原角右衛門様は、阿部伊豫守様の御家来であつたのが、浪人して後戸田様の家来になつて居るとの事ゆえ、尋ねて往つて頼んだら、受人うけにんぐらいにはなつて呉れるだろう、実のお母様かゝさまやお父様とつさまはお達者でお出でなさるか、下新田へ養子に往つてから便りもしないが、何うなすつたか逢いたい事と思つて、筋違橋すじかいばしの戸田様の前へ来て、通用門へ掛ればいゝに、知りませんから表門へかゝり、お役人の居る所へズタ／＼の姿なりをしてまいりまして、

多「はい、御免なせえ」

役「何処へ参まゐるのだ、物貰いなら彼方あちらへ行ゆけ彼方あちらへ行ゆけ」

多「はい、少々物が承うわりとうございます」

役「物が聞ききたければお辻へ往ゆけ、何だ乞食こじきみたよなりうな姿なりをして」

多「これから乞食になればなるんだが、未だ乞食にはなんねえ、アノ戸田様のお屋敷は此処でがんすかえ」

役「戸田様の屋敷は此方だ」

多「それでは十四年前に此方へ抱えられた、鹽原角右衛門という方がありやんすか」

役「なに鹽原、ハイ彼は十三年前にお国詰になって此のお屋敷には居らん」

多「お国は野州の宇都宮でがんすか」

役「前は宇都宮であつたが、松平主殿頭殿とお国換えになつて、今では肥前の島原

だ」

多「へえ、肥前の島原という所は遠うがんすか」

役「そうサ、島原までは三百一里半あるな」

と云われて多助は恟り致し、ハアと云いながら思わず知らず此処へ泣き倒れました。

役「これく彼方へ参れ、彼方へ参れ」

多「はいく、腹ア減らして遣い残しが二十八文、宇都宮なら食わずにでも往くが、三百

里あつちやア仕様がねえ」

役「ぐずく云うな、彼方へ行け」

多「はい、参りやす」

と言いなながら出掛けましたが、頼みの綱も切れ果て、これから先きは飢えて死ぬより外に仕様がないと覚悟を極め、何うか知れないように淵川へでも身を投げて死のうと思つて、日の暮れるまで彼方此方とうろく歩いて、駿河台の織田姫稲荷の所へ参りますと、最う腹が減つて歩けません、其の内に雨がポツリくと降つてまいりますから、駿河台を下りて昌平橋へ掛りました。此の昌平橋は只今は御成道の通りに架つて居りますが、其の頃は万世橋の西に在りましたので、多助は山出しでございますから、頓と勝手が知れません。

多「死ぬべえが此の川は国の川と違つて底が見えねえから深いと見える、此処から飛込むべえか、彼処から飛込むべえか、何処から飛込んだらつん流されべえ、死ぬには入らねえ廿八文、此処え上せて置けば乞食か何か拾つて往くべえから、此処へ上せて置くべえ」と正直に橋の欄干え遣い残しの銭を載せて、

多「あゝ、国で信心していた榛名様や鎮守様八幡様もお情ねえ、私が死ぬと国の養い親の家が潰れやす、仮令家が潰れても私が生きて居れば立て直すことが出来るが、江戸で奉公するには肝心な受人になる人が三百里先へ往つてしまい、受人がなければ奉公は出来

ず、と云つて国へ歸れば、抜刀で追掛けられて殺されてしまいやすから、抛なく此処から飛込んで死にやすが、何卒私が亡え後は国の家が立ちますようお守りなすつて下さいまし、南無阿弥陀仏くくく」

と掌を合せて、あわや身を躍らして飛込もうとする後から、「これ待ちなさい」と多助を抱留めました。此の者は善か悪か次回に申上げましょう。

十

お話替つて、鹽原の家では今おえいと丹三郎と婚礼の盃をしようという処へ、分家の太左衛門が参りまして、

太「其の盃を少し待つて下せい」

と云われて、

かめ「どうしてお前さん来ました」

と大きに驚きました。

太「はい、驚いたかも知んねえが、私も驚いた、何ういう訳でおえいが処へ婿が来るか、

私も分家でいて其の訳を知らねえと云う事はねえから、何ういう訳で婿を取りやすか、それを承わりたえ、はい」

かめ「実はお知らせ申したいと思つて居りましたが、これが表向きの祝儀という訳ではなし、一旦極りを付けてから、お話をしようと思つて居りましたが、婿を取ると申す訳は、先月多助が出てから、女世帯ですから、どうか婿を取りたいと思つて居りますと、此処においでの方三さんは御病身で、お屋敷奉公は出来ないという処から、お上へ願つてお聞濟になり、名主様のお口入れでありまして、年頃もよし、おえいは江戸表からの知己でもあり、丁度宜しいから、お武家様から百姓の家へ養子に来て下さるのは有難い事で、誠に斯様な身に取つて有難い事はありませんから、取極めました、実は貴方の所へお話がしたいと思つて居りましたが、誠に急な事になりました、ほんの内祝言をして、後で貴方の所へお話ししようと思つておりましたが、今丁度貴方がお出でなすつて下さったから、何うかこれへお坐りなすつて下さい」

太「はい、そりやア承わりたいもんだ、おえいには多助という亭主があるのに、何ういう訳で婿を取りやすえ」

かめ「多助々と仰しやいますが、彼は親を捨て、家を出るような奴ですから、仮令帰つ

て来てても私の血統ちっすじだけに世間様へ対して入れられませんから、おえいに婿を取るのあたりは当然まえです」

太「こりやア承わりてえ、此の鹽原の家の相続人は多助と定まつて居やんすというのは、去年六月晦日みそかの晩に死んだ角右衛門殿の枕元に、貴方あんたも多助もおえいも五八も私わしもいたが、角右衛門殿が臨終いまわの際きわに何にもいう事はねえが、己おら家の相続人は多助と定さだまつて居る、此こ度は己おら死病と定つて居るから、一言いちごん云わねえければならねえと云うものは、多助にも嫁を取らなければならねい、就つちやアおえいは多助のためには従弟なり、おかめの為には多助は甥なりするから、おえいを多助の嫁にして此の家うちを相続させれば、此のくらい安心な事はねいが、多助は未だ年がいかねえによつて、太左衛門汝われえ此の家うちの後見に成つて、己おれが亡ねえ後のちを頼むと遺言をして、私わしが媒なごうど灼なごうどになつて、病人の枕元で盃をしやんした、其の遺言にある通り、多助は一軒の主人だから、そりやア随分南部の盛岡の方に馬のいゝのが出たとか、又山の売物に安いのもあれば買いに往ゆきてえが、急ぐんで家うちへ知らせる間もなく直ぐに往つて来たとか云つて、明日あすが日帰つて来るかも知んねえから、若もしも多助が帰つて来て、私わしい無沙汰むさたで何でおえいに婿を貰むわせやんしたと己おれに云われた時は、己おらは一言半句でも申訳がねえ、それだから私わしの眼の黒いうちは何うしても此の祝言をさせる事

は出来ねえ」

かめ「お前さんは何ぞという和多助々々と仰しやるが、何故なぜそんなら一軒の主人が親や女房を捨て、出て往つてしまいました、さアお前さんは多助を鼻眞にするから、若しも歸つて来たならば、お作さんの婿にでも何にでもおしなさい、私は何うしても彼様あんな者は家うちへ入れません」

太「其の事柄が極つた上で婿を取るなら取るもいゝが、極らねえうちは取らせねえ、己おらア分家だに、はい」

かめ「祝言と云つても内々うちくだけの婚礼で、村へ知らした訳でも何でもありませんわな」

太「仮令たしい内祝言でも己おらア分家だから内輪だが、内輪の己おれに知らせねえという法はあんめえ」

と頻りに争つて居りますと、土間の方から五八が、

五「旦那様しつ確かり遣つておくんなせえ、村むら中じゆうが付いて居りやすから確かりやつてお呉んなせえ」

と呶鳴りますし、太左衛門の申すのは実に理の当然ゆえ、おかめも困つて居りますと、其の頃は名主というと威張つたもので、幸左衛門という名主様が、

幸「太左衛門く」

太「こりやア飛んだ迷惑な所へお出でなすつて、嘸お困りでがんしようが、今申した通りの訳だから、何うか此の度の処は原さんの処は引取つておくなせえやし」

幸「これ、今聞いていれば、汝え分家だと言つて此の婚礼を拒む訳はあんめえという訳は、此の村方は誰の支配を受ける、土岐様の御支配で其の御家来の息子さんが此の家の聳に成つてくれるだから此の上もねえ仕合せ、殊に外の者が媒妁をするのと違つて、此の名主が媒妁をするのだから、礼の一言も言わしなければならねえのに、何ういう訳で汝ア拒むな」

太「はい、拒みやすな、あんた名主様なら何故私が処へ話をしやんせん、此の家には私より外に親類はありやしねえ、小前の者が違つたことをすれば論してやるのが名主様の役だのに、其の名主様ともあるものが、親類へ話をしねえで済みやすかえ、はい」

幸「それはどうもハア至極尤もな様で、成程どうも尤もだが、只今もいう通り、これが表向の祝言でねえから知らせねえので表向の祝言ならば親類や何かへも知らせ、檀那寺まで届けるんだが、表向でねえから知らせねいので、はい」

太「それじゃア私は内輪の者じゃねえかえ、はい」

幸「内輪の者には違えねいが、どうも只今も申す通り、どうも其の御領主様の、どうもそ

の

と名主も辞ことばに支つかえて仕様がありません。何と云つても理の当然ですから名主も返す辞がなく困つてしていると原丹治が見かねましたから、それへ出て、太左衛門より少し座さがを下つて坐りまして、

丹「太左衛門殿わし私もとんと心附かなかつた、お前の方にはお話があつた事と心得、名主様も御繁多でもあり、殊に小前といえば子のように思つて居る所から、お前の方へは後あとで話をする積りであつたかも知れん、お龜がお話をせんと云うのは重々悪いが、彼あれは女の事で其の辺に心附かず、実に申訳がない、お前の言うのは理の当然だが、此の婚礼が破談に成つては何なんも知らないおえいや丹三郎が可哀そうだ、お前が承知さえしてくれ、ば実に此の上もない目出たい事だから、どうか勘弁してやつてくれ、此の通り丹治が首しうべを下げてお詫を致す」

太「これは恐入りやす、マア頭をお上げなさい、至極御尤もな訳でがんですが、又御城中のお侍が百姓に手をつけてお詫をする訳はねえが、道そむに背くからお詫言をなさるんで、道に背いた事はどうしても通せねえ、貴方あんたが何と言つても亡つた角右衛門の前へ対して、此の婚礼は出来ねえ、又何なんも知らねえおえいや丹三郎が不憫だと仰しやれば些ちと申したい事があ

る、おえいや丹三郎さんが何にも知らねえという訳はがんしねえ、と言うものは、先達
で店で拾った文がありやす、私も焼いてしまふべえと思つたが取つてありやすから、これ
を表向にすれば貴方のお役にも拘わるから、何にも云わずに帰つて下せえ」

と云われた時は原父子は恟りして、それでは先達の艶書を太左衛門が疾に焼捨てた事と
心得ていたが、取つてあつたか、あゝ困つたものだと思つていると、丹三郎は血氣の壯
者ですから心が逸つて、此奴が居るから可愛いおえいと夫婦になれないと思つて、側に
あつた一刀をズツと抜いて、突然太左衛門に斬付けますと、其の頃は人切り包丁に驚い
たもので、太左衛門はこれを見ると驚き、外へ逃げ出そうとして縁側から転がり落ちて、
慌て、厩の方へ逃げると、五八は鋤を提げて、

五「さア旦那様を殺せば汝を殺すぞ、多助さんの代りに己が汝を打ち殺すだ」

と勢い烈しく抗いましたから、丹三はこれに憶して後へ後ると、おえいは嫁入姿の儘で
駆出し、可愛い丹三さんに怪我をさせてはならないと思ひ、突然に五八の頭髪を取つて
後へ引き倒そうとする所を、前から丹三郎が五八の面部へ切付けましたから、

五「あゝ己を切りやアがつたな」

と云う、丹三郎が尚お切ろうとすると、太左衛門は厩の方へ逃げて来ましたが、向うは

厩、西の方は灰小屋、此方こちらは生垣みかちで路みちがありませんから、慌て、前の方の大豆や小豆などが干してある所へ来て、庭むしろに躓つまずいて倒れる所を、丹三郎が長なが刀がものを揮ふり上げ、一刀に太左衛門を切ろうとする、太左衛門はどうしても遁のがれる道はありませんが、妙なもので、厩に繋いである青という馬は、多助が家うちを出る時沼田原の松の木へ繋いで因果を含めた処、多助の云うことに感じて泣いたと云うくらいの名馬でありますから、今太左衛門が丹三郎の一刀もとの下に殺されようとする有様を見ると、ボンと厩から躍とびだしました。田舎では厩の前にませと云う丸太があります。其のませを馬が鼻はなづら先はで反はね除のけて外へ躍出して、突いきなり然然後あと足あしを揚げて丹三郎を蹴けましたから、丹三郎は其そこ処こへ倒れますと、馬が丹三郎の肩へ噛付きましたから、丹三郎はさも苦しげにヒイと泣声をあげ、七顛八倒の苦しみを致します。これを見ていたおえいは驚いて、アレーと云いながら逃出しますと、馬は尚更暴れておえいを追掛けて、背後うしろからおえいの鬣くわを嚙うしろえて後へ引倒して、花嫁の美しくゆう濃こつてりとお粉粧しまいをした顔を馬がモリ／＼と噛みましたから、これは全く馬が多助の鬪あだを討うつたようなものでございます。此まの間に太左衛門と五八は表の店たなへ往いつて、来合せていた若わか衆いしゆにこれ／＼の訳だと話をする、平常ふだんにく悪くまれている名主だから、名主も原も打うち殺ころしてしまえと云うので、是から百姓五六十人が得物々々を持って、鹽原の家うちを取囲むというお話

に相成ります。扱さてまた鹽原多助は進退こゝに谷きわまり、已むことを得ず今や昌平橋から身を投げようとする所を後うしろから抱き留められ、

多「何方どなたさまかは知りませんが、何卒どうぞ放しておくんなせえ、生きて居られねえ深い義理にからまる身の上、何卒死なして下せい」

△「コレサ、それだがの、今聞いて居れば、遠い国から出て来て奉公をするのに、受うけにん人がねえから死んでしまうと云うのだろう、死ねば義理ある家が立てられねえとか云つたな」
多「はい、そうでがんす」

男「死んで家が立てられなければ死ぬにやア及ばねえじやアないか」

多「それでも斯こうやって居れば腹が減つて死んでしまいやすから、どうか放して死なして下せい」

男「だがサア、其の受人がなくなつて奉公に置いてくれる人が出来れば宜いいのだろう」

多「はい、こんな乞食のような者を奉公に置いてはがんせん」

男「己おれの家うちで奉公に置いてやろうが、斯こん様な断末場に成ると死ぬ気にもなるもんだが、人間と云うものは少しほとぼりが脱ぬけると、苦しい事を忘れてしまうものだから、お前が死んだ積りになつて働けば置いてやろうよ」

多「はい、お前さん何処から出た、私わし死くろぬ苦くろみをして働く事は何とも思いやせん、有難うがんです、どうか置いておくんなせえよ」

男「だがノウ此の心を忘れてはいけないよ、死ぬ時は了簡の出るものだが、少し過ぎれば忘れるものだから、お前めえが死ぬ気になつて辛抱さえすれば、国へ帰る時は小遣ぐらいは持たしてやるから、私と一緒に来なさい」

と連立つて参ります。此の人は神田佐久間町河岸にいる山口善右衛門やまぐちぜんえもんという炭問屋すみどんやで、家は八間間口で、土蔵も幾箇いくらもあり、奉公人も多く使つて居ります。

善「今帰つたよ」

「というと奉公人が皆みんなな出てまいつて、「へいお帰り遊ばせ〜〜〜」

奉「大層お帰りがお遅いからお迎えに出ようと思つていました：これ〜夜まで乞食が這入つて来て困るな」

善「乞食じゃない、それは私が連れて来た人だ、まあ此方こちらへお這入り」

多「へい御免なせい」

善「これ〜お前其の縄の帯だけ取りなさい、其処そこの番手桶に水が汲んであるから足を洗つて、雑巾は手桶に掛つて居るから、ナニ湯布ゆまきがない、サア出てもいゝや、なに湯布も売

つてしまった、此方へ上んな、どうか若衆、此の人を家の奉公人にする積りだから世話アしてやってくんな、国から出て来て頼る所がないと云つて、今昌平橋から身を投げようとする所を助けて来たのだ」

奉「へい、それは御奇特の事でございます」

多「皆な此処にいるのは番頭さんでがんすか、私ア遠い山国から出て来て、頼る所もねえから、今身を投げべえと思つた所を、此方の旦那様に助けられましたものでがんす、どうか目を掛けて下せい、又貴方は番頭さんだから、斯様な者を置いちや為にならねえから追出してしまった方がいゝなんて、旦那に意地を付けねえで下せいよ」

善「そんな事を云わないでも宜しい、質朴で宜しいなア、どうだ腹が減たろう、なに昨日から食わない、これ小僧台所へ連れて往つてお飯を食わしてやれ、きよとくしてはいけないよ、今日は御先代の日なり、誠に好い事をした」

番「誠によい御奇特をなさいました」

善「今の男はどうか辛抱をして、義理ある家を立てたいという誠に好い心掛の奴だから、何うか皆が目を掛けてやってくれ、物になりそうだ、これく飯を喫べて来たか」

多「食い過ぎて坐れねえ、ひよつと追出された時、三百里往けねえと困るから」

善「何か食べたか」

小「何も食べません、何をやっても勿体ない〜と云つて何も食べません塩物をやったがそれも食べません、お香物を甜つて御膳を食べて、一番終いに香物をガリ〜と食べました」

善「そうか、妙な男だなア、おい〜善太郎此処へ来な、これは今私が助けて来た人だ、何と云つたつけなア、助けて来たから多助か、多助や、これは家の悴だから又いろ〜用を言付けるから」

多「へえ、若旦那様でがんすか、ハア今夜は貴方の父様に助けられやした、どうかお目をかけておくんなしよ、あなたの着て居るのは和けえ着物でがんす」

善「家の悴は和けえ着物でなければ着ないのさ、なアにこれは平常着で、結城紬だ」

多「へい、これが結城紬でがんすか、結城紬というものは糸を一々手でよつて、それを高機で軽く打付けて置くのではねえ、女どもが力にまかせにキイツと締めて織るんだから、容易に出来るもんじゃアねえ、それよを不断に着るのはもつていねえじゃがんせんか、これから貴方と兩人で一生懸命になつて稼いで、此の家を大きくしねえばならねえ、貴方も親孝行をして此の家を大切に思うたら、不断は木綿を着るが宜うがんとすよ、そうして旦那さ

ん、あれじやア奉公人のお菜かずが多うがんすよ、何でも奉公人のお菜は二度はいらねいから一度になせいまし」

などと一々主人の前で申しますから、主人は妙なことをいう奴だと思つて居ります。多助は善右衛門を命の親と心得、有り難く思い、寝ても寤さめても恩義の程を忘れず、万事に氣を利かして、骨身を惜まず一生懸命にくれ〜と働き、子ねに臥ふし寅に起るの誠めの通り、子と云えば前の九ツで、寅は七ツ時でございますから寝る間も何も有りはしません。朝は暗いうちから起きて先ず店の前を竹箒で掃き、犬の糞ふんなどがあつても穢きたないとも思わず取除とりけて川へ投げ捨て、掃除をしてしまうと台所のおさんどんが起きて釜の下を焚附けると、多助は水瓶へ水を汲み込んで遣り、其のうち店の者が漸く起きて台所へ顔を洗いに来ると一々手ちようずだつ水づ盥づへ水を汲んで遣り、店の土間を掃いて居る中うちに店の者がお飯まんまを喰べてしまうから、自分が食事を致し、それから直ぐ納屋へ往つて炭を担いで、奥蔵の脇の納屋に積み込む、何や彼や少しの隙ひまもなく働きますゆえ、主人は素もとより店の者まで皆みんなな感心致して居ります。多助は余程奇体な着物を着て働いて居りますゆえ、善右衛門が

善「多助や〜」

多「はい〜」

善「お前はそんな襪ぼろの下さがつた物を着て居てはいかないよ、勇次郎の着物の古いのを遣つてあるのに何故なぜ着ないのう」

多「はい、有難うがanspruchけれども、とうに着ればハア破れやんすから、矢張り此の古襦袢の方が惜おしげがなくなつて却かえつて働かきようがanspruch」

善「働いき宜いいつたつても余あんなり見みともない、それに跣はだし足で歩くのは止せよ、草履を穿きな、若もし踏ふ抜きでもして三日も四日も休やすむようではいかんよ」

多「踏ふ抜きはしやせん、踏ふ抜きをしねえように朝あ暗くえうちに貝殻かや小こさい砂利すだの瀬戸物の碎かけ片があると、掘ほくつて置おき、清き潔れいに掃はきやんすから平て坦えになつて居ゐりやす」

善「それでも余あんなり見みつともない、跣はだし足で納屋から往いつたり来きたりするから、人様が見て、山口屋の奉公人は何だ、あんな形なりをさせて置おく、乞食おこもを見みたような形なりだと云いわれて外聞ぐわいぶんが悪わるいわな」

多「旦那様、そんじやア人が聞きいたら、あれは奉公人じやない、乞食こじきがお百度を踏ふんでいいるのだと云いいなせえ」

善「そんなことが云いえるものか、何か着物はないかえ」

多「旦那様、此間こゝ柳原を通とると大でえ古着屋うちの家に一枚めい買かいてえと思おもつた着物ぎが有ありやした

から、価聞いたら六百だと云いやんしたが五百五十文ぐれえには負けべえと思いやすがねえ、買つてもようがんすかね」

善「田舎者だと思つて馬鹿にして、贖物でも売られてはいかないぜ」

多「なに、私わしい悉すつかり皆あつた検めやんした、事に依つたら縫目を解ほどいて裏返して見べえか」

善「それが気に入つて着られるなら買つて来るが宜いい」

と錢を持たして遣りますと、多助は急いで柳原へまいり、彼の古着を買取つて直すくに着て歸つて参りましたを善右衛門が見て、

善「フ、妙な塩梅あんばいだのう、和平どん見なさい、紋付の筒袖は始めてだのう、妙なものだなあ」

和「へえー、異かわりものですな、アハ、ハ、ハ、ア、私わたくしも紋付の筒袖は始めて見ました」

善「選えりに選えつて轡くつわの紋付を買つて来たのは何ういう訳だ、薩摩様の御紋所ごもんじよのようだなア、多助、何かそれがお前の家うちの定紋か」

多「そうじやア有りやせん、旦那様聞きいておくんなせい、国を出る時に沼田の原中の一本松へ、長い間引慣れた青という馬を繋いで、名残なごりが惜いとまじしいから暇乞いとまごをしながら馬まの前まえ面づらを撫なでて、己おれえ江戸へ行ゆき、奉公して歸けえつて来るまで、達者で居て呉わしんと私わし泣きやんし

て、其の馬を撫でたり摩さすったりしやすと、馬も別れを惜んで泣きやんした、私も馬の泣いたのを初めて見やんしたが、大い眼でけから涙を砂原にパラ〜と落しやんした時には、私わし人に別れるより辛くつて、畜生でさえに斯うやつて名残を惜んで泣くかと思いやんした時には、実に辛くつて私わしい袖びつしよりにしやんしたが、それから江戸へ出て尋ねる人には逢えず、外ほかに知音しるべも無くつて請うけにん人になりてもないから、奉公する事も出来ねえで、寧いっそ身まい投げべえとする所を旦那様に助けられ、今では雨にも風にも当らねえで、暖あたけえお飯まんまを喰べちや斯うやつて何不足なく居りやんすが、人は楽になると直じきに難儀した事を忘れるもんですから、私わしい其の難儀を忘れねえ為に、見み当あたつた此の轡くつわの紋で、少し我儘な根性が起つた時には此の紋を見て、馬に別れた時の辛い事を思い出して、それを思えば何でもねえとお手本になりやんすから買つて来やした」

善「はい〜成程々々、感心どうも感心、和平どん特別だのう」

和「誠に感心な事ですなア、妙かに異かわつて居りますよ」

善「まア〜精出して働け」

多「へい〜有難うがんす」

と隙間もなく身を粉こに砕き、忠義に働きますゆえ、出入りの者も自然多助を可愛がるも

のばかりでございます。斯くて其の年も果て、翌年の丁度九月頃には多助も大きに用向きに慣れて参りましたゆえ、

善「多助や〜」

多「はい」

善「お前のう未だ給金を極めなかつたが、宜く働いて呉れるから給金を極めようのう」

多「はい、旦那様、私給金は戴きましねえ」

善「戴かんではいかんから、給金だけは極めて呉れなければ困るよ」

多「それだけは何うしてもいきましねえ」

善「極めた給金を蓄めて、国へ帰る時の資本にして、国の家を立てるのじやアないかえ」

多「でも、命を助けてくれた旦那様のために働くのは当然だのに、お給金を戴いては済み

ましねえ」

善「それじゃ困るのう」

多「そんなら旦那様私一つお願いが有りやすだ、其処らに落ちてる廢物を拾い蓄めて、それを売り、二文でも三文でも旦那様へ預けるから、安い利で宜いが、私国へ帰るまで預かってお貰い申してえ」

善「拾い蓄めると云つて何を拾うのだ」

多「何てえ事なしに廃りになるものは、烟草の粉でも草履草鞋の要らなくつて皆なが棄てるのは、縄切でも紙屑でも、何でもハア貯めて置いて売りやんす」

善「そんな物を買人が有るか」

多「何でもハア廃りにはなんねえもので、釘かけでも拾いやんす、それを売つて金を蓄めやんす」

和「余り拾いたがつて、若し店へ来たお客が落した烟管や烟草入などを拾つてはいけねえぜ」

多「そんな事はしやしません、何でもハア人の要らなくなつて棄る物べえ拾うので、番頭さんはそんな根性が些とべえ有りやんすねえ、根性が無くちやそんな事は云わないもんだ、自分の心に有ると人もそうかと思うものだが、私のは皆が要らなくなつて川へ打投る物べえ拾い集めて蓄めるんでがんす」

善「何処へ蓄めて置くのだ」

多「裏の、屋根が破れて物がいらずにあるから、板を載せて置きやしたが、裏の大きな納屋が明いて居りやんして、別に物を納れないようでがんすが、旦那様彼処を安い店賃

でお貸しなすつて下せいまし」

善「お前めえに貸すのに店賃も何もいらん」

多「そんなら屹度彼の納屋へ物を一杯詰めても大丈夫でがんすか、其の代りお給金なしで働きやす」

善「感心な事だ、其の志が面白い、貸して遣りますが、些ちつと方々ほう／＼のお得意やお屋敷を教えて置かなければいかんが、戸田様のお邸やしきへ多助を遣ろうかのう番頭」

番「それが宜しゆうございます」

善「多助や」

多「へい」

善「其処そこに四俵おおだわら大俵おが有るだろう、それを向うの戸田能登守様のお屋敷へ持つて往つて呉んな、御通用門から這入つて鎌田かまたい市作様のお宅へ届けるのだ、知れなければ御門で聞きな」

と請取書うけとりしよを持たせて遣りました。多助は路草みちくさを喰わず、ギシ／＼担いでまいり、戸田様の御門にかゝりまして、

多「ヒエ、御免なせい」

門番「何だく」

多「炭屋善右衛門の所から参りめえやしたが、此のお屋敷の御家来に鎌のさくじつ一昨日という人がありやすか」

門「なんだ、フ、フ、鎌田市いっさく作様か」

多「そんだ、よく知ってる」

門「何だ、けしからん奴だ、それは御門を入れて板塀に附いてまっすぐ真直に行くとお馬場の所に出るから、それへ附いて曲ると裏手に四軒お長家ながやがあるが、二軒目のお宅だ」

多「有難うがんす」

と又ギシくと担いで、教えられた通りまいりますと、鎌田市いっさく作という標札がありましたゆえ、

多「御免なさい」

妻「なんなのう」

多「炭屋善右衛門から炭を持ってめえりやした」
侍「そうか、大きに御苦労、幾俵持って来たえ」

多「四俵持ってめえりやした」

侍「そんなら二俵は此処に置いて、後の二俵は一軒隔いてお隣のお宅まで持って往つてくんな、未だお荷物も片付くまいが、手前方から左様申したと二俵持って往つてくれ」

多「へい、一軒隔いてお隣かね、ようがんですが、代を貰いていもんでがんです」

侍「後でやるよ」

多「でもマア斯うやって請取になつて居りやんすから、そんなら二俵丈け載いて置きますよう」

侍「あとで一緒に遣るよ」

多「それでも炭取つてしめえに代をよこさねえで、あとで炭取つた覚えはねえと云われても、私は田舎者で仕様がねえ、主人が大事だから代をよこさねいじやア困る、マアよこせ」
侍「よこせとは何だ、おかしな奴だ、そんなら持つて往け」

と代を投げ出すを多助は受取り、懐へ入れ、

多「そんなら此の二俵一軒隔いてお隣へ持つて往きますべい」

と其処へ担いでまいり、

多「御免なせい〜」

妻「どうれ、誰だ」

多「へい、私は炭屋の奉公人でがんですが、あの一軒隔おいてお隣の鎌田市作様の処から炭二俵持つて来やした」

妻「炭屋の男か、大きに御苦労だのう」

多「おら家の炭は宜いい代物しろもの、べい選んで安く売りやんすから、炭を買うなら得だから、おらア方ほうでべいお買いなんしよ、他ほかで買つては駄目でがんすよ」

妻「あいよ、他では取らないよ、此処へ置いいては邪魔になるから、開きが明いて居るから其処そこへ入れておくれ」

多「そんなら此の戸袋の下へ納いれて置きやす、犬が小便をかけると焚いいて臭いから、戸を立掛けて置きやんす」

と云いながら、縁側の方を見ますと、旅荷物に縛り附けてごぎいます荷札に、鹽原角右衛門と筆太に書いてありますゆえ、多助は気が注つきまして、思わずかくと縁側の方へまいました。

多助は戸田様のお屋敷へ炭を持ってまいり、帰ろうとして不図目に付いた荷札に、実父の姓名があるに、思わず縁の方よりかけ駆より、

多「今出たお内儀さん」

妻「可笑しい男だよ、お内儀さん」と云つて何だよ」

と云いながら庭口の縁側の障子を明けて出て来ましたのは、年頃四五六の人物のい宜い御新造で、ふだんぎ平常着ゆえつむぎ紬ぐらいではありますが、お屋敷は堅いもので紋付を着て居ります。妻「何か用があるのかえ」

多「此処に荷物が有りやんして、木札に鹽原角右衛門と書いてあるが、此のお方は肥前の島原へお国詰になつて往つたお方ではござりやせんか」

妻「よく知つて居るのう、当家が鹽原と云うよ」

多「それでは此処な家は、あの元と阿部様の御家来であつたが、久しく浪人して上州小川村に居て、また此処なお屋敷の御家来になつた方で、あんたは鹽原角右衛門様の御内室のおせいさんと云いやんすか」

妻「あい其の通りだが、どうして知つておいでだ」

と云われ多助は飛立つばかりに嬉しく思い、泣声を振り立て、

多「お母さま」

と云いながら我を忘れておせいの裾にピツタリと縋つて、

多「お懐かしゆうがんした、お母さま、八歳やっつの時に別れ申した貴方あんだの實の子の多助が
んすよ」

清「おやまア何うもまア思い掛けない、これ多助、見る影もないそんな姿なりになつて」

と云いながら同じく泣出しました。

多「是には種々いろく深い訳ががんしての事で、どうかお父様とつさまやお母様かゝさまにお目にかゝりてい
と心掛けて居りやんして、信心をしたお蔭でマアお達者なお顔を見られやんした」

という声を聞き附け、奥より角右衛門が出てまいり、物をも云わず御新造の手を取つて
奥へ引入れ、縁側の隔へだての障子をパツタリと閉切たてきつてしまひましたから、多助は呆然として、
多「お母様かゝさま、今此処へ出てお母さんの手を持つて引張り込んだ人は誰だえ、お母様も
しやお父様とつさまではござりやせんかえ、お母様、お父様かえ、」
角「黙れ、苟かりそめにも殿様のお側近く勤つとめをする鹽原角右衛門、炭屋の下男しるべに知己しるべは持たんわい、
成程今を距さる事十五ヶ年以前、阿部家を出て上州東口の小川村に八ヶ年程浪人していた其
の折、沼田の下新田に鹽原角右衛門と申する百姓が居り、私わしと同じ名前の好みよしを以て、乳

のない所から悴の多助を育て、くれろと頼まれたゆえ、余儀なく引受け、これなる清の乳を哺^のまして八歳^{さい}までは養育したが、もう八歳にもなったから返してくれろとの頼みに依り、早速親許へ引渡した時に、其の方の実父角右衛門より長らく悴が御厄介になり、礼の仕方がないからと云つて、聊^{いさ}かでは有るがと五十金を礼としてくれたればこそ、拙者は其の五十金を持つて身支度を整え、借財を払つて江戸表へ出てまいり、御当家へお抱えになり、只今ではお側近くを勤め三百石頂戴致して居るも、沼田下新田の角右衛門殿の恩義ではないか、拙者も其の恩義を知らんではないが、御当家へお抱えになると間もなくお国詰を仰付けられ、万里の波濤を隔て、居れば、都度々々書面も送らんが、又^{なま}じいに便りを致せば其の多助と云うものが八歳まで育てられた事ゆえ、却^{かえ}つて此の方を其の親と心得違いを致し実父角右衛門殿に不孝な事でも有りはせぬかと存じて、態^{わざ}と心あつて便りを致さずにいた、併^{しか}し十四ヶ年振りで江戸表へ出てまいり、余り懐かしいから先^{せん}達^{だつ}て国へ書面を送りし処、角右衛門の分家太左衛門より返事がまいり、披^{ひら}いて見ると、角右衛門殿は一昨年歿し、跡目相続を致す多助と申すものは昨年家出を致し、跡方は焼失して鹽原角右衛門の家は絶えたという返事に大に驚^{おど}き、其の返事の如くなれば多助と申す奴は人でなしと只今も申し居る所であるが、若^もしや多助と申す者が八歳まで養育されたゆえ、我^{われ}を其の親と心

得て江戸表へまいり、ずう／＼しく来るとも、対面は国の角右衛門殿の位牌に対しても相成ろうと心得おるか、そりやア若い内の事ゆえ女に溺れるとか、或は酒食に其の身を果し、路頭に迷い、見る影もない姿となり、うろ／＼致しては居ろうかと、朝夕共に此の清と心配致していたが、どうも何とも言い様なき不孝不義の奴、家督人たる者が親の家を捨て、国を立去るとは重々の不屈者め、仮令此処へ参ればとて、面会致すような角右衛門と心得居るかえ、目通りはならんから早々出て往け」

清「誠に御立腹の段は重々御尤もさまでございます、多助お前心得違いをしたろう、若い内には随分有りうちの事とは申しながら、お前より外に鹽原の家を継ぐ可き者はない、其の大事な家を捨て、若気の至りとは云いながら女に溺れて金子を遣い果し、家に居られなくなつて家出をしたのだらうが、何とまあ浅ましい心におなりだ、今から十五年あとにお前を沼田の下新田へ遣つてからと云うものは、暑いにつけ寒いにつけ、旦那様も私もお前の事を忘れた事はありませんよ、痘瘡はしたなれど、知らぬ田舎へ行つて我儘を云つて叱られやしないか、又田舎の事だから手習や学問も碌々出来まいだらうし、どうして居るかとお前のお噂ばかりして居ましたが、そんな姿で来たとして、お父様は中々物堅い御気性だから、お会いになる気遣いはないから、辛抱をして国へ帰り立派に鹽原の家を相続

して出て来れば、其の時はお会いになるかも知れないが、只今の身の上で会おうと云うのは無理な話、そんな見苦しい姿なりでうろくして、炭などを担いでお父様お母様つかさまと云われた訳ではあるまい、田舎育ちとは云え余り分別あんまがないではないか、又お詫びの出来る時節もあろうから早く往ゆきなさい」

多「はいく、私わし中々女などに溺れて金を遣つかつて国を出た訳ではがんせん、私わしだつて国を出たくはねいが、居れば命にかゝる事があつて、実は…」

と国の事を言いかけてましたが、思い直して、いやく養母おふくろやおえいの事を迂濶まがに御両親のお耳に入れたなら、おかめはお母様かゝさまには実の妹いも、又女房おえいは実の姪めい、此の母子おやこの悪事を聞かれたら物堅いお父様とつさまやお母さまつかが嘸さぞお驚き遊ばし、御心配なさるだろう、云わずに居ても跡で事の分る時もあるうから、か御心配なまなを掛けるより寧いっそ何なにも云わずに帰ろうと、仏のような心の多助は、何なんにも云うまいと思ひまして、

多「御尤もでがんですが、種々いろく深い訳が有ることでがんして、お聞かせ申していかが、云うに云われない訳があつて云いやんせんが、後あとで事は分りやしよう、私わしい出ねえれば命にかゝる事があつて、抛よんどころなく出たゞ、出れば後あとで家の潰れる事は知っているが、命い取られずは家うちを立てることも出来ねえから、私わしが江戸へ出て奉公して金を貯め、国へ帰けえつて家うちを

興そうと思つて江戸へ来ることは来たが、頼るものがぐんしねえで、去年の八月廿日此のお屋敷へ尋ねて来て、お父様やお母様はお達者で居るか、と御門で聞いて見れば、お国詰になつたとの事で、お国は宇都宮だつたのがお国替になつて、肥前の島原で三百里も先だと云われ、頼みの綱も切れ果て、路頭に迷う身の上となり、仕方がねえから昌平橋から身い投げべいとすする所を、助けてくれたは今の主人山口屋善右衛門様、親切に世話をして、請人なしで奉公人に使つてくれやんしたから、私い山口屋で十年でも二十年でも死んだ氣になつて稼ぎ、金を拵え国へ歸つて、鹽原の家を立てる心でがんですから、どうぞ心配なすつておくんなさるな」

角「黙れ、それ程まで恩義を知つて居るものが、国の家を捨て、出るかえ、恩義を弁えて居るなれば町人でも侍でも同じ事だから、今の主人善右衛門と申す者も、命を助けてくれた恩人、殊に主人であるから身を捨て、奉公をし、忠義に勤めあげ、手前が金を拵え国へ歸り、一旦絶えた親の家を相続し、親より勝つて立派に家を立てるよ、身を立て道を行い、名を後世に揚げて父母を躰わすくらしいのことは、八歳のおり寝物語に度々申聞けてあるではないか、手前も侍の忤、いやなに仮令百姓の子でも其の位の事は弁えて居るだろう、早く歸れ」

清「迎もお逢いはないからお帰りよ」

多「はい帰りますよ、八歳の時にお別れ申しましたから、お父様やお母様のお顔を碌に知んなかったが、お母様には今始めてお目にかゝりましたから、お母様の顔は斯ういう顔で斯ういうお姿だという事は覚えやしたが、お父様のお顔は知りやしねえからお顔だけ見せておくんなせい、そうすればお父様が表をお通りなさる時お顔を眺めて、あゝお達者で戸田様に奉公していらツしやるかと思えば、仮令言葉は交せねえでも心丈夫に奉公が出来やんすから、どうぞお顔を見せておくんなせい、やアお父様なに殿様、どうぞお願いですがんすから、お母様なに御新造様どうぞ旦那様へ取次いでお顔を見せておくんなせえよう御新造様」

と我を忘れて縁側に這上つて男泣に泣倒れるを、障子の内で聞く鹽原角右衛門も堪え兼ねる親子の情合、思わず膝へはらくと涙を落しましたが、流石に武家魂は違つたもの、屹と思ひ返して声を荒らげ、

角「黙れ、早く往かぬか、何時までも兎や斯う無礼のことを申すか、苟めにも殿様のお側近くを勤むる身の上で、炭屋の下男に知己は持たん、ぐずぐずして居ると障子越に檜玉に揚げるぞ」

多「へい〜参りやす、突殺されては仕様がねえ、あゝ有難え親心だなア、自分だって逢いたくもあんべいけれども義理堅いお人だから、一旦人に呉れたもんだから己ア子じゃねえと云つて、先方の子と思わせべいとするのだ、己だつて実の子だか嘘の子だか知つてゐるが、堅いから槍で突殺すと云いやんしたから、是から槍で突殺された気になり、死身になつて奉公しやすんから、どうぞ心配しねえで下せい、ハア段々お寒くなりやんすからお体を大事にしてくだせい、私立派になるまでお達者でいておくんさいよ、左様なら」とオイ〜泣きながら御門へやつて来ると御門が厳しいから、

門番「これ〜炭屋の男」

多「へえ」

門「何うした泣顔して、御門切手を戴いて来たか」

多「何もねえ」

門「これ〜」

という間に無闇に表へ出て、漸く家へ歸つて来る。

善「はい、大きに御苦労だった、戸田様は七万八千石だけあって、お立派だろう」

多「あの屋敷は私生涯往くのは厭でがんす、戸田様だけは駄目だ、槍で突殺すと云われや

んした」

主「それは大方からかわれたのだろう」

多「からかわれたのではありやしねえ、本当でがんすがねえ、其の槍で突殺すという心根が有ありがた難えもんでがんすねえ、旦那様さま槍で横つ腹を抉きられる心持は一通りでは有りやすめえが、始終槍で突かれていまする気で働けば、どんな苦しい奉公でも出来ようかと思ひやすから、旦那様さん始終わし私が横つ腹を槍で突いてると思つてこき使つて下せい」

善「何の事だか分らないよ」

多「誠に感心だ」

と多助は実父の志の深きを有難く心得ましたから、これより多助は命がけて山口屋へ奉公しております中うちに、一つの経済を考え出して金を貯める工夫をするお話は此の次に申し上げます。

さてお話は二つに別れまして、沼田の鹽原の家いえでは其の騒動は一方ならず、馬が荒れ出して丹三郎を嚙殺しました時には、名主幸左衛門、原丹治もおかめも途方にくれて慌てまわりました。是れは何も馬が多助の鬣かたきを取ったという訳ではございません、馬は鼻の先へ閃はめく刃はものの光りに驚いて躍はね出し、おえいを引倒し丹三郎を嚙殺するような訳になるも天の

悪し^{にく}みで、自然に馬が斯様な事を致すような事に成りましたものでございます。丹治は我が可愛い悴を噛殺されましたから焦立^{いらだ}つて庭へ飛び下り、馬の脇腹へ刀を突込んでこじりましたゆえ、流石^{さすが}に猛^{たけ}き大馬^{おおうま}も其の場へバツタリと横^{よこた}おしになる上へ乗^のし懸り、力に任せてギューと無闇に刮^{こじ}りましたから、馬は其の儘悲しい声をあげて息は絶えました。其の中^{うち}にわいゝと人声^{ひとこゑ}が致しますゆえ丹治も観念いたして、

丹「おかめもう迎^{むか}へも此の家^やに足を留めている訳にはいかん、殊に証拠の艶書^{ふみ}を太左衛門が持つて逃出したから必ず役所へ訴え出るに違いない、そうする時は迎も斯うしてはいられないから、己も身を匿^{かく}さなければならぬ」

かめ「そんなら旦那お邪魔でしょうが私も御一緒に連れて往つて下さいまし」
丹「兎も角も早く逃げる支度をしろ」

と云いましたが、差当り二人の死骸の遣り場がありません所から、右の死骸を藁小屋へ突込^{つっこ}みまして、それから有合^{ありあわ}した着替の衣類に百五十両の金を引出して、逃げる支度をして居る中^{うち}に、門前には百姓が一杯黒山のように群^{むら}り寄^{りが}り、大声を揚げて口々に名主も原父子^{おやこ}も此処^{こゝ}へ出^でる、打殺^{うちころ}してしまえ、打殺^{うちころ}してしまえ。と罵り立てられ、丹治おかめは表へ出る訳にいかない処から、一計を案じ、彼^かの藁小屋へ火をかけましたが、藁の事ゆえ

忽ち燃え移り、屋根裏へ抜けて母屋へ移り、焰々^{えんく}とばかりに燃出した^{もえだ}時には、火事馴れぬお百姓衆の事ゆえ、大きに驚きまして、丹治の逃げるを追いかける了簡もなく、火を消す方へのみかゝり、ワイ／＼騒いでいる中に、丹治おかめの兩人は生垣^{いけがき}を破り逃げ出しました。名主も逃げ場を失い、漸くの事で生垣を破つて逃出そうとすると、平常小前の者に憎まれて居りますから、百姓衆は手に／＼鋤鎌^とを執り、名主を殺せ、名主を殺せ。と云うので、到頭無茶苦茶に殺してしまいました。此の事早くも御領主様へ聞えましたから太左衛門罷出^{まかりい}でて、立派な申開きが相立ち、原丹治父子の悪事、おかめの不届の次第が分りました。が、鹽原の家は焼失致し、それなりに済みまして、太左衛門は鹽原角右衛門の位牌を引取り、線香の煙の絶えんように致しました。此方^{こちから}はおかめ丹治はおえいと丹三郎の死骸を藁屋に匿^{かく}し火葬に致しましたが、茅屋^{かや}ゆえ忽ちに燃え広がりに母屋へ移り、残らず類焼する。此の紛れに丹治はおかめの手を取つて須川へ出て、それより大戸村へ出て、それより岩本村へかゝり蛇^{じやだいら}平へ出る。これは上州^{あがつまごおり}吾妻郡^{あがつまごおり}の四万の山口と申す所へ抜けてまいる間道で、獵^{かりゆうど}人^{ひと}か柚^{すま}でなければ通らん路^{みち}でございませうが、兩人は身の上^{ふたり}が怖いから山^{さんちゆう}中^{ちゆう}を怖いとも思わず、足弱^{あしよわ}を連れて漸くのこと山口へ参りました。彼の辺^あへいらつしやつた方は御案内でございませうが、温泉場で、大久保先生が分析遊ばされた所

が、上州第一等の温泉であるという事で、今二人は田村と申す家へ宿を取り、身隠れをし
 ている内に、九月の末からチラチラと雪が降出しました。此の辺は翌年の三月あたりでな
 くては雪が解けず、其の間は往来が出来ませんから幸いの匿れ場所としている内に、因果
 におかめが懐妊致しました。三十九歳になつて子を設けると云うは物の因果で、原丹治も
 困つたが、まア／＼金を沢山盗んで来たから十分贅沢をして、田村の家に厄介になつて居
 りますと、翌年九月廿九日に産み落しましたは男の子で、名を四萬太郎と附けましたが、
 おかめは産後の肥立が悪く、漸々のことになり十一月になりますと、先ず体も治りました
 から、斯んな山の中に何時までも居られる訳のものではない、それにお尋ねの風聞も大抵
 抜けた様子だから故郷忘じ難しの譬で、二人一緒に江戸へ往き、どんな暮しでもしようじ
 やないか、懐に金も有ることだからと、これから二人連立つて十一月の五日に其処を出立
 しましたが、此の日は少々空模様が悪いのを抜け出し、中の条より村上村に出、男子山
 の根方を通り、男子村と申す恐ろしい六里余の道を越し、横堀という処へ登つて来ると、
 雪がチラリ／＼降り出しました。南の方には赤城山が一面に見え、後は男子山、子持山、
 北にあたつて草津から四万の筆山、吾妻山から一面に榛名山へ続いて見える山又山
 の難所なんじよで、下は削りなせる谷にして、吾妻川あがつまがわの流も冬の中頃ゆえ水は涸れて居ります

が、名に負う急流、岩に當つて打落す水音高くごうくと物凄き有様でございます。

丹「困つた物が降出して来たなア」

かめ「申し旦那、いけませんねえ、是から北牧まで何程有りますかえ」

丹「己も初めて、幾里あるか知らん、誠に困るな、幸いに此処に草履草鞋を吊してある家があるから、腰を掛け、桐油を羽織つて往こう、それより外に仕方がない、アイ御免よ、お婆さん茶を一杯おくれ」

婆「ヒへーおかけなさんしよ、誠に悪い物が降り出しやした」

丹「これから北牧まで幾許あるのう」

婆「はい、一里些とんべいも有りやんしよ、これからは下りにはなりやんすが、道が難いでねえ、まア此処えお掛けなせい、お困りでござりやしよう」

丹「誠に困るよ、一里余では今から往かれんのう、何処か此の辺に宿屋はあるまえかの」
婆「ヒへー此間まで村上に二軒有つたが、本当の宿屋ではがんせんから、北牧の宿屋から喧ましく云われて廢めてしまつて、今はありやしねえ、どうも北牧までの間には有りやしねえ、お困りでがんしようねえ」

丹「困つた事だ、近処で泊めて貰う訳には往くまいか」

婆「そうはめえりますめえよ、どういふ訳だかお尋ねものがあるの何のと厳しくつて、只の家へ旅人を泊る事がならねいとお触になつて居りやんすから、泊る事にはなりやすめえ、貴方若し困るなら、これから半町ばかり跡へ歸ると寮が有りやすが、其の寮へ往つてお泊なんしよ、婆さまが一人居て、困る人は皆其処え往つて泊りやんすよ」

丹「其の寮は何処だえ、寮とは何だねえ」

婆「何にさ寺のこつてがんですが、別に檀家もねえ寺で、お地藏様の堂守に比丘尼の婆さまが一人居りやす」

丹「往つて頼んだら泊めてくれようか」

婆「旅人ばかりじゃがんせん、商人衆も泊りやすそうでがんすから、泊めましよう」

丹「左様か、茶代を此処に置くよ、そんなら跡へ歸つて横へ半町ばかり入るのどのう、大きにお世話で有つた」

と此の家を立出で、跡へ少々戻り、半町ばかり細道へ入つて往くと、破れ堂が有り、其の中に鼻の打欠けた醜い顔をしている石の六地藏が建つております。其の左手に家根のな門形の処を這入つて見ますと、破れ屋が有りましたから台所口から這入り、丹「御免下さいまし」

比丘「はい、何方どこなたでございます」

丹「手前は旅の者でございますが、夫婦で乳ちのみこ児を抱え、此の雪に逢い泊る処がなく困りました処、此方こちらへ来てお願い申せば泊めて下さると近辺の者に教えられて参りましたが、どうかお情なさけにお泊め下さいまし」

比丘「嘸さぞまアお困りでございましょう、お泊りなさいだが、私も年を取って居りました人様のお世話も出来ませんし、又こんな庵室の事でございましてから、食物たべものも着て寐ねるものもござんしねえし、其の身其の儘でころりとお休みなさるので宜よければ、其処に清水を笕といで引いた井戸がありますから足を洗って此処へお上りなさい、鹽たらいは台所にありますよ」

丹「はい有難うございます」

とこれから足を洗って上へ通ると、四尺に三尺の囲炉裏に真黒な自在を掛け、煤すすぶつた薬やかん罐がつるしてあります。

丹「実に悪いものが降り出しました」

比丘「さア山国ではねえ時々山から雲が吹出し、雪になるかと思うと又晴れ、晴れるかと思うと又降ると云うので山の事は頓とんと分りませんよ、お前さん方は江戸のお方のように思われますねえ」

丹「左様でございます、少々仔細が有つて田舎へまいり、此の度たび帰り掛けでございます」
 比丘「寒いから遠慮なしに粗朶そだをくべてお煖あたりなさい、何も御馳走はないから」
 丹「難ありがと有うございます」

と粗朶をくべて吹きますと、火が移り燃上る焚火たきびの光で比丘尼婆ばいあの顔を見ると、年頃五十五六ではあるが、未だでつぷり肥つたみずくしい婆さんで、無地の濃花こいはないろ色の布子ぬのこに腰衣こしころもを着けて居りますのを、おかめがきつと見て大きに驚きました。三年前沼田あとの下新田へ道連れの小平という胡麻灰ごまのはいを連れ、強談ゆすりに來たおかく婆ばいあで有りますから恟びつこり致し

かめ「お前はおかく婆さんじゃないか」

と云われおかくも驚き、

かく「これは誠にマア思い掛けない処でお目に懸りました、あなたは下新田の角右衛門様のお内儀かみさんのおかめさんでございましたか」

かめ「おかめさんもないもんだ、旦那此の婆さんがおえいを勾引かどわかした又旅またたびのおかくと
 いう悪婆あくばあでございますよ、本当に比丘尼になつて、斯こん様な処かに匿かくれているとは些ちつとも
 知らなかつた」

と云うを聞き、丹治は眼に角立かどつて、

丹「不届な奴め」

と云いながらずか／＼と詰め寄つて長物ながものへ手を掛けましたが、此あとの後は何う相成りましょう。

十二

さて丹治おかめは横堀村の庵室で図らずおかく婆ばあに逢あいましたから、丹治は刀を引付け詰め寄りますと、其の権幕さすに流石さすがの婆も悪党ながら比丘尼びくにに成つて居ります事ゆえ、逃げもせず先非せんびを悔くいて恐れ入り、手をつきまして、

かく「お腹の立ちますは重々御尤もでございりますが、どうぞ私わたくしの申す事を一通りお聞きください、私も宜い年をして何時までも止まず、親子連れで旅を稼かせぎ、悪事の数も仕抜きましたが、段々と思ひ返して見ますと、我身ながら恐しく思う処へ、悴小平はお縄なづなを戴かき、送られまして、此の七月牢死致しましたから、はアこれも悪い事をした罰ばちと、実に心から洗つたように改心致し、今まで作つた悪事の罪滅しのため頭を剃りまして、毎日托鉢をし

て歩いて此の村へまいり、慈悲ある人のお世話で此の地藏堂へ入り、堂守を致し、麦や挽ひ割きわりを戴かぶりいて漸ようく々此処に斯うやつて居り毎晩々々地藏様に向い、若い時分の懺悔を致し、お詫事をして居りまする、此処で又お前さん方にお目にかゝるのも皆みんなな悪事の報い、実に恐ろしい事でございます、南無阿弥陀仏くく、どうぞ此の円あた願たまに免じ勘忍してくださいまし」

と掌てを合せ拜むゆえ、丹治も一旦は長なが刀ものを引付けたが、又思い返し、

丹「何か貴様は全く改心して尼に成つたのか」

かめ「まあどうもまあ彼の小平あという悪党は牢死しましたかえ、それからお前も改心しようとは思えないが、本当に改心したのかえ」

かく「誠に面目次第もございませんが、嘘に頭すが剃すられましょうか、シテあなた方はこれから何所どこへお出で々ございますか、江戸へいらつしやいますなら、本街道の中山道なかせんどうぐち口へ出てはいけませんよ、お尋ねの人相書が　　つて居ますよ」

丹「え、人相書が　　つて居るとえ、それは何で」

かく「何だか貴方のお心に聞いて御覧なさいな、私わたくしは委くわしい訳は知りませんが、人相書の次第を聞いて見るに、沼田の下新田の後添のおかめさんが、御領主土岐様の御家来原丹治

という人と悪い事をし、家へ火を放けて逃げたとか云うので、お手先の人相書が　　つて居りますから、中山道へは出られません、雪でも解ける間三月頃まで此処に匿れていらつしやれば、些とはほとぼりも冷めましよう、今往くのは危いものでございます」

と云われて丹治はおかめと顔を見合せ、

丹「実は火を放ける訳ではなかったが、おかめも亭主の有る身の上ではなし、私も独身者ゆえ遂悪いことをした処、百姓共が大勢寄つてたかつて、叩き殺すと鋤鋤を持って取

巻かれ、逃処がないゆえ、実は抛なく火をかけて逃げたが、人相書が　　つて居ようと

は知らなかった、婆ア多分の礼も出来んが、両人居るだけの手当をした上に少々ぐらいはお前にも心付を致すから、三月まで此処に置いて呉れまいか、調べになど来る事はなからうか」

かく「滅多には参りませんが来ても只村役人がお布令の書付や何かを持って来るだけの事でございます、又お前さん方が泊っている内は他の者は帰してしましますから、お心置なく御緩くりと泊つていらつしやいまし」

丹「婆さん、此処へ来たのは却つて仕合せで有つた」

と云いながら懷中から十兩取り出して、

丹「これは誠に少しだが、兩人の手当にやつて置くから、米や薪でも買って貰いたい」

と婆アに渡せば、婆アは大きに悦び、

かく「御心配なさいますな、酒でも買って来ましょう」

とそれより手当を宜くして此処に三日程かく匿れて居ました。すると三日目の日暮方婆アが酒を買つてまいり、三人で酒さかもり宴をして居りますと、土間口から菅の深い三度笠を肩に掛け、し合羽に千草の股引草鞋ばきで、旅慣れた姿の男が入つて来ました。これつぎ繼立の仁助にすけという胡麻の灰でございます。

仁「お母家か」

という声を聞くより早く、おかく婆アは飛出し、突いきなり然仁助の胸倉を取り、横よこ頬つらを擲ぶち倒おす、打ぶたれて仁助は不意に驚き、

仁「お母何をするんだ」

かく「何も糞もあるものか、よくのめくと来やアがつた、手前てまえが意地を附けたばつかりで悴を牢死させるようにしやアがつて此奴こいつ」

と云いながら又打ちます。仁助は益々驚き、

仁「あゝ痛いたえよ、何なにをするんだなア」

かく「何も糞も入るものか、此処へ来い、名主へ引いて往く」

とポカく打ちながら引ずり行き、樹蔭へ来ましたから、

仁「何だ何うしたんだ」

かく「何だじやアねえよ、無闇に這入つて来てき、己が比丘尼に成っている身の上じやアないか、殊にお客の居るのを知らねえかえ」

仁「何だか突然にポカく打つから分らねえ、それに兄いが牢死したと云うのは何だ」

かく「それは出たらめだ、己の云う事を本当にする奴があるものか、お前を打つたのは泊つてる奴が二人居るから、いやと云う程苛く打たなくつちや本当にしないからだ、其の客人は原丹治とおかめという奴で、お前も知っている下新田の後家で、お梅の實の親のおかめが泊つて居るのさ、沢山金を持つてる様子だが、丹治が己を切つてしまふような権幕だったから、改心して尼に成つたと云い、兄いはお繩を受けて牢死したと云つて置いたのに、兄いの事を云つちやア化の皮が現われるじやアねえか、お前も気がきかないのう」

仁「だつて何だか知らねえからだアな、突然に驅出して来て擲り附けた時は、己ア何だと思つた」

かく「お前そうして兄いは何うした」

仁「兄いは北牧まで来ているよ」

かく「まア耳を貸しねえよ」

仁「貸して居らアな」

かく「暗くつて分らねえ」

と云いながら耳の傍へ口を寄せ、何やら暫くこそく私語り、

かく「宜いかえ」

仁「そんなら屹度だよ」

かく「どじをくまなえように、九ツ過ぎに、宜いか」

と仁助に別れ、おかく婆は顔色を変えて這入つてまいり、

かく「嘸まアお驚きでございましたらう」

丹「驚いたよ、何であんなに腹を立つたのだえ」

かく「彼奴は仁助という胡麻の灰でございませう、忤より年上だもんですから智慧を附け

て、悪い者にしたのでございます」

丹「お前も年上で随分悪党じゃないか」

かく「私の悪い事は前から知れた事ですが、彼奴のためにどじを働き、忤を牢死させるよ

うになりましたから私には敵同志で、憎い奴だと思つてゐる所へずう／＼しく這入つて来
ましたから、捨て、置けば此の村の難儀になりますから、私が名主の所へ引張つて往つた
ら、直ぐに縛られ北牧へ送られました」

丹「あんな悪党は来ない方が宜しい」

なに自分も悪党の癖に。と話しながら酒を酌み交し、おかくは丹治を酔わせようと思つ
てむやみに盃をすゝめましたからグツスリと酔いまして、もう寝ようと床に就きました頃
は雪は歇みまして、風音のみ高く聞えます。九ツ過に音のしないように、台所口から道
連の小平は覗きの手拭で面部を深く包み、三尺余の小長い柄へ革を巻いた胴金造の刀
を差し、千草の股引に脚半甲掛で、仁助も同じく忍び入り、音のせぬように一緒に上りま
したが、盗賊だから馴れて居ります。おかくの寢床へ来て声を潜め、

小「お母／＼」

かく「慌てちゃいけねえよ、先刻仁助に云つた通りにしねえ、づかれちやアいけねえよ」
仁「本堂の傍に寝ているか」

かく「本堂の前だよ」

と指図するゆえ、小平仁助の兩人は拔足して参り、丹治おかくの蒲団の間に手を差入

れましたは、柳行李の中に金を入れて、每晚おかめと丹治の間に入れて寝ているのを、おかくが知って居りますから小平に取りせましたが、其の晩に限って金を出しておかめが懐へ入れて置いた事は少しも知りませんから、小平はこれさえ盗めば宜いと心得、ずつと手の中へ入れにかゝると、原丹治が目を覚し、

丹「盗賊」

と声を立てるに驚いて小平が逃げ出す、丹治はおのれ逃がさじと枕元の刀を探ると、おかく婆ばあが昼のうち刀を隠して置きましたから有りません。其の隙ひまに横合から繼立の仁助が突いきなり然切り附けるを引外ひっぱずし、手元へ繰込んで仁助の刀を捻取ねじとり、

丹「邪魔するな」

といいながら力に任せて切附ける。天命とはいいなながら仁助は其の儘斬倒きりたおされる、是を見て小平は堪らんと庭の方へバラ／＼逃げ出すを丹治は後あとを追って往く。其の間におかめは盗賊どろぼうだと察し、怖いながらも一生懸命、小児こどもをかゝえ、表の方へ逃げ出す跡より、おかくはおかめを追いかけて行き、谷川縁べりの一筋道で樹の根に躓つまずき倒れるおかめの髻たぶざを掴んで引摺り倒し、

かく「此の阿魔め、えゝ何を悶もがくのだ、べらぼうめ、金を渡してしまえ」

かめ「母子馴合つて私の荷物を盗むのだな」

かく「元より手前の身ぐるみ剥ごうと思うからだ、丹治は殺してしまつたから…何でも手前が金を持つてるに違いないからよこしてしまえ」

と取りにかゝる、おかめは取られじと挑み争い、

かめ「人殺し〜」

と呶鳴り立てる、赤坊はオギヤア〜と泣出しましたゆえ、おかめは思わず赤坊に心を取られ、ぼつたり落しましたは紺縮緬の胴巻を見て、

かく「金だな」

と云いながら拾いにかゝるを、おかめは渡すまいと互に力を極めて引合いますと、胴巻が裂けて中からドツシリと落とるとたんに封が切れ、黄金の花が四辺へ散乱する処へ、丹治は小平の逃げるを一目散に追つて来て、此の体たらくを見て、小平の逃げるに構わず突きなり然おかく婆に一刀あびせかけると、おかくはキヤツと声を上げて倒れる其の上へ乗しかゝり、喉元を刮つている背へ小平がそつと、り、胴金造りの長いやつを抜き放し、丹治の脇腹目掛けてウーンと力に任せて深く突込まれ、丹治はウンとそっくり反つて身を顛わす所を足を踏みかけ、猶も再びごじられて其の儘息は絶えました。如何に悪の報いとは申

しながら、繼立の仁助おかくの兩人は丹治のために殺され、丹治は又小平のために殺され
るといふ、悪人同士互に修羅の責苦せめくに遭あうとは実に恐るべき事でございます。おかめは今
原丹治の殺されるのを見て逃げる心もなく、
かめ「あれ、人殺し、誰たれか助けて下さい」

と云いながら小平の足に縋すがり附くを、

小「え、邪魔するな」

と足を揚げてはたと蹴る。蹴られておかめはアツとばかりに、恐ろしく削りなせる二三
丈もある崖がけの下を流るゝ吾妻川の中へ、乳児ちのみを抱いたまゝごろくくくと転げ落ち、生しょう
死し知らずに成りました。小平は刀の血のりを死骸の着物で拭い、鞆たもとに納め、暗夜くらやみながらび
かくする黄金こがねの光を見当みあてに掻き集め、無茶苦茶に手拭たもとに包んだり袂たもとへ入れたりして、丹
治の死骸を川中へ蹴落し、又悪党でも親子の情で、おかくの屍骸を庵室の庭へ引摺ひきずつてま
いり、深く穴を掘つて、仁助の死骸と一緒に埋め、道連れみちづれの小平は多くの金を持つたまゝ
何処いずこへか逐電してしまいました。

お話替つて山口屋善右衛門の家うちでは、多助が毎日種いろく々な物を拾つて粗末あつちにならぬよう
に貯めて置きます。斯かくて其の年も暮れて翌年になりますと、一日あるひの事で、番頭の和平が、

和「旦那様どうか何を買って戴きたいものですな、納屋穿きの藁草履を」

善「はい、藁草履は最う残らず切れまじかえ」

和「へい穿きようが暴うございますし、殊に此の節は働きの多いので、鼻緒が切れると直ぐに川の中へ投げ込んでしまいますので困ります、沢山入りますから、どうか些と沢山買った方がおために宜しかろうと思えますから、百足もお買いなすって下さい」

善「そうかい、それじゃア入るだけ買いなさい」

と話をしているのを、傍で多助が聞いて居りまして、

多「番頭さん、番頭さん」

和「多助かえ、なんだ」

多「只今これで聞きましたら藁草履がお入用だそうでんすね」

善「はい入用だよ」

多「藁草履が入用なら私が買って貰うべし」

善「お前藁草履を持っているかえ」

多「は、些とべし藁草履を貯めやした」

善「そうか、沢山もあるめいが、貯っただけ買ってやろう」

多「どうかお買いなすってください、藁草履は一足幾許しやすえ」

善「そうさ、一足十二文だなア」

多「十二文とすると、河岸揚の職人が穿いたり家うちのものが穿いたりするから、平均ならし一日三十足宛すつ入りやすが、其の中うち皆みななが鼻緒を切ると棧橋から川の中へ投ほうり込んでしまうから、私わしい竹たけの先へ釘を打つて、それを引揚げて置いて、每晚わし私が鼻緒をたつて、ギユウツと真まんなか中なかを締めて置いた、それに水の中へ入はいつたんだから先せんより丈夫になつて居りやす」

善「感心なものだなア、どうだ番頭」

多「番頭さん、貴方あんたは算盤そろばんを取つて店あずかを預あずかるものだから聞きやすが、日に十二文の草履が五足で幾許いくらになりやす」

和「丁度六十文になるのう」

多「ハア六十になれば年ねん分ぶんには大でえ事けになりやすが、一ヶ月で幾許いくらになりやす」といわれて番頭は算盤を取つて、

和「え、こうツと、日に五足ずつで一ヶ月に百五十足になるのさ」

多「その錢ぜには幾許いくらだアな」

和「え、と一貫八百七十二文サ」

多「一年で何足になりやす」

和「うるさいのう、こうと、千八百足になるのさ」

多「その金高はいくらだね」

和「うるさいのう、こうと、金三両一分二朱と五百六十文になるのさ」

多「目がいって居やすか」

和「知れた事よ」

多「それでは十年ではいくらに成りやす」

和「うるさいのう、え、こうツと、おや、旦那様大きなものでございませ、一万八千足になりやす」

多「その金高はえ」

和「うるさいの、え、こうツと、大きなものですなア、金三十四両二分と七百四十八文に成りますが、旦那様大きなものですなア、微塵積ちりつて山となるの譬たとえの通り、十年で是程になります」

多「はア三十四両二分と七百四十八文あれば、国へ帰けえつて家うちを立てる足しになりやすな」
和「持つて来なさい、沢山もあるまい、百足も貯ったか」

と思うと、多助が納屋から横庭へ運んで山の如くに積み上げました。

多「おとし昨年からで随分貯った」

善「大變貯めたなア、幾足ある」

多「はア二年貯めたゞから勘定はしねえが三千足ぞくもあんべいかな」

善「これは驚いた、どうだい番頭、感心なものだなア」

和「驚きましたなア、家うちでも草履の入る事は大變ですなア」

善「よし、それだけは新しい草履を買った積りで手前の丹誠を買って遣ろうが、金は私わしが預るよ、これから手帳を拵えて、一々付けて置きましょう、今日が預り始めだ」

多「金は入らねえ、先まずこれだけは余所よその物を拾ったのじゃねえ、家うちの物を拾ったのだから、これは旦那様へ上げべえ、私わしが斯うして人に見せれば些ちつとは出方でかたのものも草履を大でえじ事にしべえと思つて、お手本に貯めたので、これは私わしが錢貰うべえと思つて貯めたのじゃアねい、まだそれべいじゃアねい、大でかく御奉公をしてある事があるが、それは最もう十年も経つてから見せべい」

善「不思議な男だのう、なんと番頭感心なものじゃアないか」

和「驚きましたなア」

多「番頭さんも目前めざきべいの勘定で心の勘定がねいから、何が幾許いくら入るか知りやアしねい、店を預かる番頭さんだから確しつかりしなんしよ」
和「はい、かしこま畏りました」

と云うので番頭も大おおきに気が注つぎ、主人も感服致し、これから追々多助が他の人に真似の出来ぬ事をいたしますお話は、一息つきまして申上げます。

十三

鹽原多助は計らずも山口屋善右衛門に助けられ、此の家に奉公をいたして居りましたが、多助の行いの実じつめい明めいなのに、主人は素もとより奉公人一同が感心致しました。其の多助の氣の利くことは、主人の用向ばかりでなく、番頭から小僧うぢから、家へ出入ではいる者一同から、おきんどんにまでも宜く勤めますが、決しておべつかでするのではなく、信しんじつ実に致しますので、番頭が肩が張つたと云えば直すぐに後うしろへ　　つ打たきます。エヘンと咳払いをすれば直ぐに灰吹を持って往ゆく。風を引いたというと直ぐにお医者を呼んで来る。少し病氣が重いと思うと直ぐに早桶を買って来る。まさかそんな事もありますまいけれども、多助は少しも

隙すきがありませんで稼ぎますのは、追々金を貯めて国へ帰り、養家ようかへ恩返しをしようとするので、後には地面の二十四ヶ所も持つようになりますが、そうなりますには後うしろ楯だてと云うものがなければなりません、商人あきんどが大きくなるには、資本もとでを貸してくれる金主きんしゅと云う者がなければ大商人おおあきんどにはなれませんが、茲こゝに下野国しもつけのくに安蘇郡あそごおり飛騨ひこまむら村に吉田八右衛門という人が、後に多助の荷主に相成りますが、此の人が三十五歳になるまで江戸へ出た事ありませんのは、此の人の親父おやじ八左衛門は六十以上の年でございしますが、総て江戸の取引先きの事を致して居りますから、八右衛門は江戸へ出てまいりませんでした、親八左衛門が、不図病氣付きましたことによって、八右衛門が始めて江戸へ出て参りました。頃は宝暦十二年十二月の十五日、深川八幡の年の市で、其の頃は繁昌致しましたもので、余り込み合うから八右衛門は田舎者の事ですから恐れまして、高橋たかばしを渡つて深川元町へ出て、猿子橋さるこばしの傍に濱田という料理屋があります。其の夜よは雪がチラ／＼降出し真闇まつくらですから、外ほかに余り大勢あいきやくの合あひ客きやくはありません様子でありますゆえ、濱田へ上つて見ますと、衝立ついたてを立て、彼方あちらにも此方こちらにもお客が居ります。八右衛門が御膳ごぜんを食べて居りますと、足利に猿田やえんだという処があつて、其処そこに早川藤助はやかわとうすけという出船でふねや宿どがあります。丁度其の主人が居合せまして、思い掛けないから八右衛門の傍へやつて

参りまして、

藤「誠に暫くでございました、八右衛門様じゃアございませんかえ」

八「誠にこれは何うも久しぶりで逢いました、藤助どんでがんすか、お尋ねすべいと思つたが、つい無沙汰しましたハア」

藤「能くお出でになりました、何の御用で」

八「ハア私もどうか江戸という所へ来てえと思つて居たが、親父が達者で江戸の取引は己がするから汝は家にいろというから、家にべえ居りやしたが、大した事でもありませんが、親父が塩梅が悪いので手前往つて仕切を取つて来うというので、仕切を取りに來ましたよ、何んに取引先きは神田佐久間町の善右衛門が一番大えから、彼処へ往つて一晩や二晩は泊つて来てもし、からというが、親父が塩梅が悪いからハア、早く帰るべいと思つてハア」

藤「はい、山口屋善右衛門は大きくつて荷主を大事にするのは、あの位な家は無い、あの親父も中々荷主を大事にするが、忤は善太郎と云つて年は若いが、宜く客を大事にするし、それにまた、番頭の和平が客を大事にする、第一彼処の家は饗応が違つてハア」

八「そうだつて、親父に聞いて居りやしたが、私の顔を知らねいから向うで金を渡さねい

といけねいが、そんな事はあるめいかねー」

藤「なアにそんな事はねえ、貴方は始めてのことだから親父さまが往くより却つて大事にするだんべいよ」

八「親父も、手前は始めて往くものだから、これを持って往くが、いゝといふので、受取証文を親父が寢床で書いて、手紙と此の八十両の受取証文を持って来やんしたから、多分渡すべいと思つて居りやす」

藤「そりやア大丈夫渡しやす、これから佐久間町へ往くには大橋を渡つて浜町へ出れば宜うが、私（わし）は花川戸の炭問屋へ、些（ちつ）とべい預けたものがあつて寄らなければならぬから、大橋まで一緒に参りましょう」

と昔の田舎の衆は大声で話を致したものでございます。是から勘定を済ませ、兩人連立つて此処を出て、大橋の袂で別れまして、早川藤助はお船倉の方へまいり、八右衛門は大橋を渡つて彼是甘間ばかり参りますと、バラ／＼／＼／＼と駈けて来たものがありました。が、其の頃は商人（あきんど）人は皆雪駄を穿いて居りまして、鱈（どじょう）の鼻緒（くた）の下りの雪駄で駈けて来まして、前へのめる途端に八右衛門の肋（あばら）骨（ほね）へ彼の男（か）が頭（かぶ）を打付けましたから、八右衛門は驚いたのなんと申しまして、其の男も驚きまして、

男「何とも申訳がありませんが、少し怪しい奴が後から追かけて参りまして、少々貯えもありますから、大橋の央なかばまで遁にげてまいりますと、貴方あなたのお姿が見えますから、追付おいつこうと思つて駈けてまいりますと、貴方に突当りまして誠に申訳がありません、御免なすつて下さい、何処かへ当りましたかな、確しつりなさい〜」

八「ア、痛いてい、痛いてい、あんなはまア怪我といえは仕方がないが、人の横よこ腹つばらへ石を打ぶつ附けたかなア」

男「石じやありません、転ぶ拍子につい頭が当りましたので」

八「ひどい石頭だったなア、あ、痛いてい、そんならいゝが、身体が痺れて立てない」

男「誠に申訳がありません、此処は往来でお話が出来ません、何処か茶屋へでも参りましょう、此処に持合せた薬もありますから」

八「あ、痛いてい、立てない」

男「そんなら私わたくしがおおぶつて上げましょう」

と彼かの男も怪我とは云いながら氣の毒に思ひまして、負おぶうようにして橋の袂の茶屋へ連れて往ゆきました。

女「入らっしゃい〜〜」

男「どうか姉さん、少し加減の悪い方がお出になつたから奥を貸しておくれ」

女「へえ貴方お加減がお悪いのですか、嘸お困りでございましょう、お草鞋でございませうか、足を拭いて上げましょう」

などと申しますと、彼の店風の人が八右衛門の手を取つて座敷へ上げまして、

男「誠に申訳がありません」

八「お前さんかい」

と見ますと、木綿物ではございますが、さっぱりした着物に小倉の帯を締め、細かい縞の前掛を掛けて居りまして、色の浅黒い店風の人です。

八「誠に貴方は何ういう事で盗賊に逢いましたか」

男「私は横山町三丁目の播摩屋という袋物屋でございます、深川までお払いを取りに参りまして、百金受取つて帰りましたから、成るだけ賑やかな処を通つて来ますと、いやな風体な奴が後から附けて来ましたから、盗賊だと思ひましたゆえ、逃げ出す途端に、貴方に打かりまして、何とも申訳がありません、これに有合せました薬を湯で溶きましたから召上つて下さい」

八「これは誠に有難う、怪我とあれば仕方がないが、金を持つて夜歩かねえがいよ、私

やア田舎者で、始めて江戸へ出て来たんで、なアに医者にも及ぶめいが、横つ腹が突張つて仕様がねい」

女「貴方些とお横におなりなさい」

男「姉さん此の近処にお医者様はありませんかね」

女「誠にどうも此の近処にはお医者様はございません、浜町まで参らなければございません」

男「そうかい、枕を貸して」

と八右衛門を寝かしまして彼の男が側で擦つて居りますうちに、八右衛門は宜い心持になりましたから、すやくと寐まして、暫く経つて目が覚めて見ますと彼の男は居りませんゆえ、起上つて手水に往こうと思つて立てません、それに舌がつり上つて口もきかれません。

八「はせな、身体が痺れて歩けねい、立す事が出来ねい、ホリヤ困つさな、女中衆く」
と少しも舌が　りません。

女「何うかなさいましたか」

八「今ほここにいた人は如何すさな」

女「あの方はお医者様を探して来るから少し貴方を寐かしておいて呉れと仰しやってお出でになりました」

八「はせな、己ア此処へおいさ包すくみの脇わしぎ差さぎのはぞうししさな」

女「あの包や何かを此処へ置いてはいけないからと云つて、お連れの方がお脚半までお持ちなすつてお出かけになりました」

八「そらア盗賊ぞろぼうざア」

女「大きな声をなすつちやアいけませんよ」

八「盗賊ぞろぼうざア盗賊野郎ぞろぼうやろうくくく、早く駕籠を呼びにやつて呉れ」

と八右衛門は騒いで居ります。又山口屋善右衛門の宅うちではそんな事は少しも知りません。其の頃お商人あきんど方では夜の四ツ時になれば戸を締めてしまします、店に小僧が手習をして居ります、此方こちらには番頭が帳ちよう合あひを致して居りますと、土間に筵を敷いて頻りに草履を拵えて居りますのは多助でございます。

男「へい御免下さい御免下さい」

小「何方どなたさま様ですなア」

男「少し御免下さい」

と云うから小僧が戸を明けると這入つて来た男は、半合羽はんがっばに千草の股引に草鞋がけで、一本お太刀たちを差して、手には小包を提げたまゝ、

男「はい御免なさい」

小「何方様どちゆうさまからお出でゞございます」

男「えー私わたくしは下野国安蘇郡飛駒村の炭荷主八右衛門と申すものでございます」

番「はい〜此方こちらへ〜」

八「毎度親父ばかり出て居りまして、私わしが此方こちらへ参りましたのは初めてでございますが、親父が病気で寝て居りやして、寢床で証文と手紙を書いて、私わしが代だいに來ましたが、此方こちらでは何方どなたもお変りはありませんか」

番「えゝお噂には承わつて居りますが、宜くどうも貴方がお出向でむきでございませぬ、毎度主人と貴方のお噂ばかり致して居りました、まアお上んなさい」

八「上つては居られません、平常ふだんなら宜いが、親父が煩わづらつて居りますから、直ぐに扇橋まで往つて船へ乗つて帰る積りでござえますから、どうかこれへ証文を持ってまいりましたから、八十金お渡しを願います、慥たしかに三貫目炭を送つたからそれ丈の代を戴いて、船賃は後あとで宜しゆうございますから、八十金はどうか只今願います」

番「へい〜」

と云いながら手紙を読上げて見ますと、金を八十兩悴に渡して呉れるとあり、受取証文を見ると八左衛門の書いたのに違いなから安心して、

番「若旦那様〜、予お噂の八右衛門様がお出でになりました、え、これは私共の若主人で、今晚は主人は居りませんから代を致しますので」

八「ハアこれはどうも予て親父から承わつて居りましたが、好い若旦那で、あんたが善太郎様でございますか、番頭どんは和平さまと仰しやいますか、へえ何うか此の後ともお心安く願います、それではどうか金子の処をお渡し願います」

番「それでは、毎でも砂糖と塩引をお歳暮に上げるんですが、貴方お持ち下さいますか、もし御迷惑なら小僧に持たして上げてても宜しゅうございますが、何しろ是非御一泊を願ひとうございますが、お父様が御病気の事では拠ろございませんで、へえ」

八「へえ結構でございます、田舎では塩引などは結構でございますから扇橋まで持つて参りましょう」

番「それでは八十金差上げて、一貫二百文のお船賃は後に致しまして」

と云いながら金の勘定をして居りまして、今渡そうとすると、

多「番頭さんく、金を渡すのは容易に渡さねえ方がいゝ、顔を知ってる人じゃアねいし、初めて来た人だから、旦那が帰つて来て話をしてから渡した方が宜うがなす」

番「余計な事を云つてる、お前の知つてる事じゃアねいよ」

多「後の方から口を出してはすみませんが、貴方は飛駒村の八右衛門さんに違えありませんかえ」

八「はい私はそれに相違ねえが、深くお問糺しをなさるのは私を疑ぐんなさるのかえ」

多「それでも私ア斯うやつて暗え所で言葉を掛けちやア済まねえが、あんたは本当の吉田八右衛門様に違えねえかな」

八「本当の嘘のというのは私を疑ぐるのかえ、こゝに親父の手紙を持って来たのが確かな証拠なのに、何をお疑ぐりなさいますな」

多「本当なら私が少し承わりてい事があります」

番「これく、何を云う、えゝこれは山出しで何も解りませんから、どうかお腹をお立ちなさらないで」

多「まア番頭さん黙つておいでなせえ、私聞かねいければならねい事があるが、もし八右衛門様とやら、あんたは下野言葉でねえから私が聞くだが、どうも貴方は下野の者じゃア

がんですめい」

八「私は下野の飛駒村の者に相違ねえが、お前は何をいうのだ」

多「なアにお前さんの言葉は下野も上州も武州も方々の言葉が交つて居るようだがんす」

番「お前何を云うのだ、黙つていろくくく」

多「それじゃア番頭さん、私が暗い処で何か云つていても分らねいから、其処へ出やんしよう、これ八右衛門さん、アはくくく、どうもはア騙すことは出来ねえもんだ、久しぶりで逢つたが、お前己を忘れたかい、お前は道連の小平という胡麻の灰だっけなア」

小「いよウ」

と小平は恟り致し、流石の悪人も後へ下りました。

多「嘘は吐けねえものだなア、小平ハア斯う知れてしまったから、己は胡麻の灰だと云つて帰つた方が宜かんべい、番頭さん、此奴は道連の小平という胡麻の灰でがんすよ」

番「いえー胡麻の灰かい、それだから夜は戸を明けない方が宜いというのだ、大變な騒ぎが出来た」

多「アはくくく、既に八十両という大金を奪られる処だった、去年汝が己に刃物突付けて、既のことで殺される処を助かつて此処にいるだが、汝はまた悪事が止まねえのか」

小「妙な処で逢つたなア、そうして貴様はどういう訳で此処の家うちにいるのだ」

多「どうして居るって、己おらア金を貯めて国へ帰けえるべいと思つて、此処うちな家で稼いでいる処へ汝われが来たから分つたのよ」

小「エーおい番頭さん、私わっちア道連の小平という胡麻の灰へえで、実は少し訳があつて此の書付が手に入へつたから、八十両まんまと騙かたり取ろうと思つた処が、山出しの多助の野郎に見み頭あわされ、化ばけの皮かわが頭あわられてしまつたから、此の儘ままじゃア帰けえれねえ、さア此の大きな家台やていぼ骨ねから突き出され、ば本望だ、さア突出して貰おう」

番「突き出すって、どうもこりやア困つた」

と番頭は頻りに心配致して居ります処へ、此の頃は只今とは違ひまして人力がございませんから、駕籠で大急ぎに参りまして、トンく〜トンく〜「ちよつと此処をお明けなすつて下さい」と今度は本當の吉田八右衛門という人が、涎よだれをたら〜滴たらし這入つてまいり、只見とれば先程さつきの奴やつが自分の形装みなりで居りますから、八右衛門は突いきなり然此の野郎と云いながら、一生懸命に這上がつて、小平の胸ぐらを掴んで放しません。

八「此の野郎呆れた野郎だ、己おらが身体利かねえようにして、己おらが荷物から脇差から大で事いな書付まで盗みやがった、盗賊どろぼう々々、此の野郎々々」

小「静かにしろえ」

と云いながら八右衛門の手を逆さかに捻ねじつて其処そこへ投げ付け、草鞋穿きの儘でトツサリと店先へ上り、胡坐あぐらをかきまして、

小「やい百姓、実は己おらア小平という胡摩のへえだ、上州ひしごしで人殺から足がつき、居られねえから其の場をふけ、猿田船やえんだぶねへ乗つて江戸へ着き、先刻濱田で飯を食いながら聞いていると、手前てめえが此の山口屋善右衛門へ八十両の為換かわせを取りに来たという事を聞いちやア遁のがさねえ地獄耳、手前てめえの跡を付けて来て、転んだ振りで荒稼あらいぎ、頭突ずつきといつて横腹よこつばらを頭で打つて息の音ねとめ、お気の毒だと介抱して吞ませた薬は麻痺しびれぐすり薬だ、手前てめえの身体がきかねえうちに衣類きものから懐中物まで引攫ひっさらつて遁にげるのを、盗人仲間どろぼうなかまで頭突ずつきというのだ、あの時攫さらつた書付からまんまと首尾よく八十両、いゝ正月をしようと思つた所が、打つて違つて山出しの多助の野郎に見頭みあちわされたから、もう破れかぶれだ、さア突き出せ〜」

と云うので店の者は大きに驚おどろき、頭かしらを呼びにやるやら何やら騒さわぎ致しますけれども、小平は鉄挺てこでも動きませんので、持て余している所へ帰つて来たのは主人善右衛門で、これより小平を奥へ連れてまいり、意見を致しますお話は次回までお預りに致しましょう。

十四

山口屋善右衛門の宅うちでは、道連と綽号あだなをされました胡麻の灰小平が強談ゆすりに参りましたが、只今では強談かたり騙かたをする者も悪才に長たけて居りました、種々いろく巧者になりましたが、其の頃は強談かたりをする者あきゆうどが商人の店先へまいり、サア打たき殺せと云つてどっさり坐り込みますと、表へ黒山のように人が立ちまして外聞が悪いから、余儀なく十か廿の金を持たして帰したものです、只今ではそういう事は出来ません、直ぐに巡おまわり査さがまいりまして、ハアこりやア分署へ参れ、なんと申しますから中々出来ませんが、昔は大家程たいけこういう事をされると困ったもので、山口屋善右衛門は宅たくへ帰つて見ると此の騒さわぎですから、直ぐに医者を呼びにやりまして八右衛門を療治して貰い、表から此様こんな所を視のぞき込まれてはならんからと云うので、奥へ通そうと申しても小平は何うしても動きませんでした、小平も段々考えて見るに、此処で言う事を聞かなければ為ために悪いと思ひまして、奥の六畳の座敷へ通りました。すると主人善右衛門を始め多助も番頭もまいりまして、善「これは小平さんとか、始めてお目にかゝりましたが、私わしも今帰つたばかりで委くわしい事は知りませんが、お前さんは私共の大事な荷主に毒薬を服のませ、身体を利くわなくして証文

を持つて騙りをしようと思つて店へ来た処が、宅の奉公人の多助がお前を知つていて化の皮が頭われたから突出して呉れると云うそうだが、悪党の方には何ういう法があるか知らないが、宅では縄付を出す事は好まない、多助が見頭わしたのは腹も立つだろうが、そんな事を云つても仕様がなから、私が得心の上で廿両上げよう、騙つたと云えばお前の罪も重くなり、私も心持が悪いから此の廿両を持つて歸つておくれ、殊に暮ではあるしするから、これで辛抱しておくんなさい」

小「へい、有難うございやす、これはお初うにお目に懸りました、私ア小平という胡麻の灰でございやす、先刻番頭さんという通り、八右衛門という荷主が山口屋へ為換を取りに往くと云うから、少しでもそう云う事を聞いちやア打捨つちやア置けねいから、暴つぽい仕事だが頭で突いて毒を服ませ、生空を遣つて此方の店へ来た所が、山出しの多助の畜生に見頭わされた上からは、私ア縄にかゝつて出るのは承知さ、私がどじを組んだつて外とは違い、山口屋善右衛門さんという立派な家だから、廿や三十の目腐れ金を貰つて歸つたと云つちやア盗人仲間へ恥辱だ、さアどうか突出して下せい、私が突出され、ばお前さんには遺恨はねえが、多助手前を抱いて往つて臭い飯を喰わせるからそう思え」

多「何処へ抱いて往くんだ」

小「分らねえ奴だ、牢へ連れて往くんだ」

多「フウン、牢へ往くのを抱いて往くというのか、手前これで黙って帰れば、旦那が金を下さるから黙って帰った方がよかんべえぜ」

小「黙っている、此の才槌野郎め、引込んで居やアがれ」

善「まあ〜これは山出しで何にも知らない者だから、そんなに腹を立たないで帰っておくれな」

小「いんや帰らねえツたら帰られねえや、どうせ細った素首だから三尺高い処へ板付になつて、小塚原か鈴ヶ森へ曝された時に、あゝ、好い気味だと云つて笑つて下せえ、其の代りに多助を抱いて往かなくつちやア腹が癒えねえのだ」

多「これ小平、それじゃア是ほど旦那様が事を分けて云つても手前は肯かねえのか」

小「糞でも喰え」

多「旦那様、誠に相済みません、貴方に迷惑を掛けますめえと思つてるに、どう云つても聞かねえ、おい小平、旦那がお慈悲で二十両と云う金を呉れべいというに、それえ聞かねえと云わば仕様がねえが、これ小平、汝は情ねい人だなア、私から事を起して旦那様に御迷惑をかけては済まねえし、汝を突出して此の家に難儀の掛るのを見ては居られねえから、

己おれは悪い事をした覚えはねえが、連れて往いくなら勝手にしろ、汝われの先へ立つて繩にかゝるべえ、殺すなら殺せだが、汝われ幾れら氣を揉んで己おれを殺すべえとしても、人間と云うものは命の尽きねえ中うちは死ぬ氣遣いのねえものだ、寿命が尽きたら幾ら助かりてえと思つてもだめだ、ハアどんな火の中水の中でも定じょうみよう命の有るうちは死なねえもんだから、殺すなら殺すともどうとも勝手にしたが、だがマアよく考えて見ろ、実に悪党と云うものは人の慈悲なまげも弁わきまねえと見えて、そんな横つ倒しな事を云つて、此の宅うちで斯う云えば彼あア云つて困らせる、己おら汝われを悪にくまねえが、其の心根が如何にも不憫だアから一と通りの事をいうだ、汝われえ此こ処けえ八十両べえの金を強談ゆすりに来るため、大事の荷主様に毒を服のましてよ、世界の人の身体を利かなくなるようにして、そうして汝われえ種いっく々な物を盗み、脇差こわいろい差し、風呂敷脊負しよつて脚半を掛け、草鞋穿きになつて此こ処けへ来て、田舎者の仮こわいろ声を遣つて取つた所たつが只たつた八十両べえの金、それに引替ひえ己おら旦おら那樣などは座蒲団の上に坐つて煙管を啣くわえ、はてなアと一つ首ひねを捻ひね考くえると、直すくに五万や八万の金を儲ける事を御存じでいらッしやる、旦おら那樣に比べれば汝われが稼わぎは誠に小せえ事で、此こ処いな台所の流しの下より未だ小せえ、旦おら那樣が悪い奴に二十両の金を呉れべいという心は大したものだ、また汝われが取り損あなつた金は只たつた八十両、何とまア余あり小せえ稼わぎで氣の毒だよ、己おら此こ処いな宅うちに奉公ほうこうに来て、今

では斯うやつて草鞋を造り草履を直し、大騒ぎいやつて小せえ事をして居るが、今に己が
大くなれば五万や十万の身代になるべいと思つて御奉公しているに、汝え壯え年して稼ぎ
盛りで有りながら、只た八十兩べいの金を取り、牢に入つて命を落すかと思えば如何にも
気の毒で、其の心が虫よりも小せえから己ア 愍 然でなんねえから意見を云うだ、え、
か、そんなに急いで獄門になりたがらねえで、且那樣が二十兩下されれば幸えだアから、頭
でも剃落かして出家になるか、又は堅氣になり、誠の商いでもするなれば、今までした悪
事も自然に消え、豊の上で死なれるようになるがどうだ、此処で一つ二十兩の金え貰い、
改心して真の人間にならねえか、汝工母親は又旅のおかくと云つて、五十の坂を越して
居ながら、汝と一緒に己ア家へ強談に來たり、おえいを攫つたりして己宜く知つてる、汝
母親は悪党だが、親父はどうだか知んねえが、大方女房のおかくは悪党で、又汝ような子
が出来たから離縁をせねえばなんねいという処で、悪党は悪党連れだから、おかくが汝工
連れて出たかも知んねえが、其の時は親父が善人ならば、別れた後の心持は何うだえ、あ、
彼奴が真人間ならば己心配はねえものを、悪党の子が出来たから仕方なく追出したが、ど
うか堅氣になつてくんろ、悪い心を廃め、真人間になれば宜い、今一度逢いていもんだと、
親父が達者でいれば汝が事は片時も心に忘れる氣遣いのねえもんだから、親父に対して

誠に己おらア氣の毒に思うだ、己おらア汝を悪むじやねえ、愍かわい然そうだと思ふから悪い事は止めろや、これ堅氣に成れや、大騒ぎやつて首を投げ出して取つた所が高が八十兩べえの小さな金、旦那様のように一時じに二万も三万も儲ける事を御存じの人に比べれば、あんまり小せえ考えだアから止めろや、やア」

と信実心から説き諭され、悪人ながら小平は肝きもに感じましたか、黙然として腕を組み、俯うつむいて何か考えて居りましたが、暫くして首を擡もたげ、多助の顔を熟つく々／＼見まして、

小「やい多助、此の野郎は妙な事をいう、此の畜生、申し旦那え、成程只今山出しの多助が云う通り、斯うやつて草鞋わらじ穿きになり田舎者の仮色こわいろを遣つかい、大勢を騒がし、首尾よく往つた所が唯ただた八十兩、成程是れは小せえ、それに引換え旦那などは座蒲団の上で、啣くわえ煙管をしながら、一つ首を捻ひねれば五千も八千も儲かるといふ其の人に比べれば、虫より小せいと云えば成程小せい、それに此の野郎のいう通り、母おふくろ親わちちは私の餓鬼の時分離縁になり、私わちちを連れて出て行く時、親父は腕を組んで、ぼろりぼろり泣きながら、己の忤こんに斯こん様な悪党が出来るとは何たる因果だろう、此の餓鬼が真人間ならばと云いながら、下を俯うつむいていたが、今まで斯こん様なことは誰たれにも云わなかつたが、此の野郎は妙な事を知つて、些ちつと異かわつていらア此こん畜ちき生しょう」

多「何が異つてる、己ア方で異つてるじゃねえ、汝え方の根性が異つてるもんだアから、
当^{あたりめえ}然^ぜの正直なことを云つても汝^{われ}がには違つてゐるやうに聞えるのだ、己^{おら}ア真直^{まっすぐ}の事を
云うだよ」

小「可笑しい畜生だ、種々な事を云やアがる、申し旦那え、私^{わっち}ア二十両は入りやせ
ん、此奴^{こいつ}の前へ対しても金子を貰つちやアきまりが悪くつて歸^{けえ}られやせん、旦那^{わっち}え私は何
だか変な心持になつて強い事も云えなくなつた」

多「駄目だなア、さつさと歸^{けえ}れ、だが、折角金え呉れべいと仰しやるこんだから、戴いて
往^いくが宜い」

小「なに金は入らねえが、旦那え、どうか裏口から密^{そつ}と出して下せえ」

と小平は悄^{しお}れ果てゝ、衣類から脇差まで残らず置き、こそ〜と裏口から出て往^ゆきました。
後^{あと}で皆々^{あつち}ほつと息を吐^つき安心致し、尚^なお荷主^な八右衛門に手当を致しますと、二日程経
ちまする中^{うち}に大きに口もきけるようになりました。

番頭「やアお芽出とうございました」

八「どうもハア何とも始めて参り、斯ういう御厄介にならうとは心得やせん事で、併^{しか}しお
蔭^{かげ}さまで命には別条ねえで、大きに有難うがんとした 国の方へは仔細を書いて二三日後^{にさんちあわく}れ

て帰ると書面を出しやんしたから、安心もしべいが、此方こちらで危ねえ事、金を取られようとしたが、多助どんとやらの意見で泥坊もたまげ、悄しおれ果てゝ帰けえつたは偉えれえ奉公人だねえ、私わしたまげやした、年いまだ若いわけがねえ」

主人「誠に妙な奴で、時々変なことを申します」

八「兎も角も多助どんをお呼びなすつて下せえ、私わしもお目に懸かつて置おきていから」

善「多助やゝ、一寸ちよつと来な」

多「へい、なんでがんす」

八「やア多助どん、お前めえ実に感心な人だ、泥坊に意見をするのを私わし傍わで聞いて居ゐやしたが、お前めえが此の泥坊の馬鹿野郎と云うから、手向いでもするかと心配しんぱいしていると、泥坊が首傾くびがたげて、変な事をいう奴だアと云つて、たまげて帰けえつたが、誠に妙な人だ、お前めえのお蔭かげで八十両の金子きんすわ取られねえで、誠に有ありがて難がたい」

と云いながら金子を紙に包み、

八「たんとではねえが、どうか此の二十両取つて置いて呉われ、私わし江戸見物ちつ些と長くすれば、小遣こづかいになつてしまうのだが、余あまり偉えれえ奉公人で、襤褸ぼろを被きて炭を担かいでる人には珍めづらしいから、どうかこれを取つて置いてお呉わんなせえ」

多「宜しゆうございやす、入りやしねえ」

八「少しばかりだが、年季が明けて国へ歸る時の足にもなろうから取つて置いてくれ」

善「有難い事で、大金だが折角の思召だから戴いて置くがよかろう」

多「有難うがんですが、私い金戴きますめえ」

八「そんな事を云わずに取つておけ」

多「何も貴方に仕た事じやねえから、私戴きやせん、此処な家の旦那様には命い助けられ、

大恩を受けた御主人様と大切に奉公して居りやす所へ、間違が出来やした故、家の事を家

の奉公人がするのは当然でがんですから、どうか二十両という金を請取る訳はがんしね

えから貰われやしねえ、駄目でござりやす」

善「折角仰しやる事だから戴いて置きなよ」

多「八右衛門様、あんた私に礼をしてえと云うが、主人へ義理に斯う遣つてお出しなんす

か、又真心から私に呉れべいとするかえ」

八「誠に困りやすが、何もサ見えも糸瓜もない、唯お前の心持が如何にも感心だから出す

のだから、マア真実の心から上げるのだ」

多「そんなら何うか金で呉れねえで、お願いが有りますが、叶えて下せえやししようか」

八「私わしに出来る事なら叶えて遣りやしよう」

多「そんなじゃアいけねえ、慥たしかに叶えてやる、何でも聞くと返答をぶちなさい」

善「そんな事をいう奴があるものか、併しかし八右衛門さん、此奴こいつの事ですからさしたる事でも有りますまいから、どうぞ願ねがいを叶えてやって下さいましな」

八「ようがんです、何でも叶えて遣りましょう」

多「あゝ有難ありがたえ……、此家こゝへ奉公して、外に何にも覚えたことはねえが、行く／＼十年も経ち、年季が明けて炭屋の店でも開くような事が有つたらば、其の時貴所あんたがた方から千両の荷を送つておくんなせい」

八「えゝ千両え、魂消たまげたねえ」

多「魂消ねえでも宜いい、唯貰うんじやがんせんが、あんたの方から千両だけの荷をマア先へ送つてくれゝば、私わしその荷を売りこなして、あんたの方かねエへ金入かねエれるだ、金入かねエれゝば又荷にい送つて呉れる訳にするだから、あんたも仲間と得意先が一軒殖ふえ、私わしも儲けを見るだアから、お互に得の有る事だから、屹度きつと送つて下せえ」

八「よし其の時は屹度千両の荷を送つてやろう」

多「それじゃア若もし荷送にいる事が間違つたら、千両の金を只遣ろうという書付を一本下せえ」

八「これは面白い、書いて呉れべし」

と直ぐに硯箱を取寄せ、すら／＼と認め、店出しの折には必ず千両の荷を送ろうという証文を書き、印形を捺して多助に渡す。多助は大きに悦び、主人善右衛門に預け置きまして、八右衛門も国元へ帰りました。是れから多助は主人大事と奉公をいたして居りましたが、山口屋善右衛門方は毎度申上げまする通り、名に負う大家の事でございませうから、お大名様方にもお出入が沢山ございまして、それが為めに奉公人も多人数召使ひ、又出方車力なども多分に河岸へ参りますゆえ、台所には始終膳が二十人前ぐらいは出し放しになつて居り、出入のものが来ては食事を致します。多助は此の家に足掛け四年の間奉公して居り、宝暦十三年の六月改元あつて、明和元年と相成り、其の年も暮れ、翌年明和二年十一月廿六日の事でございませう。多助は毎日／＼炭を車に積み、青山信濃殿町の青山因幡守様のお邸へ往きまするに、四谷へ来て押原横町に車を待たせ置き、彼処から信濃殿町まで車力が炭を担いでまいります。此処に信濃守様のお邸がありましたから此の辺を信濃殿町と申しますので、多助は此の日大きに草臥れました故、ちと遅く暮れかゝつた時分に帰つて参り、

多「へい只今帰りました」

主「大分遅かったのう」

多「大きに遅くなりやんした」

善「何処へか寄り道でもしていたか」

多「もし旦那様お願いがございます、私煤掃の時に頂戴した御祝儀や、荷主様や出方の者から心付けをもらい貯めて、皆お預けになつて居りやんすが、彼の金子をお足しなすつて、私にどうぞ二十両貸して下せえ」

善「あい甘両、それは貸しも仕ようが何にするのだ」

多「少し訳がありやして買物がありやんすから、どうか貸して下せえ」

善「買物があると云つて二十両と云えばお前の身に取つては些と多すぎるようだが、一体何にするのだ、冗に遣つてはいけないよ、したが何も別に道楽もない男だから心配もあるまいが、何うしたもんだらうのう和平どん」

和「冗喰い一つしない堅い男ですが、二十両とは些と大金ですな、冗に遣つてはいかんぜ」

多「私冗なことには三文も遣いやしねい、天下のためなら遣いやす」

善「大きな事を云つて、何にするんだ」

多「左様なら旦那様申し上げますが、私毎日々々炭車に積んで青山へ往きやんすが、

押しはらよちよう
押原横町のお組屋敷へは車を曳込む事が出来やしねえから、横町へ車を待たして置いて、彼所から七八町の長い間炭担いで行きやんすのだが、来年の二月頃までは霜解がして草鞋でも草履でも辻つて歩けねえ、霜柱がハア一尺五寸位もありやんして、其の霜解の中を歩いてまいり、帰りに水戸様前の砂利の中へ入るもんだから草鞋も忽ちぶつ切れて、日に二足位は入って誠に冗だアから、私思うに、押原横町から長安寺門前まで押原通りへずうツと残らず玄蕃石を二様に並べて敷詰めたら、誠に路が直くなって、皆の仕合せだと思いやんすので、石買って敷きていから金二十両お貸しなすつて下せえ」

善「コウくお前も分らねえ人間じやアねえか、神田佐久間町のものが四谷の押原横町へ石を敷いて何うするのだ、入らざる余計な事じやアねえか、殊に町内には組合もあるし冗な事だ」

多「旦那様お言葉を返しては済みませんが、貴方のお考えは些と違おうと思いやんす、神田佐久間町と四谷の押原横町とは町内が違つて居るからと思召しては間違います、そりやア町内は違つて居りやんすが、押原横町の者も佐久間町を通る事もありやんすし、又神田の者も押原横町を通る事もあつて、天地の間の往来で世界の人の歩くための道かと私考えます、江戸中の人ばかりじやねえ、遠国近在の人も通るから石敷いてあれば往来の人がど

のくらい助かるか知んねえ、又此処な家から毎日彼処へ炭を送る時出方のものを五十人として、日に十足の草鞋を切るとした所が大きい事だ、一足を十二文と積つても千足万足となれば何程になるか知んねえから、それよりは石を敷き詰めて置くと余程得でがんす、私聞いて見たら百年は受合つて保つといいやんした、極堅い幅広の長い石が一枚五匁だというから、十枚では五十匁、百枚で五百匁だから、四百枚で二貫匁是だけでも敷けば百年ぐれえは持つて、草鞋の切れることもなく、貴方のお得にもなり、天下の人が歩く度にどの位助かるか知んねえから、世界の人のために石を敷きやんすので、決して四谷の押原横町と見て敷くのじゃアねえ、矢張お宅の前へ敷く心で居りやんす」

善「成程恐れいました、感服だのう和平どん」

和「うっかり口出しは出来ませんア、此の間の藁草履の勘定で驚きましたよ、こりやア事に依つたら得がついて返る事があるかも知れません」

善「二十両出して石を敷くのは宜いが、お組屋敷で彼はいやアしないか」

多「それも私が心配だから、彼処の手前の横町に石屋がありやすから、石を敷いて咎められやしねえかと聞いたたら、傍にお笹筒町の鳶頭が立つて居やんして、いうには、己がお組へ往つて届けて呉れようと、親切に石屋の親方と私と三人で一緒にめえり、お組屋敷の

お頭に届けやんしたら、お頭も段々次第しだいを聞き、大きに感心なことだ、往来の者の仕合しあわせで、決して咎めねえから早々さつさと敷くが宜いと、実はお組のお頭も得心なせえやした事です」
善「早いもう、感心だ、そんなら早速金を持って往くがよい」

と金子を渡すと、多助は金を懐に入れ、提灯を携さげて佐久間町の家を出て、聖堂前にかゝり、桜の馬場へ上つて参りました。只今では彼の辺あも開ひらけて佐藤先生の病院があり学校もあります、其の頃は樹木じゆもくが生茂り桜の馬場の辺あたりはお邸やしきばかりで、とんと、日暮から往来するものもなく、時々追剥おいはぎなどが出るくらい淋しい所へ、今多助が藁草履わらぞうりを穿き、すたくくやつて来る跡から、ピタ／＼冷飯草履ひやめぞうりを穿き、半合羽はんあひらに小さいお太刀たちを差し手拭てぬぐいで頬ほ被かむをし、草履穿で、田舎帰りという拵こしらえの男が、多助の傍へ寄り、男「やい多助待て」

と声を掛けましたが、是は何者でございますか、次に申上げましょう。

十五

多助のお話も大分長らく続き追々しづ終しまいの方に相成りました。さて多助は道普請みちぶしんの金を

持つて四谷の押原横町へ出かける途中で、呼掛けられましたゆえ立留たちどまつて、

多「はい、誰でがどなたんす、誰方どなただえ」

と云いながら提灯の下から透すかして見ると、道連の小平でございますゆえ恟びつくり致あし後さへ退がる。

小「やい多助、三年あとに手前てめえよく己あかつぱじに赤恥あかつぱじをかゝせやがったな」

多「汝われまだ悪事が止まねえか」

小「止むも止まねえもあるものか、彼の時は手前てめえのために化ばけの皮を現あらわされ、立端たちばを失うつたから、悪事を止めて辛抱するとは云つたが、実は手前てめえを遺恨てんげんに思おもつて附つけていたのだが、忙いそがしい身の上だから奥州おくへ小隠こかくれをしていた所が、又またづきが　　つ瀬やつと江戸へ出て来て、通りかゝつた山口屋の前で、手前てめえが提灯を点つけて出かける時に、主人が金を持っているから氣を注つけて往いけと云つたから、何でも手前てめえの懐ふちにたんまりあるだろうから出せ、金を強ふ奪だくり裸体はだかにするのだ、殺しやアしねえが身体からだに疵きずを附つけて三年あとの意趣けえを返かえすのだ、さ金を出せ」

多「仕様がねえ、性分として汝われ悪事が止まねえか、己あがあれほどまで云つた意見を用いねえで悪わりい事をするという心根が如何にも情ねえ、よこせたつて何うして此の金は遣わられね

え、世界せけえの人のために遣でえじう大事な金だ」

小「え、出しやアがれ」

と云いながら多助の胸ぐらを取り、力に任せて突き飛とばす。突かれて多助はひよろ／＼と横に倒れかゝりましたが、やつと踏み堪こたえながら、

多「なににする、どうしても金は遣でえられねえ、誰か来て呉れ／＼／＼」

と呶鳴るにも構わず小平は拳を固めて力まかせに打落せば、提灯は地に落ちて燃え上り、小平は多助を捻ねじ倒し、乗りかゝつて続け打にする。此の時に多助が盗賊どろぼうとか何なんとか云えばよいのに、唯痛い／＼と云つて居ります。痛いには違たいが、誰たれも助ける人はありません。多助は金を奪とられまいと挑いどみ争う。

小「此奴こいつ小力こちからがあるな」

と云いながら懐中から匕首どすを取出し、さア出せ、出さなければ殺すぞ。と刃物を目先へ突付ける時、小平の後ろうしろの方に立つたる一人の侍が、突然に小平の利腕を取つて逆さに捻ねじ上げ、エイの掛声諸共に投げ付けますと、前なるお茶の水の二番河岸へ逆さかとんぼを打ち、ごろ／＼／＼どぶんと陥おちりましたゆえ、多助は地獄で仏に逢つた心持で、

多「危ねい所をお救い下さいやして、何処のお人だか有難うがんした、あゝ痛いてい、頭が割

れる程打たれた、丁度二十七打ちやんした」

侍「打たれながら勘定をして居るものがあるものか、貴様は何処のものだ」

多「はい、私は佐久間町の山口屋善右衛門の手代多助と申しやんすが、仔細あつて今夜四谷へ往く道で、道連の小平という泥坊に逢いやしたが、三年あと私が意見をしたのを遺恨に思つて、私を殺すべいとすする所を、お蔭様で命が助かり、誠に有難うがんす」

侍「なに多助とな、左様か」

と云いながら彼の侍は宗十郎頭巾を被つたまゝで、後に提灯を提げて立つて居ります御家来を見返つて、

侍「これ吉次、少々明神下に買物があるから、遅くなるかも知れんから先へ歸つて、旦那様は後から直ぐに歸ると御新造にそう云え」

吉「へい、それではお提灯を置いてまいりませうか」

侍「まあ却つて燈のない方が宜しいから持つて往け」

吉「へい、左様ならお先へ参ります」

多「おいお供さん、大きに有難うがんした」

と云う間に早や家来は急ぎ駈下ります。跡を見送つてお侍が宗十郎頭巾を取つて首へ巻

き、

侍「これ多助、誠に懐かしかったなア」

多「へい貴方は何方でがんです」

侍「三ヶ年前其方が屋敷へ参った時は、義理あればこそ親子と名告らず、つれなく其方を帰した後で、母が愚痴ばかり申して泣いてばかり居ったが、皆手前の為めを思い、態と厳しく云つて帰したが、八歳の時に別れたゆえ碌々顔形も分らないがな、其方の実の親の鹽原角右衛門であるぞ」

多「え、お父様か、あ、逢いとうござりやした」

と云いながら泣出し、袴に取付き、

多「もし、三年あと、お邸にまいった時に、貴方が己ア実の子じやアない、全く百姓角右衛門の子だが、同じ名前の義理で汝を育てたのだ、自分の子ではねえと縁切つて向へ遣つた義理合を立つて仰しやりやんしたから、お顔をも見ずに帰りやしたが、彼の時の御意見が身に染み渡つて、山口屋に只今まで辛いのを忍んで奉公して居やんす、私決して悪さして国出たわけではがんでせん、後で細かにお話をいたしやすが、申せば却つて御苦勞を掛けようと思ひ、詳しいお話を致しやせんだったが、只川一筋向のお屋敷に両親がありながら

お顔を見る事もならず、何うしておいでなさるか、達者で御奉公なさるかと人の噂を聞いては悦んで居りやんすが、あんたも追々取るお年、病み煩いのねえ其の中に一遍お顔が見てえと思ひまして、信心して居りやした、どうぞ私国へ帰り、家を立てるまでお達者でおいでなすつて下さるようにと思つてる願いが届いて、汝が実親の角右衛門だと仰しやつて下せえまして、私何より嬉しく有難うございやす」

角「此の方に於ても実に悦ばしい、段々様子を聞けば、山口屋善右衛門方へ忠義を尽し、実体にして居る由、誠に感服なるぞ、屋敷内でも其方の評判が宜しいから蔭ながら悦んでいた、又沼田の角右衛門の分家太左衛門と申すものより書面が来た所、何か後妻の悪心よりと、其方の妻の心得違いより多助は家出を致せし後にて、家は潰れ、多助には聊かも悪い所はないという事が知れたゆえ、能々な仔細もあろうと常に其方の噂ばかりして居った、何うか身体を大事に奉公して国へ帰り、立派に鹽原の家を立てろよ」

多「はい、家を立て、えと思ふばかりに此様な難儀を致すのでがんですが、お父様此処でお目に懸ろうとは実に思ひやせんでした、有難い事だな、提灯を持って往つてしまいやしたから、お顔が見られねいから、何処か明るい所へ往つてお顔を宜く見てえもんでがんです」

角「左様なら、それまで同道してまいろう」

多「お屋敷までお供して行き、お母様にももう一遍お目に懸りていもんです」

角「いや、また逢う時節も有ろう、夜中金などを持って外へ出るな、山口屋善右衛門の宅まで送つてやろう」

多「身分が違うから仕様がねえが、貴方でもお母様でも加減の悪いような事もなかんべいが、若し有つたらば山口屋の手代多助と云つて呼びに遣して、私逢わしておくなせいよ」
角「お、宜しい、其の燃えた提灯を拾いな、さア同道致そう」

と一方は戸田様の御家来にて三百石取りの身柄のお方が、見る影もない炭屋の男を送ると云うも親身の父子、多助は嬉し涙に暮れながら山口屋まで送られて帰りました。是から四谷の押原横町へ石を敷詰めて、道普請を致しますお話でございしますが、其の石は明治四五年の頃まで残つて居りまして、只今でも彼の横町の溝の縁に石片や何かゞ積んで有りますが、玄蕃石の余程厚いもので、側面に山口屋善右衛門手代鹽原多助と彫り付けて有りまするを私も慥かに見ました。正のお話であります、細々しい所は面白味が薄うございしますから申上げませんが、多助も山口屋方へ奉公中追々金を蓄め、国の家を立てたいという精神を貫きましようとするうち、月日の経つのは早いもので、十一年が其の間奉公に

陰かげひなた 陽ひなた なく、実に身を粉こに砕くだいての働き、子ねに臥ふし寅とらに起き、一寸いっすんの間まも油断ゆだんせず身体しんたいを苦しめ、身を惜おしまず働はたらきます。十一年目は丁度明和八年で、其の年の七月の盆は御案内おんないの通りお商人あきんどしゆう衆しゆうは掛けりなどお忙いそがしいものでございますが、段々月末に相成りますると大概用も片付きました。多助は今年三十一歳、山口屋善右衛門は五十三歳と相成り、主しゆう従じゆう親おやみの深い事こと他に勝すぐれ、善ぜんき心掛こころかけの人ひとばかり寄よりまするとは実に結構な事ことで。

善「多助や、ちよつと此処へ来な」

多「ヒエ、お呼よびなせいやしたか」

善「家うちのお内儀かみさんとも話をして居るんだが、お前もまア家うちへ来てから最もう十一年になるが、月日の経つのは早いもんだのう」

多「はい、早いもんでがんすなア」

善「お前も十年の年季は勤め、礼奉公を三年勤めようと云つて骨を折つて呉れるお蔭で、身代の助けになつた事も毎度あるんだが、最もう奉公も十分だから、こゝらで国へ歸つて、日頃望みの国の家いえを立てたら宜いかろうと思う、それにお前も隠かくして居るから私わしも聞きもしなかつたが、一体お前の国は何処どこだえ」

多「はい、誠に有難うがんです、只今まではお尋ねが有りまして、国の家の事や私の身の
上を申しやせんでしたが、もう年季通り勤め上げ、お暇が出て国へ帰るのも近いこんだか
ら、お隠し申しやせんが、実は上州利根郡沼田下新田という所の百姓、鹽原角右衛門の倅
多助と申す者がんです」

善「ふん、下新田と云うのは、それは大分、なんだナア山の中の様子だのう」

多「はい左様でがんですが、私種々申すに申されやせん間違が有つて、国の家が潰れか、
りやんしたから、辛えのを忍んで居りましたが、母や女房が心得違えの者で、私をマア殺
すべいとまでに悪企みをされやしたから、私も殺されては国の家を立てる訳にもいけね
えから、私出れば潰れるとは思いやしたが、江戸へ参つて奉公をし、金を蓄め国へ帰つて
家を立てよう、命有つての物種だ、跡方は潰れてもそれまでと思いきり、国の家を出て
江戸へめえりやしたが、頼るものはなく、仕様がなくなつて、忘れもしません十一年あとの
八月二十日の晩に昌平橋から身い投げしようとする所を旦那様に助けられ、御当家へ参り、
長い間御厚恩を戴き、お蔭さまで炭の事から、書けもしねえ手も帳面ぐれえは附けられ、
算盤も教えて下さり、実に旦那様の御高恩は海よりも深く、山よりも高く、死んでも多助
は忘れやせん」

善「あい／＼誠に其の志が如何にも感心だのう」

妻「ほんとうに感心だねえ、だから旦那様が毎もお前を誉めて、あの多助の志は別段だと云つてさア、それに入出のものや店のものまで皆な誉めて居るよ、私や旦那様が誉めると他の奉公人は嫉みが有つて悪く云うものだが、お前計りは誰も悪く云わないのは全く不断の心掛けが良いのだと、旦那様と自慢してお話をして居るんだよ」

多「旦那様へお預け申したものは何の位になりやした」

善「預つたものか、あいよ、和平や、鳥渡帳面を持って此処へ来な、あい／＼」

と帳面を受取り、繰返し見ながら、

善「多助、お前は給金なしに奉公をして呉れ、拾つた物を売り、預けた金に追々利が増して百四十二両と二貫文となつたが大きなものなのう、それからお前が国へ歸るのに私も何ぞ骨折の礼をしなくつちやアならないが多分の事も出来ないが、百両やる積りだ、それから俵が十両、お内儀さんが十両、番頭が千疋、店の者中で千疋、車力鳶のもの出方中残らずで五両、其の外荷主様に戴いた御祝儀、煤掃き歳暮お年玉何や彼や残らず帳面に付けてある処を番頭に寄せてもらつたら、丁度三百両になるが、微塵も積れば山だのう」

多「大きく蓄りやしたなア、そうは蓄るめえと思ひやしたが、えれえもんでがんす」

善「此の金を以て国の家を立て、極りが附いたら、今まで長い間心易くしたものだから、年に二度ぐらいずつ江戸へ出て来る訳にはいくまいか」

多「はい、国の家を立てれば二度でも三度でも旦那様のお顔も見てえから出てめえりやすが、私家は国でも三百石の田地持で、山もえらく持つて居りやんしたが、母さまの心得違わじりちいから山林田畠でんぱたは人手に渡り、家は焼けてしまつて無えのですから、国へ帰り家を建て、田地を買い戻し、馬の二頭も買うには三百両では足りねえようでがんす、それだけ蓄ためた金ではあるし、それに国で稼いでは百が錢を儲けるにも大騒ぎだから、最もう些ちつとべい此の江戸で稼いで見たいと思ひやすが何うでがんしょう」

善「何ういう稼ぎをして見る積りだのう」

多「はい、私別に覺えた商しょうばい売もねえが、長い間此の家に御厄介になつて居りましたから炭の事は少しべい覺えやんした、炭より外に何も知りやせんから炭屋を始めて見てえと思ひやんす、就つきやして私此間お使の歸りに、本所相生町を通ると、其そこ処に誠に好い明あきだな
店が有つて、間口が三間半、奥行六間で小さい穴蔵が一つ有りやんして、前の河岸附めえに小さい河岸納屋が有りやすから、炭の荷を揚げるにも極都合の好い事ごくごで、それから直段ねだんを聞いて見たら二十五両だと申しやすが、尤も畳建具残らずで、竈へつはありやせんが、それは

後あとで買つても好いが、二十両位にぶんねぎつて買おうと思ひやすが、どうでがんしよう」
 善「至極宜かろう、独りでやつきとやれば又それだけの事は有りましよう、炭は己の方か
 ら送るから仔細はないが、此の金を資本もとでにして始めるが宜よい」

多「其の金は貴方あんたに悉皆預けて置き、私独りで稼わしぎ出しやす、どうか此の金を月々幾許いくばくと
 いう細くも利を産み出すよう一つ御工夫なすつて下さいやし、其の内二十両だけお借り申
 して家いえを買つて始める積りでございます」

善「それは宜よいが、二十両で家いえを買つてしまつてはマア炭や何かを買出すにいけまいが、
 それは何うする積りだな」

多「買出さねえでも炭はハアえらく有りやす」

善「何処どこに有るんだ」

多「へい、私わし十年の間粉こな炭ずみを拾い集め、明き俵へむやみに詰め込んで、拝借致しやした
 大い明き納屋へ沢山打積んで有りやすから、あれで大概宜かんべいと思つて居りやす」

善「拾い集めた炭じやア仕方があるまい、粉計ぼかりだろう」

多「へい、粉炭でがんす」

善「其様そのんな物を買人かいてがあるか」

多「有りやんすとも、貧乏人には一俵買は不自由な訳で、中々一俵は買えねえもんでが
すから、冬季などは困つて鞆丸火鉢の中へ消炭などを入れ、ブウ〜と吹いて震えな
がら一夜明かすものが多い世の中で、裏店や何かで難儀して居て一俵買が出来ねえで
困つて居るものが有りやんすから、其様な人に味噌汁に一杯、高いか知りやせんが、七文
か九文に売りやんせば大く益になり、買う人も寒さを凌げるから助かりやすゆえ、是を始
めたら屹度繁昌しべいと思ひやす」

善「是は感心、うまい考えだ、成程宜かろう、何か粉炭ばかり売るも宜しいが、余程貯
つたかえ、直ぐに売り切れるようではいかんがどうだえ」

多「へい勘定をしたら七百二十俵べい貯りました」

善「なに、七百二十俵だと、えらいものだな」

多「へえ、年にどんな事をしても七十俵ぐらいは貯る勘定になつて居りやんすな」

善「ふん、そんなに粉が出るかのう」

多「麩るものだが、斯うして有れば売れやすが、あれで始めれば沢山お借り申しても二十
五両でやる積りでござりやす」

善「始めろ〜」

多「そんなら金をお貸しなすつて下さい、家を買つて来やすから」

と主人より二十五両の金子を借り受け、直に本所にまいり、彼の家を買取り、樽代を払い、近辺へ店振舞を致し、其処に住み込み、粉炭の俵を前の納屋に運び入れ、これから毎日彼の粉炭を籠に入れ、味噌漉を中に置き担ぎ歩きながら、

多「計り炭はようがんすか、計り炭はようがんすか、味噌漉に一杯五文と七文でがんす」

と云うのでございますが、この時分には計り炭を売るものがないから珍らしくもあり、一俵買いの出来ない人々は便利な事でございますから一人買二人買、十人百人と好いことは忽ちに広まり、彼処此処で計り炭屋々々というように相成りました。それから昼間売り歩き帰つてまいり、夜分は又門口に大きな高張を立て、筆太に元祖計り炭鹽原多助と記し、轡の紋を付け、店で計り炭を売りますと、裏店のおかみさん達が前掛の下に味噌漉を隠し、一杯お呉れというので大層商いがございます。八月の十五夜から引続き一月まで追々繁昌致して居りました。すると其の隣りに明き樽買いの岩田屋久八と申し、此の人は年三十九歳になる独身もので稼ぎ人でございます。多助も稼ぎ人なれば互に睦まじく、毎日休む処が極つて居ります。それは四つ目の藤野屋左衛門と申してお駕籠御用達しで、名字帯刀御免の分限でござります。其の藤野屋の裏手の板塀に差掛け葎簧張を

出す 聾 婆 さんの店があります。春は団子などを置き、平常は※の足か茹玉子ぐらいを列べ、玉子はない事が多いが、塩煎餅は自分で拵えますから何時でもあります。其の外駄菓子はお市、微塵棒、達磨、狸の糞などで、耳は遠いがお世辞の宜い婆さままでございます。婆「おやお早うございますねえ、何時でもお噂ばかりして居ますよ、どうも炭屋さんと樽屋さんは毎日刻限違わず入つしやると申してねえ、まことに稼ぐお方は違つたものですねえ、今日はいつともよりお早いようです、まアお茶を一つ」

と差出すを受取り、

多「久八さんはもう来そうなものだなア、来たく、久八さん今日は負けたんべいと思つたが、矢張己が早かつた」

久「やア多助さんか、今日ばかりは私が先きだと思つたのだが、負けやした、私は粗々かしいから宜く物を忘れるのだよ、今日も樽を買つた家へ手拭を忘れたものだから取りに返り、遅くなつたのだよ、婆さんお茶を一杯お呉れ」

婆「お天氣が宜く続きます、毎度あなた方のお噂ばかりいたして居りますよ、此の塩梅ではお天氣も続きましょう、どうも春にならなければお団子も売れませんよ」

久「聾だからあんな事を云つてる、お茶を一杯おくれ」

婆「はい、これは気が附きませんでした」

と云いながら汲んで出すを久八は受取り、

久「多助さん、いゝ商売しょうばいを始めたなア」

多「まあ仕合せな事でお得意先が日々にちく増えるばかりさ」

久「好い事を考えた、これは別だよ、誉める人もあり、中には悪くいう人もあるが、何しろ考えがうまいねえ」

多「あんたも折角樽を買つてお歩きなさい」

久「だがねえ多助さん、こうやつて刺子さしっこの筒袖を着、膝の抜けた半股引を穿き、三尺帯に草鞋がけ、天秤棒を担いで歩くのだが、末には立派な旦那といわれるようにお互にならぬではない、旨い物は喰わず、面白いものは見ず、こうやつて居るんだものを、まあ一生懸命に十年の間稼いだら滅法に金が貯ろうと思うが、多助さんは幾許貯める積りだね」

多「私は金蓄める積りは有りやせん」

久「そんなら何だつて稼ぐのだ」

多「そりやア稼げば金が蓄るが、金を蓄めるような心じやア駄目だ、私ア蓄らないように

する積りだ、なんでも金蓄めて油断をしてはなりやせん、これ金宜く聞け、己ア見ろ、雪が降つても風が吹いても草鞋穿きになつて寐る目も寝ずに稼いでいるに、汝は何だ、錢箱の中へ入つて、樂をしようたつて、そう旨くはいかねえ、稼いで来う稼いで来うと金の尻つぺたを打つと、痛いもんだからピヨコ／＼出て往つて稼いで帰り、疲れたからどうぞ置いておくんなさいと云つても、己アこつやつて稼いでいるに、汝そんな弱い根性を出しては駄目だ、稼いで来うといつて又尻ぺたを打つと、痛いから又びよ／＼飛出しては稼いで来る、終えには金が疲れて最う働らけねえから何うか置いておくんなさい、最う何処へも行きません、貴方の傍は離れませんかと云うから、そんなら置いて遣るべいという、これが本当に天然自然に貯る金と云うものだアよ」

久「フ、ン始めて聞いた、金の尻ぺたを打叩くつて、これは妙だのう、そうだが多助さん段々金が貯つて来ると使わなくなつちやならない事が出来てくるぜ、交際で否でも応でも旨い物を喰い、好い衣服を着なければならぬように成つてくるよ」

多「私中々そうはさせねえな、着物が私が身に付こうとすると、飛んでもねえ着物だと云つて寄付けず、又旨い物だつて己ア口へ入ろうとしても、そんな汚れた物は己が口へ入れられねえと云つて寄付けねえで打叩くからそうすると喰物も段々に疲れて来て、そんな

事を云わずに何うか少し喰つてお呉んなせいといい、着る物も貴方あんたの傍を離れねえから、何うか着てくんと己おらア身体へ附着くつついて離れねえというから、そんなら着てやろう、喰つてやろうと云うのだ、これは求めずして天より授かる衣食というものよ」

久「へい成程考えたねえ、旨い考えだなア、フーン」

多「お前は明樽めえ あきだるかい買よ、私は計り炭屋さ、お前は精出して明樽まえを買い、己おれは又なんでも構わずせつせと計り炭を売る、これが天地への奉公よ、計り炭屋は計り炭屋、明樽買は明樽買、お侍はお侍、大尽は大尽、旦那様は旦那様、これは皆其の人の徳不徳にあるのだから、何でも構わずそれだけの稼ぎをせつせと遣るがようがんと、金を貯る心を起してはいけねえ、何でも貯めねえよう、家には寄せ附けねえように働かせ、己おらア貧乏だなんという心を廃よしにしてしまつて、唯無茶苦茶に天地へ奉公をして居さえすれば、天運で自然と金が出来、天がそれだけの樂をさせてくれるから、何でも邪よこしまな心を起し、一時しにでかく儲けべいと思つて人の物を貪るような事をしちやアいけねえ、随分でか大い投機やまを工たくんでやれば金が出来べいが、其の金は何うしても身に附いてはいねえ、若もし其の身に附いて、も其の子の代には屹度たび消える訳のもので、火事盗難という物が有るから、どんなでか大い身しんしょう上うでも続いて十と度も火難に出逢い、建たてる度に蔵たんびまでも焼いたら堪るものじゃなからう、だから何うしても

無理に食ると又無理に出て行く訳だから、無理のない様に金は働かせ、遊ばせねえようにするのが肝心だよ」

久「成程多助さん、そこへ考えが附かなかつたから、斯うやって齷齪辛いのも厭わないで稼ぐのは、今に立派な旦那になるうと思うからだが、能くなるのも悪くなるのも皆其の人の徳不徳で、明樽買は明樽買かねえ」

多「立派の旦那様にならねいでも、正直にして天地の道に欠けねえ行いをして居れば、誰にも愧る所はねえから、何も構つた所はねえ」

久「恐入つたねえ、成程えれえもんだ、これからは金の尻ペたを打敲くとしようよ、毎日此処へ休みながらお前のいう話が皆為になるよ、あの先達てちよつと聞いたが、神田の方ではお前の噂が高いよ」

多「なに誉められたつて油断は出来ねえ、悪く云われようが善く云われようが此方でさえ間違えをしなければ恥る所はねえから安心だ、皆天地への奉公、死ぬまで骨折つてやりやしよう」

と茶を喫みながら四方山の話をして居りますも、自ら経済法が正しく、儉約の道に適つて居ります。樽屋の久八も根が正直な人故肝に銘じて感心をいたし、兩人で長話をし

て居ります処へ、年頃四十八九にもなろうかと思ふ女乞食が、にわかめくら俄盲と見えて感が悪く、

細竹の杖を突き、十歳ばかりの男の子に手を引かれながら、よぼくして遣つてまいり、

ぼろくした荒布あらめのような衣服きものを着、肩は裂け袖は断切れ、恐しい形なりをして居ります。子

供は葭簀よしず張はりに並べてある大福餅を見附け、腹はらが空へつたと見え、

子「お母つかああの大福餅を買つておくれなえ」

母「そんな事を云つてもお前まへお銭ぜいが有りません、何を、大きいのを、そりやア迎とても買えや

アしねえ、こゝに三文しかないから三文だけお菓子かしを売つてお貰い、もしお願いでござい

ますが、小僧こぞうがお腹なかが空すきまして、お店の大福を見て喰たべたいと申しますが、三文しかご

ざいませんが、これで一つおまけなすつて売つて下さいませんか」

久「おい、お婆さん、小僧こぞうがお腹なかが減なつたから大福を売つてくれろと云つてるぜ、負けて

やんねえよ」

婆「誠に好いいお天気で」

久「あれ仕様がねえなア、乞食が大福餅をまけてくれろと云つてるんだ、銭ぜにが足りねえと

いうから負けてやんなよ」

婆「はい、ナニ負けてくれろ、持つていきな、負けてやるよ、あゝ無闇に手を出してはい

けない、さ、まけてやるから焼過ぎて堅くなつたのを持つて往きな」

母「有難うぞんじます」

と云いながら大福餅を受取り子供にやる。子供はがつくして喰べているのを、多助は其の母の姿を見て恟り致しましたが、此の乞食母子は何者でございましょうか、次回までお預りに致しましょう。

十六

多助が彼の葭簀張で盲目の乞食を見て恟りましたは、十一年前沼田の下新田で別れた一旦自分の母親になりし実の叔母おかめに、沼田の家も此の毒婦のために潰れたのでございますから、多助は心の内に、あゝ叔母御も心がらとはいいなながら盲目乞食とまで成り下るとは、皆天罰と思えども、傍を見ると樽屋の久八が居りますから声も掛けられず、何か心に思案を定めまして、

多「久八さん私少し用が有りやすから、誠にお気の毒だが何うか一足お先へ往っておくんなせえな、直に後から出かけやす」

久「ハア、そんなら先へ行きましよう、おやくこゝの所は三軒ながら明き店だなになった、
 こういう日あたりのいゝ所が明いては困るねえ」

「と云いながら荷を担ぎ、

久「明き店だなはござい〜」

多「おい久八さん明あきだるじやアねえか」

久「そうだった、粗忽そ、つかしいから仕方がねえ、明樽はござい〜」

と流して往ゆく後ろ影を見送つて、多助は右の穢きたないおかめの手を取つて、

多「叔母さん此こ処けえ掛けなよ」

母「はい、何方どなたさま様でございますか有難うぞんじます、俄盲目で感が悪うございまして難

洩致します」

多「まア此こ処けえかけなよ、子供も掛けな、叔母さん貴方あんたはまア何うして此こ様なに零落おちぶれたよ」

かめ「はい何方どなたさまでございますか」

多「十一年あと沼田で別れた貴方あんたの甥の多助でがんすよ」

といわれて、おかめは顔色変え、

かめ「えゝ多助どのか、面目ない〜〜」

と云いながら思わず識らず縁台から下へ落ち、大地に両手を突いてパラ／＼と涙を流しまするを見て、

多「叔母さん、面目ねえという事が分りましたかえ、情ねえ、あんたもマア元は八百石取のお侍の家に生れ、お嬢さまとも云われた身が、若い時分から心掛けが悪く若侍と不義をし家を駆出し、縁あつて子供が出来たが、其の男が死んだ後、縁とは云いながら私が八歳の時に貰われて往つた養父鹽原角右衛門様の後添となり、仮にも一旦親子となる中に、父様が不凶江戸から連れて戻つたお前の実の娘おえいを、父様が血統の従兄弟同志ゆえ夫婦にしたら睦ましかろう、此様な芽出てい事はねえつて、死ぬる臨終に枕元でおえいと婚禮の盃をしたに、貴方は死んだ父様のお遺言を忘れ、四十に近い身を持ちながら、原丹治と密通をするのみならず、私という亭主のあるおえいを勧め、丹治の忤丹三郎と密通をさせ、実に畜生とも何とも云いようのない行いではがんせんかえ、あの時に私がこれを荒立てれば血で血を洗うようなもの、詰り家の恥になりやすから、鹽原の家名に疵を附けめえと思ひ、堪えていると、二十歳にもなるものを小僧子のように使いし、それで私虫を堪えて居りやんしたが、終に殺すべいとすから、私家出をすれば其の跡へ原丹治親子が乗込んで来て、鹽原の家は潰れてしまうのは知つては居れど、命さえあれば江戸で奉公を

して金を貯め、国へ歸つて来て又家を立る工夫もあるべいと思ひ、辛えのを忍び国を出る時に纔かに六百の錢を持つて来たが、途中で悪者に出遇い、難行苦行して漸く江戸へ着いた所が、頼る所もねえので身投げて死のうかと思ふ所を助けられ、其の人の家に十一年の間奉公をして、漸々人になりやした。只今では担ぎ商いとは云いながら、何うやら斯うやら小せい家を一軒持ち、竈を立る身になりやしたから、これから稼いで金を貯め、国へ歸り、鹽原の家を立てる積りでがんですが、貴方のまア其の形はなんだえ、それから私い宜く知らないが、国の家は焼けてしまつたつて、あんたはマアどういふ訳で乞食になんなすつたえ」

かめ「はい、面目次第もございません、お前に又此処で逢うのも皆な天の罰でございませ、お前がいう通り血統の甥を私の子にして娘を妻わせ、何一つ不足のない身の上となつたのに、思案の外のはかばかとは云いながら、年甲斐もなく原丹治と密通をいたし、お前を虐り出した跡で丹三郎をおえいの養子に入れたのも、名主と話合ひの上、村方で誰一人非の打ち人のないようにして婚礼をさせようとする処へ、分家の太左衛門が聞附けて来て大變に立腹し、掛合を始め、大間違が出来、丹三郎は若氣の至りで腹立のまゝ五八を切殺し、太左衛門も斬つてしまふと云つて追掛けて往くと、飼馬が馬小屋から飛出して丹三

郎に嘯み付き、おえいも丹三郎の様子を案じて其処へ往く所を馬が嘯み付き、兩人とも馬に嘯殺され、お前の讐を馬が討つたようなもので、今考えれば天罰とは云いながら怖しい事だと思つて居ります、すると太左衛門が逃げて触れたと見えて、村方の百姓が大勢集り、私達を打殺せ〜と騒ぎ立て、垣の周囲を取巻いた時は、仕方がないから有金を小包にして身支度をし、おえいと丹三郎の死骸を藁小屋に投込んで火を放け、漸々裏手から落延びまして、四万の山口村へ身を匿して居ますと、因果と懐妊いたしてねえ、其の翌年の九月産み落したのは此処に居ります此の四萬太郎という倅で、これはお前とは敵同士の原丹治の子でございます、それから故郷忘し難しとは宜く云つたもので、最一度江戸を見たいと思ひ、お尋ね者の身の上だが、丹治殿と私は、生れ落ちてまだ間のない乳児を抱えて山口を立ち、江戸をさして来る道の横堀村で、又旅のおかき婆に出遇い、其の家に泊つたのが運の尽き、道連れの小平という悪者が丹治を斬殺しました、尤も丹治もおかき婆と同類の仁助とを殺しましたから、其の隙に私は死物狂い、どうかして落延びようと思ひましたが、小平のために吾妻川の深い所に蹴落され、既に私も此の子も助かりようのない所へ北牧村の百姓清左衛門という人が通りかゝり、助けてくれました所、縁あつて其の家にずる〜べつたり、連れ子をして後添になつて居ますうちに、清左衛門

は三年あと亡くなりましたゆえ、其の悴きりゆうが桐生から歸つて来ました所、私の心掛けが悪い
 所から遂に離縁となり、此の子と一緒に追い出され、抛よんどころなくまた四万の山口へまいり、実
 は湯場の賄まかない女をして居ますと、一昨年おとししからの眼病で、去年の暮あたりからばつたりと見
 えなくなり、感が悪いものですから賄まかない処じやありませんゆえ、出て往ゆけくと虐いじめられ
 ましても泣き附いて居りましたが、仕方がありませんから此の子を連れ、此の七月下旬か
 ら江戸へ出て来ます道々も、乞食をしながらの事ゆえ道も撈はかど取らず、野州路へ 漸々
 の事で江戸へ来ましたも万ひよつと一したらお姉あねさま様にお目にかゝる事もあるうかと思ひ参り
 ましたが、一昨日おとしから何も喰たべず、私は厭いといませんが此の子が如何にも不憫でござい
 私わたしは心がらでございりますが、親の因果が子に報ない、何にも知らぬ此の子が如何にも不憫で
 ございます、見る影もない此こん様な形なりでお前さんに逢あい、実に面目次第もない事で、斯うい
 う身の上になりますのも多助さん、皆みんなお前の罰だ、私は今始めて気が附きました、目が覺
 めました、面目ない、何うぞ堪忍しておくんなさい、許しておくんなさいよう」
 多「お前めえまア許してくれ堪忍してくれと云うが、物の理合りあいを宜く考えて見なせい、人と云
 うものは息ある物の長つかさと云つて、此の位くれえな自由自在な働きをするものはねえのだ、向うへ
 往ゆきてえと思えば自然むこうと向へ歩いて往いかれ、寝たけりや横になり、喰たいたけりや茶碗と箸

を持つて飯をかつこむように拵えてあつて、肩があるから着、口があるから喰うように具そなわつている人の体だから、只能く働いて天道に欠けず、骨折つてさえ居れば自然に喰べられるようになったのであるのだから、喰えねえ着られねえという事はねえ筈だが、そこがそれ情慾に迷つて、思う儘欲しいまゝに貪り、憎いの可愛いかあいの、嫉みだの猜みだそねの、詐り憍みなどあだと仇ならぬ人を仇にして、末には我から我身を捨てるような事になり、路頭に迷う人も世間には夥いけえことあるが、仮令一遍悪い事をしたつて改心する時は直すぐに善人だから、あんな全く私が罰だつた、私に濟まないと心附いたらば助けて上げやしよう、だが死んだ親父の位牌いへいに対しても濟まねえから、家の鬩うちしきを跨またがせることは出来ねえ義理だから、裏あきだの明店なへ入れて置き、食物くいものだけは日々送にちつてくれべい、それから此の子が最もう些ちつと訳あきだが分るようになったら、己おらア家に引取り、真しんの他人と思ひ奉公あんなわしに置いて、算盤や手習あきだぐらいは私が仕込んで、喰い方の附くように工夫してやんべいが、貴方私あんなわしを甥だの前の忤あきだだのといふ心を出しては濟まないよ、叔母とも甥とも思わず真しんの他人と思つて居なければ、国の亡お父やじのお位牌いへいに対して濟まないよ、えゝかえ」

かめ「それじゃ敵かたき同士どうしの此の丹治の子をお前は得心の上で目を掛けて育て、おくんなさるか、誠に有難う存じます、どうぞ助けておくんなさい」

と両手を合せ、多助に向い神か仏のように只管ひたすら拝みまするを見て、多「そんなに心配しんぱいしなざるな、何どの様ようにもして遣るから」

と多助は茶代を払い、彼かの汚い見る影もないおかめの手を引いて炭の荷を担いで帰りましたが、霜月の事でございまずから人通りも滅多には有りませんから、誰も知るものは有りません。すると先程より藤野屋ふじのや屋やく左衛門さゑもんの娘お花と申して今年二十一歳に相成り、近辺で評判な別嬪の娘ですが、不思議な女で、御用達のお嬢様で有りながら絹布やわらかいものを着た事は有りません。尤も外へ出ます時には、御両親のお恥になると濟まないと申して着ますが、宅うちにいる時は何うか綿服めんぷくにして下さいと申し、頭も飾らず、白粉おしろいなどは更につけず、誠にさつぱりとした娘でございまずが、自ずと氣象が気高くても強味こわみはありません、心掛けの宜よい娘でございまず。多助が日々裏の茶見世へ来て話をするのを聞いて感心致して居りましたところへ、今日はおかめという叔母が参りましたのを、多助が段々と意見を加え、敵同志かたぎの親子をば助けて遣ろうと云う志は、誠に感心な事だと、年はまだ二十一歳でございまずが、心ある娘で、多助の往ゆく後影うしろかげをしみ／＼眺め、見惚みとれて居りますと、広間の傍わきに土廂どびさしを深く取った六畳の小室こまがございまず。其処そこに藤野屋左衛門が居りました、

柰「花や〜何を見て居るのう」

と云われてお花は心づき、

花「お父様とっさま、あの毎日あすこの葭簀張よしずばりに炭屋さんが休んで居りますねえ」

柰「彼あれは中々感心な男だ、只の人間じやない、計り炭を売るなぞと何うも工夫が旨い、それに云う事が皆みんなな異かわつてゐるよ」

花「毎日明き樽を買う人と話をして居ますが、どうも不思議なことを申します、あのお方は今に立派のお方になりますねえ」

柰「尋常者たゞものじやないのう」

花「お父様家とっさまうちへもいくらも人が来ますが、本当にあの炭屋さんのようなお方は有りませぬねえ、今日という今日はつく／＼あの炭屋さんに私わたくしは惚れ……」

と云いかけ親父の顔を見て、恥かしそうに下を俯むき真赤になりました。

柰「何か、彼あの炭屋に花は惚れたか、うん惚れても好よい、好よく惚れた、己も惚れている、感心だ、あの襷ぼろの半股引刺子さしつこの筒袖で真黒けえに成っているのだから、色香に惚れたのではない、炭屋の心に惚れたのだらうが柰左衛門も鼻が高い、流石さすがは藤の屋の娘だ、宜しい、貴様が強たつてあの炭屋の所へ嫁に往ゆきたいと云うなら遣つてやろうか」

花「お父様とつさま 本当でございますか」

李「往ゆきたいか」

花「本当にあんな人はないと思います、彼あすこ 処へ嫁に遣つて下さいませれば、どんなにもお父様とつさま に孝行致しまする」

李「お、感心だ、宜く云つた、何うも平常ふだん 乙な理窟を云うだけお前の心しん 底てい が宜しいが、併しか しの炭屋は何処のもんだか家うち が分らないで困るが、明樽買いと懇意な様子だから、彼あ 奴いつ を呼んで聞いて見たら分ろうが、然るべき媒なこうど 妁あ を頼み、娘を貰つて下さいと云つたら、屹度炭屋は御用達の娘は嫌いだぐらいは随分云い兼ねかね え男だから、兎も角も明日あした 明樽買いが来たら呼んでくれ、相談をして見ようよ、これくよしや、明日のう、あの粗そ 々つ かし明樽買いが来たたら、少し用があるから呼んでくれ、門の方から入れずに裏口の外庭の方から入れてくれる、いゝか」

下女「畏かしこまりました」

と其の日は暮れ、翌日に相成りますと時間たが 違が わず例の通り、

久「明樽はござい〜」

と流して参りました。

下「ちよいと明樽屋さん」

久「へい〜何方様どなたさまでございます」

下「あの旦那様が、何だか鳥渡ちよつとお目にかゝりたいからと仰しやいますから、どうぞ庭の
開きから入つて下さいまし」

久「何方様どなたさまで、藤野屋様で、是は誠に有難いことで、成なるたけお直段ねだんを宜く頂戴致します
から、外へお払いにならず、私わたくしが頂戴致しようございます、えゝ樽はお幾つございます」

下「旦那様が少し御相談申したいことが有りますから」

と云いながらギイツと開き戸を明け、

下「此方こちらへお入んなさいよ」

久「でございますか、へい」

と中へ這入りますと、庭の清潔きれいなこと、赤松の一と抱えもあるのがあり、其の下しらかに白
川御影わみかげの春日燈籠かすがどうろうがあり、檜ひの木の植込みうえこ錦木にしきぎのあしらい、下草の様子、何やかや
申もうし分ぶんなく、鞍馬と御影の飛石とびいしに敷松葉しきまつばから霜除けの飾かざり縄なわ、打水うちみずを致し洗
上げてあります、土廂どびさしが深くなっている六畳の茶の間が有りまして、其処そこに杢左衛門が
坐つて居りまして、

柰「さア樽屋さん、ずっと此方へ来ておくれ、構わず開けて此方へお入り、よしや入れてあげなよ」

久「へいへい、只今草鞋を脱いでまいります、石が斯様に洗つてございますから」

柰「いや構わず、遠慮をしてはいかん、ア、松葉の中へ踏み込んではいけない、其の天秤棒を片付けておくれ、あゝ石灯籠へ立掛けては困る……宜くお出でゝあつた」

久「お初にお目にかゝります、私は岩田屋久八と申します樽買いでございますが、何分御鼻根を願います」

柰「まアこれへ腰をかけておくれ、石の上に手を突いてゝは困るよ」

久「誠にお立派なお住居でございます、斯ういうお広いお宅は初めて拝見致しました、あの凹んで居ります処は何と申します」

柰「あれかえ、あれは床の間だアね」

久「へい、私は凹んで居りますから凹の間かと思ひました、お座敷が大層続いてございませぬア、彼方の方に小さいお座敷が有りますが、あれは何でございます」

柰「あれは便所だよ」

久「へい誠に結構なお住居でございます」

柰「花やお茶をあげなよ」

花「はい」

と恥かしそうにお茶を汲んで久八の前に置く。

久「へい〜是は有難う存じます〜」

と云いながら茶碗を手に取上げて見まするに、ふるそめつけ古染付の結構なたつぷりした煎茶茶碗を象眼入ぞうがんいりの茶台に載せて出しますから、

久「へい〜恐入ります、惜しい事に周囲まわりがポツ〜兀はげて居りますナ、些ちとお茶がお温ぬるいようでございます」

柰「いや、余あんまり熱いと苦くて飲みにくいからだよ」

久「へい、戴かきます、大層甘うございます、お砂糖でも入れてありますかな」

柰「お菓子を上げなよ」

花「はい」

と云いながら蕎麦饅頭時雨饅頭などを紙の上に山盛に致し、久八の前に差出さしだす。

久「こんなには戴かけません」

柰「皆喰みんなべなくつても宜しい、余あつたら持つて帰つて子供にお上げな」

久「これは恐入りました、御大家様は違つたもんでございますな、一寸お菓子にも饅頭ちよつとを三十も四十も積上げてお出しなさる、大きなものでございます、矢張やっはり其の人に備わる徳不徳で、私わたくしなぞは精出して明樽を買つて歩くのでございますな、有難うぞんじます、時に樽はお幾つございますな」

杓「樽を売るのはじゃない、少し相談をしたい事が有りますのだが、久八さん誠に恥入つた事ですが、藤野屋杓左衛門折入つて、此の通り手を突いて願いたい事があるのだが、何うぞお聞濟みを願いたい」

とこれから縁談の事を申入れるというお話でございしますが、一息つきまして直すぐに申上げます。

十七

多助が身代を仕出しますには、女房が悪くつては迎とても身代を大きくする事は出来ません。多助の女房になりますのは前回まえに申上げました通り、御用達藤野屋杓左衛門の娘お花で、実に別嬪でございします。女は容貌みゆめ形ばかり美よくつても心掛が悪くつては何にもなりません

が、此のお花さんは海も山も備わった、実に何んとも云えない佳い娘で、此の御用達の娘が計り炭屋へ嫁に行くと言うは実に妙なもので、縁と云うものは不思議な訳で、随分大阪のものも東京ものと夫婦になり、東京のものと長崎のものと夫婦になり、只今では欧羅巴の人と日本の人と教会で葡萄酒を飲んで婚礼をするという世の中になりましたが、縁は妙なものでございます。之を障子に譬えて見ますと、障子に遣う木は何国の山の木か知りませんが、それへ美濃で製した紙を張つて障子になります。骨ばかりでも紙ばかりでも障子にはなりません。此の二つが持合いで一つのものになりますから、心掛の悪い女房を持つても悪い亭主を持つても捨てる事は出来ません。私のような穢い衣服は南部で出来た表に、青梅飯能辺で出来ました裏を附けますと一對の夫婦で、表は亭主裏は女房ですから、折目正しく整然としていれば一對の夫婦でございませうが、それを亭主の方で浮気の汚をつけたり、女房の方で嫉妬の焼け穴でも拵えたり何かすれば、これを離して外の裏と合せると再縁になるようなもので、合せものは離れものでございます。いつでも折目正しくして居れば整然として二世も三世も夫婦になつて居ります。夫婦は三世という縁合のものですから少しの愠気ぐらいで私ア出て往くから一本お書きなんて、全体女が男に一本かけないと云うのは可笑しいわけでございます。其の時御亭主が癩癩が起つて居りますと、直ぐ

に三行半を渡して出されますと、合せものは離れもので、再び帰ることは出来ないから、嫉妬やきもちの起つた時は、嫉妬腹やきもちばらを立つてはいけません、愠気いづみは疑り、疑りは愠気いづみの玉子で、女房が旦那は何処かへ女か何か出来やしないかと思うと、これが嫉妬やきもちの玉子で、すると御亭主のする事なす事そう見えます。旦那が少し春気はるけで頭髮あたまが痒かい、から床屋を呼びにやってくれと云うと、はてな、まだ毎いっもより少し刈込みがお早いが、それには何処かへお出いでなさるのだろう、それに此の間香水の良いいのを二本買つてお出いででなすつたのは変だなと、胸がムカくと愠気いづみが起つて、そうすると声の出方が違います。

女「お召し物は何が宜しゆうございます」

亭「そんなに良いいのはいりません、結城紬ゆうきつむぎの着物に、絹けんちゆう 紬ちゆうの羽織はねおりで宜しい」

と云うと、いつもはお召縮緬めしちりめんの召物めしものだが、今日は渋いお装なりをして見せようと思つて、又モヤくとして、

女「車を言い附けましようか」

亭「車は外そとで乗りますから宜しいよ」

というと、ハ、ア家うちへ知れないように外でお乗りなさるなと思ひ、又またモヤくとしまして極ごくお毒どくでございます。其の嫉妬やきもちの起つた時結構な一首の歌がありますからお教え申

します、「雲晴れぬ浅間の山の浅ましや人の心を見てこそ止やまめ」という歌ですが、モヤくと火の燃えるように誠に浅ましい了簡で、御亭主が浮気をしたか何うだか、宜く見て悋気を起せばいゝに、そこで人の心を見てこそ止やまめというのでございます。それですから悋気の起つてモヤくとした時には「雲晴れぬ」そうはいけません、お氣をお注つけあそばせ。扱さて多助のお話でございますが、お花は多助の志を見抜いて嫁に往ゆきたいというのですから、浮気のように浮気でない。親父もお花が多助の所へ嫁に行ゆきたいというのを聞いて心嬉しいから、

柰「さて樽屋さん」

久「誠に有難いことで、樽はお幾つございます」

柰「樽ではない、お前さんと毎日一緒に家うちの側の葭よし簣ず張はりに休んで話をしてる炭屋さんは何処の人ですえ」

久「あれは私わたくしの隣となりで」

柰「お前さんの家うちを知らない」

久「本所相生町でございます」

柰「あの炭屋さんはお内儀かみさんがありますか」

久「え、彼の人は八月の十五夜に店を開いたばかりで、まだお内儀さん所ではありません」
 左「へい、何処の人だえ」

久「上州沼田の人だと申しますが、誠に面白い人でございます」

左「左様かえ、あの炭屋さんさんに女房を一人世話をしてお貰い申したいが、強たつて往ゆきたいという人があるんだから、女房に持つて呉れようかね」

久「へい、それはお宅の御飯炊ごぜんたきですか、彼の人は男振は宜しゆうございますが、何しろ真黒に成つて働きますから、紺屋こうやなら真青まつさおだが、炭屋だから真黒でどうも」

左「誠に恥かしいが、これに居るのは私の娘で、年は廿一に成つて臺とうに立つて、誠に良い縁がありませんが、あの炭屋さんを見て嫁よめに往ゆきたいと云い、私も遣よりたいと思うが、お前まへさん媒なこうど妁どになつて貰もらいたいものだ」

久「何方様どなたさまをえ」

左「これに居る娘で」

久「へい、このお嬢様、アハ、御冗談ばかり云つて、御大家様などはお閑ひまでお退屈たいくつでいらつしやるのだから、樽買つづみを呼んで遊あそぼうという御冗談ご冗談でございませう」

左「詐いつわりではありません、藤野屋左衛門は帯刀御免おびとうごめんであります、此の通り手をついて

お願い申します」

久「そんなら本当でございますか、あの間違いではありませんか、計り炭屋でございますか」

杓「左様」

久「何処がお見込でお嬢様は嫁に入いらつしやいますな」

杓「姿なりかたち形に惚れたのではない、唯たつた一つ娘の見込があります、只たつた一つ臍から二寸ばかり下に見所があるのサ」

久「へい、お嬢様は何どち処のお湯ゆに入いらつしやいます」

杓「なアに心にさ」

久「ハ、ア成程、心は二寸ばかり下ですな、お嬢様本当でございますか」

と云われ、流石さすがは処女おほこ気に真赤になりました。

久「あれは感心でございます、佐久間町の山口屋善右衛門の所に奉公をして白鼠と云われるくらいで、あれは變つて居ります、それをお嬢様が見抜いて嫁に入いらつしやる、貴方が遣ありたいと仰しやる、彼の人も仕合せですな、宜しゅうございます、屹度お世話致しまし
よう」

奎「本当かえ」

久「どんな事がありましたも屹度お世話をします」

奎「あゝ、そんなに煙管で青磁の火入を敲いては瑾がついていけないよ、そして其の煙管は私のじゃないか」

久「これは旦那様のお煙管で、とんだ粗忽をしました」

奎「おい何処へ駆出して行くんだ」

久「あゝ又間違えた、煙管の吸口を洗おうと思つて私の口を洗つた」

奎「何の事だ」

久「宜しい、屹度お世話申します」

奎「あゝ、まだ用があるよ、おいゝ其方へ行つちやアいけないよ、アラ垣根を跨いで出て行つてしまった、粗忽かしくつて仕様がな」

それより久八は急いで多助の宅へ参りまして、

久「多助さんゝ」

多「何うした、もう歸つて来そんなものだと思つて待つていた、あゝゝ草鞋を穿いたなりで家へ上つちやアいけないじゃないか」

久「多助さん慌てなさんな」

多「お前が慌てゝ居るんだよ」

久「多助さん、お前の云う通り運は天から授からず、お前知ってるだろう藤野屋左衛門さんを」

多「むゝん、藤野屋、知ってるよ」

久「どうも頭髪あたまがこんなでどうも」

多「藤野屋の頭髪あたまがか」

久「なアにお嬢様いゝおんながサ、年が廿一で美いゝおんな女なだねえ、それがお前の所へ嫁よめに往ゆきたい遣りたいと云つて、藤野屋の旦那が縁側へ手をついて、お前さんに媒なごうど妁どを頼むといつて、どうも美いゝおんな女なだ、お前に見せたいよ、あゝ云う大家たいけから嫁よめが来るつてお前はどうも仕合せだ、どうも大きな家うちだよ、座敷いぐまが幾間いくまもくゝあつて、庭も大變立派だよ、其の代りに掃除が届かないね、松葉が一杯にこぼれて居るよ、そうして良菓子いを、あゝ忘れて来た、惜しいことをした、それで茶を入れて、温ぬるいのがいゝのだつて、甘い良茶いで、どうもあのお嬢様お前お貰いいよう、お貰いいよう」

多「お前のいう事は何だか些ちつとも訳わけが分らない」

久「嘘じゃアない、お貰いなさい」

多「藤野屋の娘は己見た事はあるが、美女だ、全くそう云うのか」

久「全くつて藤野屋の旦那が手をつけて頼み、お嬢様が真赤になったよ、真実だよ」

多「お前は今年の十五夜から交際つていて、口と心と違った事はねえから正直な人だと思つていたが、お前遊ぶじゃアねいなア」

久「遊ぶじゃアねえ、お前より此方が遊ばれると思つていたら、本当だった」

多「本当に藤野屋左衛門が一人娘を己に呉れると云えば、藤野屋は横着な奴だなア」

久「何で横着だ」

多「己が働きを見抜いて彼奴が嫁によこそうと云うのは、どうも油断がなんねえ、駄目だから断つてくんねえ」

久「なに断る、多助さんお前勿体ねえ事を云わねえもんだ、彼れを貰えば長持が幾棹、田地が幾許来るか知れねえ、これが本当の天から授かつて来た宝じゃアねえか」

多「駄目だねえ、私ア計り炭屋、先方は御用達で金はんべいが、幾ら有つても使えばなくなつてしまふ、己ア稼ぎじゃア夫婦俱稼ぎでなければなんねえに、先方はお嬢様だから飯は炊けねえし、味噌漉を提げて買物にも往かれめえ、己ア家へ来ても女中でも一緒

に附いて来て朝寐あさねをして、お引ひきずりで銀の股引を穿いた箸をチャラ／＼云わして飯を食つて居ちやア、飯が食えねえ、そうすると幾ら有つても直すぐに金がなくなってしまう、身代の為にならねえ、釣合わぬは不縁の元だからお断り申す、往つて断つて来てくんねえ」

久「フウン成程、お飯まんまは炊けねえ、己おらア一途いに宜いと思つて、屹度世話をすると云つたら断るのは間が悪いねえ」

多「間が悪くつても断つてくんねえ」

久「あゝ／＼鼻の先にぶら下つている宝を取らねえのか、残念だなア、仕方がねえ、往つて断つて来よう」

と云いながら久八は藤野屋へ参り、

久「へー参りました」

杓「今度は表から来たか」

久「先刻戴いたお菓子は持つて参ります」

杓「炭屋さんに話をしましたか」

久「へい、話しましたがどうも」

杓「うっかり返事をしますまいねえ、御用達の娘と炭屋とは釣合わぬ、釣合わぬは不縁

の元ぐらいの事は云いましたろう」

久「あなた立聞をしましたろう」

奎「なアに立聞はしません、彼の人だから其の事は云いましたろう」

久「其の通り云いましたよ、夫婦俱稼ぎをするのだから、金は使えばなくなる、お嬢様だからお飯は炊けず、味噌澆を提げて買物にも行けねえ、お引摺りでは身上の為にならねえからお断り申すと云いました」

奎「成程至極尤もだが、何ういう人の娘なら嫁に貰うだらうね」

久「計り炭屋でございませうから、明樽買いの娘でもあつたら貰いませう」

奎「お飯を炊くのは習わせなかつたが、柔らかい物を着るのは嫌いで、針仕事も覚え、髪も自分で結いますが、飯を炊くことは知りませんが、宜い、久八さんお前さんに娘を遣りましょう、お前さんの家に一年でも半年でも置いて、お飯も炊かせ、徳利を提げて買物に往かれるようにして、多助さんの所へ嫁にやつて下さいな」

久「あの私の娘に、本当でございませうか」

奎「嘘は吐かない」

久「宜しい、これで多助さんが貰わないと云えば喧嘩をします、忘れないでお菓子を戴い

て参ります、左様なら」

と又歸つて、多助に藤野屋の申した事を話しますと、多助は首を傾けて思わずハタと膝を敲きまして、

多「成程面白い、明樽買へ彼れ程の大家の娘をくれて、計り炭屋の嫁に遣りたいと云うなら貰つても宜しい、お前の娘なら貰おうが、私一存で定める事は出来ない、主人に相談して主人が持つてもいゝと云えば貰おうから、暫く待つておくんなせえ」

久「そんなら早く往つて相談して来るがいゝ」

とこれから多助が参りますのでございませうが、中々冗には歩きません、炭荷を担いで、「計り炭は宜しゆう、計り炭は宜しゆう」と商いをして儲けながらまいります。山口屋の納屋の所へ荷を下しまして店の方から入り、

多「番頭さん御無沙汰をしました」

和「いや暫く来ないが何うしたえ、旦那様も案じて入つしやる、色々風聞も聞いたが大分繁昌だそうで、誠に結構だねえ」

多「え、直ぐに旦那様にお目にかゝり、お話し申してえ事があつて参りやした」

和「そうかい、台所の方へお　り」

といいますから、多助は草鞋を脱いで上ります。番頭は多助のまいりました事を主人に知らせますと、主人も大きに喜んで、

善「誠に宜く来た、私も逢いたいと思つていたが、尋ねもしず、一人で嘸忙がしかろうと思つて案じていた」

多「誠に御無沙汰を致しました、切めて一日置きにもお見舞に出てえと思つて居りやしたが、見世を出して夜も商いをしやすから、忙しくつてつい御無沙汰をしました」

善「却つて無沙汰の方が宜しい、誠に宜く来た、何か用があつて、何か話したい事があるそうだが何だえ、おいお前、多助が来ましたよ」

女房「宜くお出でだねえ、此の間芳に尋ねてやれと云つたけれども、寄りもしず、塩梅でも悪い時には独りものだから、薬を煎じる者もなくつて困るだろうと思つていたが、大層繁昌だそうで、蔭ながら喜んでいますよ」

多「誠にそれもこれも皆旦那様のお蔭で、誠に繁昌して、此の節は粉炭も無くなりましたから、旦那様の炭を買つて打毀して売ろうと思つて、そうして私もこれから稼いで金を貯めて、国へ歸つて家を建てゝいと思つて居りやす」

善「それは誠に結構な事で」

多「就きまして私嫁わしめを一人貰えと云つて、人が世話をしやすが、一人口は食えねえが二人口は食えるという譬たとえもありやすから、旦那さまがまあだ早いといえは持たずに居やすし、持つても宜いいといえは貰おうと思つて、旦那様に相談に來やした」

善「世話をする人があれば貰うがいよ、媒なこうどぐら介口と云うものは甘い事うまを云うものだから、能よく先方さきを問き糾くして貰うが宜いしい、再縁でもする女か」

多「旦那斯ういふ訳でございます」

とこれから明樽買の世話で、親元はこれくと申して、明樽買の娘にして貰おうという事話を話しますと、山口屋善右衛門は案外の話に實に感心しまして、

善「多助それというのもお前の心掛にある、神かみほとけ 仏のお恵みにあるから、これを貰わな
いと云う訳はない、貰えくく」

多「はいくく」

女房「誠に思掛けない話じやないか、其の親が遣ろうというのも感心だが、娘がお前にサ、お前だつて男は悪くはないが、担かぎ商あいをするのを見抜いて來たいという其の子も感心では
ありませんか、ねえ旦那」

善「誠に結構だ、己なこうどが媒なこうど妁どをしましう」

多「それはいけません、藤野屋から来るなら山口屋の旦那様の媒^{なごうど}灼^{とく}が宜しいが、明樽買の岩田屋久八の娘にするのだから、山口屋の旦那じゃアいけません、少し過ぎますが、番頭さんが家^{うち}を持つて、夫婦一対揃^{そろ}つて居るといふから、和平さんにお頼み申しませう」

善「宜しい、そんなら和平に言い附けるが、婚礼は何日^{いつ}だえ」

多「先方^{さき}は何といふか知んねえが、十二月の十五日と定め^きました」

善「それは何う云う訳で」

多「日は吉^いいか悪^いいか知らねえが、私^{わし}が国を出たのが八月十五日で、店を出したのも十五日だから、大切の日を忘れねえ為め十五日にしましょう」

善「左様さ、三日^{さんじつ}だから至極宜しかろう、それだが隣^すから直ぐ来るのは変だろから、何処へか　つて来るかえ」

多「なアに直ぐに来やす」

善「何処か高張でも出す所があるだろう」

多「婚礼は何うか昼^{うま}の午の刻に願^{ねが}えてい」

善「それは可笑しい、お大名の婚礼なら午の刻だが、計り炭屋の婚礼に昼は可笑しい、夜がいゝよ、夜がいゝよ」

多「どうかそれだけは昼にして下せえ、夜は出来ねえ」

善「何故夜は出来ない」

多「それでも夜すると商いが出来ねえ」

善「商売は一日ぐらい休んでも宜いじやアないか」

多「それは私わしが構かまわねえが、方々の内儀かみさん達が待つて居るから、朝は商売に出なければなんねえ、又夜は家うちで商いをするから、遠くから内儀かみさんが前掛まえかけの下へ味噌みそ澆こしを入れて買かいに来るのに、今日は家うちが婚こ礼れいだからと云つて断ると冗むだ足あしをするべいじやねえ、炭すすがなければ此この寒ひやいのに木片こっばを焚こいてブウ〜云つてあたるくらいで、大勢おほいの人に寒ひやい思おもいをさせなければなんねえから、朝商あさかひいをして夜商よるかひいをして、それから寐ねせえすればよかんべい」

善「そりやア寝るのは宜いいが、成程なりほど人の難儀なんぎになるのだから其の方が宜いかろう、それじやア上かみ下しもを着るかね」

多「どうして〜」

善「先方さきが藤野屋ふじのや左衛門ざゑもんだから婿むこも上かみ下しもぐらいは着きなくつちやアなるまい」

多「なアに私わしア此この筒袖つっぽで宜いうがんす」

善「どうか身の出世だから袴羽織でやって呉れ」

とこれから和平を呼んで話しますと、和平も大きに悦んで承知しました。

多「旦那様どうか一寸着物と羽織を貸しておくんなせえ」

善「何処へ往くんのだ」

多「これから往つて来る処があるから」

善「どんな着物がいゝな」

多「なアに一寸したので宜うがंस」

善「これ忒のを貸してやれ、結城紬のが宜しい」

とこれから着まして、多助が戸田様のお屋敷へ参り、実父鹽原角右衛門に会い、婚礼の事を相談を致しますというお話でございますが、一寸一息つきまして申上げましょう。

十八

多助は主人山口屋善右衛門から着物と羽織を借り、これを着まして戸田様の屋敷にいる実父鹽原角右衛門の所へ往きましたが、丁度十ヶ年ぶりでございます、尤も五年前危難の

節実父には逢いましたが、そうそつ 卒に別れましたゆえ、今日はしみ 染々物語をしようと思ひ
まして屋敷へまいり、

多「お頼み申します、お頼み申します」

男「どーれ」

多「手前は山口屋善右衛門の手代多助と申します、旦那様へお目通りを願ひやす」

男「左様か、少々控えて居れ……え、山口屋善右衛門方の手代多助と申すものがまいりまして、旦那様へお目通りを致したいと申します」

角「なに多助がまいつたと、如何どういう形なりでまいつた、また筒袖つゝぼを着てまいつたか」

男「いゝえ羽織を着て参りました」

清わたくし「私もあれぎり逢いませんから、どうか貴方お義理堅いのも程がありますからお逢い下さいまし」

角「多助をこれへ通せ」

男「はい」

と云いながら玄関へまいり、

男「此方こちらへ通らつしやい」

多「はい」

と云つて座敷へ通りましたが、母の顔は十年ぶり、父の顔も五年前ぜんに見たが真の闇で見たのですから能く分りませぬ。多助は実に懐かしく胸が塞がって、

多「御機嫌宜しゅう」

と云うなりにピツタリ畳へ頭を摺付けて居ります。

角「誠に久しく逢いません、人の噂に山口屋善右衛門方の奉公を勤め上げて、何か本所へんへ店を出して、大分繁昌の様子も聞いて居つたが、何か用事があつて参つたとか、用向を申せ、互たがいに無事でいてめでたい」

多「私わたくしもお目に懸りてえと思つて居ても、奉公の中うちは只お屋敷で御両親様のお達者で入いらつしやると云う事を蔭ながら聞きますばかり、私わたくしも望みが叶あひまして山口屋を首尾好く十一年勤め上げ、相生町へ店を出し繁昌して忙がしいので間合まあいもなく、夫故それお屋敷へも出ませんでしたが、今日は御機嫌伺いながらまいりまして」

清「誠に旦那様もお年をとるし、最もう尋ねて来そうなものだと思つていても、旦那様はお義理がお堅いから沼田の養父に済まんと仰しやつて、お逢いなさらなかつたが、今日は立派になつて来て誠に嬉しい事で」

多「私も嬉しゅうござえます、就きまして国へ帰ろうと思つて居りましたが、山口屋に預けた金が三百両ばかりで、国に歸つて家を立てべいと存じましたが、江戸で稼いでもう七八百両貯めてから歸るべいと思ひやして、店出しをしやした所が、有難え事に繁昌します、私もまだ三十一だから今年も稼げば国の家も大きく立てられ、親類の家も立てべいと思つて居りやした所が、女房を世話をする人があつて、主人も得心でござえますが、持つても宜しいか宜しくねえか伺えに参りやした」

角「誠に手前が堅くして居る所からそう云う訳になるので、誠に恐悦の事だ、何ういう者の娘じゃ、山口屋善右衛門が得心で持たせるという女房なら宜しい、それは結構だ」

清「最うこんな立派に成つて来ましても、矢張小さい心持で居りますが、女房を持つようになつて誠に結構だねえ、先方は何う云うもので、女房の身分は」

多「身分はこれく」

と前申上げました藤野屋の事から、明樽買の娘にして貰う事を細かに申すを聞いて、角右衛門は学問のある人だけに暫く考えて、

角「多助、誠に得難い幸いだ、貰えく、向うも藤野屋全左衛門の娘、仮令樽屋からよこしても、婚礼の時は世間へ対して振袖ぐらいは着せてよこすだろうな」

清「そりやア貴方たしえ仮令炭屋でも婚禮の席は立派にしなければなりませんから、嫁も地赤しあかに縫い模様の振袖に白の掛位かけは着なければなりません、多助も世が世なら上かみしも下しもぐらいは附けなければなりません、運悪くあゝ云う事になつたから、どうか貴方御紋付を遣つて下さいまし」

角「そうサ、上かみしも下しもも入るなら遣るから持つて往ゆくがいゝ」

多「主人から紋付の着物と羽織と袴を祝つてくれましたからいりません」

角「何を出せ、袴と盛景もりかげを出せ」

と備前盛景の一刀を出させまして、

角「これは手前の身の固めの祝いとしてやる、又此の五十金も遣つかわす」

多「誠に有難い事で、お身に附きました物を戴きますのは誠に有難うございますが、お腰の物は炭屋には入りませんから頂戴致しません」

角「左様で無い、町人でも脇差の一腰ぐらいはなければならんものだ、これは祖父様おじいさまからのお譲りものだから取つて置け」

多「へい、それでは戴きやすが、此の五十両は戴きません」

角「だが、宜く考えて見ろ、沼田の鹽原角右衛門殿は同姓の交誼よしみで手前を藁の上から取上

げて育て、八歳に成つて返す時、礼として五十金を贈られ、拙者は其の五十金を持つて身み姿なりを整え、江戸へ出て只今斯うやつて三百五十石頂戴致すようになったのは、角右衛門殿の恩義、其の時申し受けた金を只今返金に及ぶのだから、此の金を以て沼田の家いえを立てる足しにすれば、己の気も済むから、これは強たつて受取れ」

多「御尤もでございますから、此の金を以て養父の法事をいたし、余りで馬でも買いますようにしましょう」

角「婚礼は幾日いくかだな」

多「え、来月十五日でございます」

角「夕景から行つて模様を見たいな」

多「婚礼は正午しょうまの刻に極めました」

角「はてね、何ういう訳で」

多「これには深い訳があります」

角「左様か、立派にやれ、立派にやれ」

清「あゝ是は挿さしふる古こした櫛こうがい笄むかしもの、昔むかしもの物ものゆえ気には入るまいけれど、嫁御よめごへ私が心ばかりの祝いわいもの物もの、常に此の櫛こうがいと笄こうがいをさして舅姑しゅうとめが側に居ると心得、油断なく家いえを思い、夫を大

切に致すよう私が申したと云つて遣わしておくれ」

多「ハ、有難く戴きます、左様なら御機嫌宜しゆう」

と暇乞いをしますと、両親が玄関まで送つて来まして、嬉し涙をこぼしますを見て、多「左様なら時節があれば又お目に懸ります」

と云いつゝ別れを告げ帰つて来まして、早速久八を以て藤野屋へ挨拶を致しますと、藤野屋のお嬢様はこれから十五日まで樽屋久八の家で御飯炊の稽古を致して居ましたが、扱て十二月十五日となりますと、女親は妙なもので、たとえ樽屋へ遣つても嫁に往く時の品とて拵えて置いた縫模様の振袖は多助に話をして、当日だけは着せて遣りたいと云う。

多助は袴羽織でお花は縫模様の振袖と大和錦の帯を締め、髪は文金の高髷にふさ／＼と結いまして、少し白粉も濃く粧けまして、和平夫婦が三々九度の盃を手に取上げる折から、表の方から半合羽を著て、今河岸の船から上つて来たという様子で這入つてまいりましたのは、炭の荷主で、飛駒村の吉田八右衛門でございます。

八「はい、御免なさい、誠に無沙汰しやした、和平どもも此方かね」

和「これは何うもお珍らしい、当方も芽出度い事がありました参つて居ります」

八「店出しをするという事を聞いたから、炭荷を送らなければ多助さんに嘘をついたよう

だから、何うか送りてえと思つて居たが、中々千両の炭が集まらねえのを、漸々集めて、十三艘の船へ積んで河岸へ持つて来たが、川が狭えから棧橋が邪魔になつて仕様がねえ」多「はアどうも有難うがんす、私が家は今日婚禮でがんすから、マア上つて俱に一盃あがつておくんなせえ」

八「婚禮処じゃねえ、炭を揚げなくつちやア他の舟の邪魔になつて仕様がねえ、炭を揚げてから婚禮を仕なせえ」

と云うから、多助は紋付の着物の片肌脱ぎで臀を端折つて、向う鉢巻を致しまして、せつせと炭を担ぎ始めました。そうすると嫁も、

花「私の振袖を結んで下さい」

和「何をするんだ」

花「何でも宜しい」

と云うから結んでやりますと、子供が水悪戯をするような形をしてお花は両裾を高くはしより、跣足で河岸へ出て往きまして、

花「旦那様お一人でお忙がしゆうございませうから、私も担ぎませうから、軽そうなのを下さいまし」

多「好く来た、担いでくれ」

花「はい」

と云うので、これから担ぎますから、久八、和平も手伝つて担ぎましたから、忍ち家の見えないうちに炭を積み上げ、芽出度婚礼を済ませて、八右衛門は媒妁と共に別れて帰ります。これから夜になると夫婦で商いをしますと、多助の家へ嫁が来て、これ〜と云うから、嫁を見ながら方々から買いに来ます。これから商いをしまつて愈々床盃と相成ります。

多「芽出度いなア、己ア斯うやつて真の親父に貰つた紋付の着物を着て、お前と話をすんだア」

花「はい〜」

と恥かしそうな顔をして居ります。

多「誠に不思議な訳で、己ア家へ嫁に来て己ア醜男で誠に何処と云つて取り所も何もねえが、己ア精神を見抜いてお前の親父様もくれたゞから、未長く成るべいが、夫婦は初見にあると云うから、婚礼をする時に堅く約束をしなくっちゃアならねえが、己アような者でも亭主に持てば、己ア言葉を背かねえか」

花「はい、決して背きませんが、不束ふつゝかものでございますから、宜く御用をお言い付けなすつて下さいまし、漸く御飯ごせんは炊けるようになりました」

多「そうだつてなア、お前めえと六十八十までも夫婦になるだが、お互たけえに気に入らねえ所が出来、どうも嫁は彼処あそこは宜いい此処が気に入らねえ、どうも腹あは立つていけねえと云えば、お前めいも、己おらア旦那はどうも彼処あそこはいいが腹あは立つていけねえとか何とか思う事があるものだが、お互たけえにいけねえと思うと、一つ所ところにいるのが厭いややになるから、いけねえ所ところは取つて打棄うちやつてしまつて、善いい所ところべいで夫婦になつて居べいぜ、いゝか」

花「至極御尤もでございます」

多「そうサ、これより尤もつともな事はねえ、そこでお前めえは御用達の娘で、計り炭屋へ嫁に来て、味噌みそ漉しを提げると云う心は此の多助が仇あだには思わねえ、己おれも死に身になつて働き、お前めえも働いて此の身代でかを大きくして、人には云えねえが、時節次第しでいで少くも本所半分は己おれが地面でかにしべいと思うのだ、そうはいくめえが棒程願つて針程叶なえだから、大でかくやるべいや」

花「はいゝ」

多「それには儉約けんやくをしなくつちやアいけねえ、吝嗇けちにするのじゃアねえ儉約をするだよ、吝嗇けちとは義理なまけも情なさけも知らねえで、奉公人などに食う物も喰くわせず、着る物も着せねえで人

を困らせても構わず無闇に金を貯るのを吝嗇と云つて極いけねえのだ、それから自分が一杯食う物を半分食つて、彼れは欲しい、買いてえと思つても堪忍してやれと云つて半分に置いて置く、それが儉約の本だ、それを天地に預けて置けば利が附着いて来る、其の時は五枚でも十枚でも一時に着られるようになるから、十年が間稼がなければなんねえ、今に子供でも出来る骨え折れるから確かりやつて呉れ」

花「どのようにも儉約を致します、御膳は一度ぐらいにしましょう」

多「お飯はどんと食つてもいゝのだ、そこで儉約がいゝと云つても、明日が日死なねえものでもねえ、其の時此の家へ来て芝居見物一つ花見一つしねえと思うと愚痴が出て死ねえものだから、己が一遍は見せる、花見でも芝居でも花火でも何でも一遍は見せる、美しい着物も一遍は着せるが、二度とはいけねえ、一遍ずつだよ、それを駄目だと云うなら今の帰る方が宜い、早い方がいゝよ、それが気に入らなければお前は器量があつて、何処へでも往ける立派なお嬢様だから、立派な処え嫁に往くがいゝ」

花「私は立派な処へ往きたければ此方へは参りはしませんから、どうかお見捨てなさらないでお置き下さいまし」

多「見捨ると云う事はねえが、まあだ氣に入らねえ事がある、お前の着物は皆なあんなに

袖が長いが、彼の袖があれば子供の着物が一つ出来る、冗じやアねえか」

花「振袖物は皆な彼なに長うございます」

多「彼の袖だけ冗だから、彼れを鉋で打切つてしまふから此処へ持つて来う」

花「はいく」

と少しも逆らわず、嫌な顔もしず松竹梅の縫模様振袖を持つて来ますと、

多「これを打切るだアよ、己ア家じやア入らねえから」

花「あゝ申し旦那様、貴方は昼からお働きでお草臥れでございましょうから、私が致しませう」

と云いながら振袖を薪割台の上へ乗せて、惜気もなくザクウリツと二つ三つに切りました時は、多助も思わず手を拍つて、

多「好く切つた、それでこそ鹽原の女房だ、多助の家は此の振袖の袂にある」

と云つて大きに喜んで、実に玉椿の八千代までと新枕を交せ、それから夫婦共稼ぎを致しまして、少しも油断をしませんから、忽ち身代を仕出しましたに付、多助は予ての心願通り沼田の家を立派に再興致し、分家の家も立てまして、今日まで鹽原の家は連綿と致して居ります。また多助は江戸表に置きましても稼業に出精しまして、遂に巨き

な身代となり、追々に地所を買入れ、廿四ヶ所の地面持とまでなり、本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名炭屋鹽原と世に謡うたわるゝ程の分限ぶんげんに数えられ、其の家益いええ々々富み栄えましたが、只正直と勉強の二つが資本もとででありますから、皆様能く此の話を味あじわつて、只一通りの人情話とお聞取りなされぬように願います。此の話も余り長くなりしましたから、未だ纏まとりのつかぬ道連の小平と盲人めくらのおかめ母子おやこの事などは、鹽原多助ごにちのもの後日譚がたりとして、尚なお追々お聞きに達しますことゝ致しまして、一先ひとまず此処で打切りに致します。長らくの間御愛顧に相成りました段は深くお礼を申し上げます。

(拋若林珪藏、酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の十二」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

1975（昭和50）年2月5日3版

底本の親本：「圓朝全集卷の十二」春陽堂

1927（大正15）年発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼の」と「彼」の「と」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わ

りを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2011年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹽原多助一代記

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>